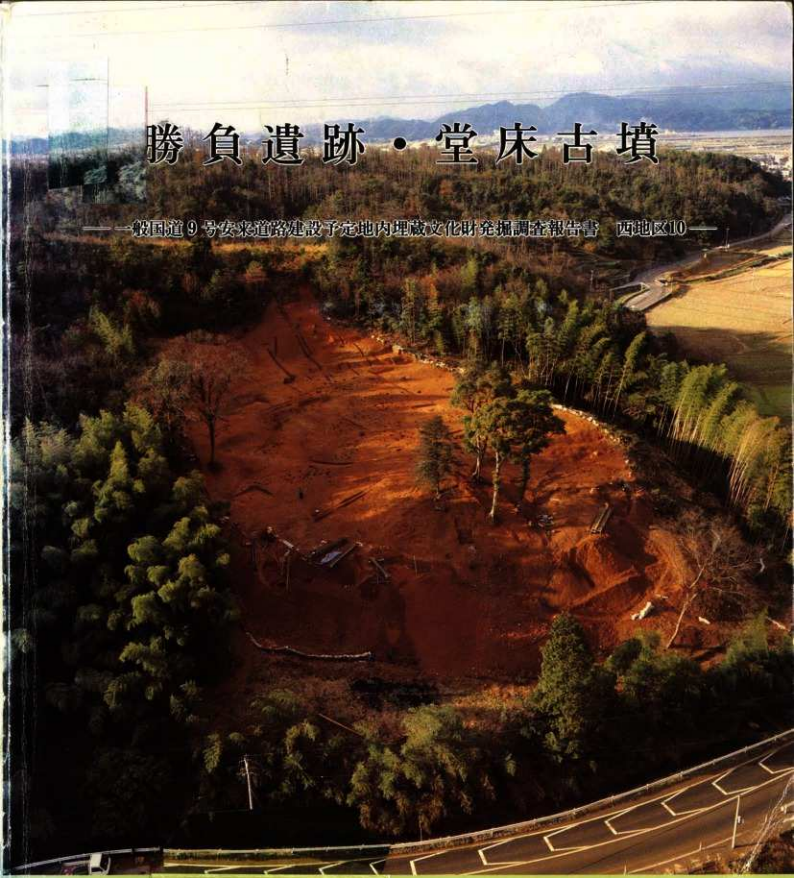
勝負遺跡・堂床古墳

——一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区10——



年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

勝負遺跡・堂床古墳

一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区10

1998年3月

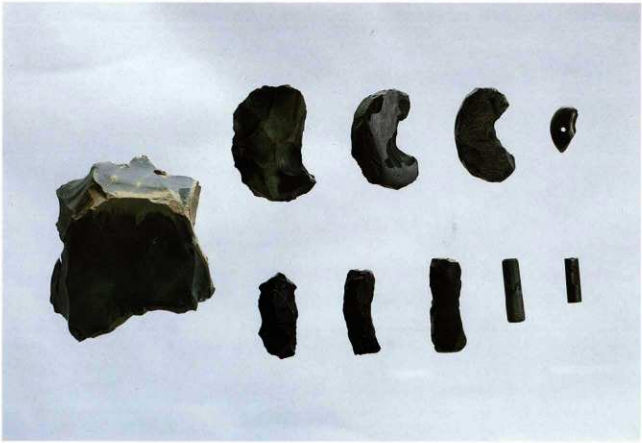
建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

勝負遺跡・堂床古墳全景（東より）

勝負遺跡に残る地震の痕跡

あらわになった地滑りのすべり面

断層により床面のずれた竪穴住居ＳＩ09



勝負遺跡出土碧玉製玉未製品

勝負遺跡木棺墓ＳＫ06出土八稜鏡

序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道９号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するため、一般国道９号のバイパスとして高規格道路安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当道路においても道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに平成元年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、７年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術並びに教育のために広く活用されることを期待すると共に、道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつすすめられていることへの理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し、深甚なる謝意を表すものであります。

平成10年３月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所
所長　大石　龍太郎

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受けて、平成４年度から一般国道９号安来道路建設予定地内（西地区）に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施しておりますが、このたび報告書第10集を刊行する運びとなりました。

本報告書は、平成７年度に調査を実施した勝負遺跡での成果をまとめたものです。この調査では、古墳時代から平安時代にかけての住居跡が見つかりました。また、古墳時代中期の玉作り工房跡や、地震の活断層により床のずれた住居跡などの発見もあり、当時の人々の生活様式や、周辺の環境を考える上で大きな成果をあげることができました。この地域は、古代出雲の中心的役割をになった意宇平野と安来平野の間に位置する所でもあり、この地域のみならず出雲地方全体の歴史を考える上で貴重な資料になるものと思われます。

本報告書が地域の歴史を解明する糸口となり、郷土の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いと思います。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり調査に御協力を頂きました建設省松江国道工事事務所、東出雲町教育委員会をはじめ、関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成10年３月

島根県教育委員会

教育長　江口博晴

例　言

1．本書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が1995年度（平成７年度）に実施した、一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2．本書に掲載した遺跡は八束郡東出雲町揖屋に所在する勝負遺跡・堂床古墳である。

3．調査組織は次の通りである。

調査主体　島根県教育委員会

事務局　文化財課　勝部　昭（課長）、森山洋光（課長補佐）
埋蔵文化財調査センター　宍道正年（センター長）、佐伯善治（課長補佐）、
渋谷昌宏（企画調整係主事）

調査員　埋蔵文化財調査センター　宮沢明久（主幹・調査第１係長）、北尾浩之（教諭兼文化財保護主事）、深田　浩（主事）、上河淳浩（臨時職員・調査補助）

遺物整理　荒川あかね、影山光子、笠井文恵、門脇卓子、金坂恵美子、菅井国江、瀬川恭子、田中路子、若佐裕子

調査指導　寺村光晴（和洋女子大学名誉教授）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、
山内靖喜（島根大学理学部教授）、西田良平（島取大学工学部教授）、
片岡詩子（玉湯町教育委員会）

4．発掘作業（発掘作業員、測量発注ほか）については、島根県教育委員会から中国建設弘済会へ委託して実施した。

社会法人　中国建設弘済会島根支部　布村幹夫（現場事務所長）、原　博明（技術員）、
木村昌義（技術員）、小川剛史（技術員）、高木由佳（事務員）、高崎益美（事務員）、
加藤道恵（事務員）
（発掘作業員）
秋間エツ子、浅野　圭、安部悦子、安部章夫、安部次郎、石倉ハルミ、石田実美、石橋徳夫、一瀬波子、内田房子、太田佐恵子、景山光子、上山根幸、川上知大、嶋本賀康、周藤トシ子、清山富子、瀬川恭子、田中邦子、玉木　章、原田幸雄、福島利幸、藤本和子、藤本百合子、冨士本裕子、細田寿美子、細田暖子、松村俊子、森広勝治、森広　薫、森広治子、森広治恵、山岡甫夫、山岡信子、山崎尚子、

5．発掘調査、ならびに報告書作成にあたっては、以下の方々から有益なご助言、ご協力をいただいた。

渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）、田崎和江（金沢大学理学部教授）、勝部　衛（玉湯町教育委員会）、河村好光（石川県立金沢北陵高等学校）、久保智康（京都国立博物館主任研究官）、柴田喜太郎（考古地質研究所）、畑　宏明（(財)北海道埋蔵文化財センター）、松本　浩（東出雲教育委員会）、米田克彦（四国学院大学）

6．挿図中の方位は、国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方位を示し、レベル高は海抜高を示す。

7．挿図の縮尺は、図中に明示した。

8．本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。
9．本書で使用した遺構記号は以下の通りである。
P（ピット）　SI（竪穴住居）　SB（掘立柱建物）　SD（溝）　SK（土坑）
SX（不明遺構）
10．本書に掲載した遺物の実測及び挿図の浄写は、主として以下のものが行った。
〈実測〉門脇、金坂、上河、亀井彰子、北尾、深田、福田市子、丹羽野裕、和田郁子、若佐
〈浄写〉門脇、金坂、若佐
11．本書に掲載した遺物の写真撮影は、門脇、金坂、福田、若佐の協力を得て深田が行った。
12．本書の執筆、編集は深田が行った。
13．本遺跡出土資料及び実測図、写真等の資料は、島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

整理作業に参加して下さったみなさま

本　文　目　次

第1章　勝負遺跡・堂床古墳の位置と環境 …… 1

第2章　調査に至る経緯と調査の経過 …… 7

第3章　勝負遺跡の調査 …… 17
1．加工段・竪穴住居の調査 …… 18
2．掘立柱建物の調査 …… 55
3．溝状遺構・土坑の調査 …… 96
4．遺構に伴わない遺物 …… 108

第4章　堂床古墳の調査 …… 127

第5章　まとめ …… 133
1．勝負遺跡の集落変遷について …… 134
2．勝負遺跡で行われた玉類の生産について …… 140
3．勝負遺跡の地震跡について …… 147
玉未製品観察表 …… 151

第6章　自然科学分析 …… 157
1．勝負遺跡ＳＩ07にみられるピット周辺の土壌の鉱物学的粘土鉱物学的研究 …… 159
2．勝負遺跡出土の玉材剥片の産地分析 …… 183
3．勝負遺跡に見られる活断層 …… 197
4．勝負遺跡の地磁気年代測定 …… 205
5．ＳＫ06出土八稜鏡付着物について …… 215
6．勝負遺跡出土鉄滓および羽口、炉壁の調査 …… 219

挿　図　目　次

第１図　勝負遺跡・堂床古墳の位置 …… 2
第２図　勝負遺跡・堂床古墳の位置と周辺の遺跡 …… 4
第３図　勝負遺跡・堂床古墳の位置と周辺の地形 …… 10
第４図　トレンチ調査時出土遺物 …… 11
第５図　勝負遺跡トレンチ３・６・10土層図 …… 12
第６図　勝負遺跡・堂床古墳調査前地形測量図 …… 13
第７図　勝負遺跡・堂床古墳調査後地形測量図及び遺構配置図 …… 14
第８図　勝負遺跡トレンチ13土層図 …… 15
第９図　ＳＸ01平面図 …… 18
第10図　ＳＩ01平面図 …… 19
第11図　ＳＩ01出土土器実測図 …… 20
第12図　ＳＩ02平面図 …… 21
第13図　ＳＩ02出土土器実測図 …… 22
第14図　ＳＩ03及びＳＤ01平面図 …… 24
第15図　ＳＩ03出土土器実測図 …… 25
第16図　ＳＩ01出土土器実測図 …… 26
第17図　ＳＩ04平面図 …… 26
第18図　ＳＩ04出土土器実測図 …… 27
第19図　ＳＩ05平面図 …… 27
第20図　ＳＩ05出土土器実測図 …… 28
第21図　ＳＩ06平面図 …… 29
第22図　ＳＩ06出土遺物実測図（１） …… 30
第23図　ＳＩ06出土遺物実測図（２） …… 31
第24図　ＳＩ07平面図（１） …… 32
第25図　ＳＩ07平面図（２） …… 33
第26図　ＳＩ07出土土器実測図（１） …… 35
第27図　ＳＩ07出土土器実測図（２） …… 36
第28図　ＳＩ07下層～床面出土玉未製品実測図（１） …… 39
第29図　ＳＩ07下層～床面出土玉未製品実測図（２） …… 40
第30図　ＳＩ07上層～床面出土碧玉接合資料実測図（１） …… 41
第31図　ＳＩ07上層～床面出土碧玉接合資料実測図（２） …… 42
第32図　ＳＩ07上層出土玉未製品実測図 …… 43
第33図　ＳＩ07上層出土碧玉石核実測図 …… 44
第34図　ＳＩ07上層出土碧玉接合資料実測図 …… 45
第35図　ＳＩ07上層出土ガラス質・滑石未製品実測図 …… 45
第36図　ＳＩ07未製品・剥片の分布状況 …… 46

第37図　ＳＩ07出土石器・鉄製品実測図 …… 47
第38図　ＳＩ07貼床除去後平面図 …… 48
第39図　ＳＩ07貼床除去後出土土器実測図 …… 49
第40図　ＳＩ08平面図 …… 50
第41図　ＳＩ08出土土器実測図 …… 51
第42図　ＳＩ09平面図 …… 52
第43図　ＳＩ09出土土器実測図 …… 53
第44図　ＳＩ09東側トレンチ14位置図 …… 54
第45図　トレンチ14土層図 …… 54
第46図　ＳＢ01～03加工段遺構配置図 …… 55
第47図　ＳＢ01～03加工段覆土出土土器実測図 …… 56
第48図　ＳＢ01平面図 …… 57
第49図　ＳＢ01溝内土器出土状況 …… 58
第50図　ＳＢ01溝内出土土器実測図 …… 58
第51図　ＳＢ02・03平面図 …… 59
第52図　ＳＢ02・03床面出土土器実測図 …… 60
第53図　ＳＢ01～03加工段出土土師器実測図 …… 62
第54図　ＳＢ01～03加工段出土須恵器実測図 …… 63
第55図　ＳＢ01～03加工段出土その他の遺物実測図 …… 64
第56図　ＳＢ04平面図 …… 66
第57図　ＳＢ04出土土器実測図 …… 67
第58図　ＳＢ05平面図 …… 68
第59図　ＳＢ05～07及び周辺の遺構配置図 …… 69
第60図　ＳＢ05Ｐｉｔ内出土遺物実測図 …… 71
第61図　ＳＢ05・06覆土出土遺物実測図（1） …… 71
第62図　ＳＢ05・06覆土出土遺物実測図（2） …… 72
第63図　ＳＢ06平面図 …… 73
第64図　ＳＢ07平面図 …… 74
第65図　ＳＢ08～17及び周辺遺構配置図 …… 75
第66図　ＳＢ08平面図 …… 76
第67図　ＳＢ08出土土器実測図 …… 76
第68図　ＳＢ09平面図 …… 77
第69図　ＳＢ10・11平面図 …… 77
第70図　ＳＢ12・13平面図 …… 78
第71図　ＳＢ14平面図 …… 79
第72図　ＳＢ14Ｐｉｔ1内出土土器実測図 …… 80
第73図　ＳＢ15平面図 …… 80
第74図　ＳＢ16平面図 …… 81

第75図　Ｐｉｔ22６出土鼓形器台実測図 …… 81
第76図　ＳＢ16Ｐｉｔ２内出土土器 …… 82
第77図　ＳＢ17平面図 …… 82
第78図　ＳＢ18・20平面図 …… 83
第79図　ＳＢ18～20及び周辺遺構配置図 …… 84
第80図　ＳＢ18出土土器実測図 …… 84
第81図　ＳＢ20出土鉄鏃実測図 …… 85
第82図　ＳＢ19平面図 …… 85
第83図　ＳＢ19Ｐｉｔ内出土土器実測図 …… 86
第84図　ＳＢ21～26周辺土層図 …… 86
第85図　ＳＢ21～26・ＳＸ02及び周辺遺構配置図 …… 87
第86図　ＳＢ21・22平面図 …… 88
第87図　ＳＢ23・24・ＳＸ02平面図 …… 89
第88図　ＳＢ23溝３内出土土器実測図 …… 90
第89図　ＳＢ26平面図 …… 91
第90図　ＳＢ21～26覆土出土土器実測図（１） …… 92
第91図　ＳＢ21～26覆土出土土器実測図（２） …… 93
第92図　ＳＢ21～26覆土出土玉未製品実測図 …… 94
第93図　ＳＢ21～26覆土出土石器実測図 …… 95
第94図　ＳＤ02平面図 …… 95
第95図　ＳＤ02出土遺物実測図 …… 96
第96図　ＳＫ01～05・09・15～17・19平面図 …… 97
第97図　ＳＫ04出土土器実測図 …… 97
第98図　ＳＫ05出土土器実測図 …… 98
第99図　ＳＫ19出土土器実測図 …… 98
第100図　ＳＫ06平面図 …… 99
第101図　ＳＫ06出土遺物実測図 …… 99
第102図　ＳＫ07・08平面図 …… 100
第103図　ＳＫ10平面図及び遺物出土状況 …… 100
第104図　ＳＫ10出土土器実測図 …… 101
第105図　ＳＫ11・12平面図 …… 101
第106図　ＳＫ12遺物出土状況 …… 102
第107図　ＳＫ12出土土器実測図 …… 102
第108図　ＳＫ13検出状況 …… 103
第109図　ＳＫ13完掘状況平面図 …… 103
第110図　ＳＫ13出土須恵器大甕実測図 …… 104
第111図　ＳＫ14平面図 …… 105
第112図　ＳＫ14出土土器実測図 …… 105

第113図　ＳＫ16・焼土１平面図 …… 106
第114図　焼土２（ＳＩ03南側焼土）配置図 …… 106
第115図　土器溜１～３・谷部遺物包含層位置図 …… 107
第116図　谷部遺物包含層土層図 …… 108
第117図　第１土器溜出土須恵器実測図 …… 109
第118図　第１土器溜出土土師器実測図（１） …… 110
第119図　第１土器溜出土土師器実測図（２） …… 111
第120図　第２土器溜出土遺物実測図 …… 112
第121図　第３土器溜出土土器実測図（１） …… 113
第122図　第３土器溜出土土器実測図（２） …… 114
第123図　谷部遺物包含層出土弥生～土師器実測図（１） …… 116
第124図　谷部遺物包含層出土土師器実測図（２） …… 117
第125図　谷部遺物包含層出土土師器実測図（３） …… 118
第126図　谷部遺物包含層出土遺物実測図 …… 119
第127図　谷部遺物包含層出土玉未製品実測図 …… 120
第128図　調査区西端斜面・地滑り断層西側平坦部位置図 …… 121
第129図　調査区西端斜面出土土器実測図（１） …… 122
第130図　調査区西端斜面出土土器実測図（２） …… 123
第131図　地滑り断層西平坦部出土土器実測図 …… 123
第132図　堂床古墳調査前測量図 …… 128
第133図　堂床古墳調査後測量図 …… 129
第134図　堂床古墳出土遺物実測図（１） …… 130
第135図　堂床古墳出土遺物（２） …… 130
第136図　堂床古墳出土遺物（３） …… 131
第137図　勝負１期：古墳時代前期の集落 …… 135
第138図　勝負２期：古墳時代中期前半の集落 …… 135
第139図　勝負３期：古墳時代中期後半の集落 …… 136
第140図　勝負４期：古墳時代後期前半の集落 …… 137
第141図　勝負５期：古墳時代後期後半～終末期の集落 …… 138
第142図　勝負６期：奈良・平安時代の集落 …… 138
第143図　碧玉製勾玉の製作工程 …… 144
第144図　碧玉製管玉の製作工程 …… 145

図　版　目　次

巻頭図版１　勝負遺跡・堂床古墳全景（東より）
巻頭図版２　勝負遺跡に残る地震の痕跡
　２上・あらわになった地滑りのすべり面　下・断層により床面のずれた竪穴住居ＳＩ09
巻頭図版３上・勝負遺跡出土碧玉製玉未製品　下・勝負遺跡土壙墓ＳＫ06出土八稜鏡
図版１　上・上空から見た勝負遺跡・堂床古墳　下・勝負遺跡上空から東方を望む
図版２　上空から見た勝負遺跡・堂床古墳全景
図版３　上・調査前の勝負遺跡平坦部　下・調査前の勝負遺跡平坦部
図版４　上・ＳＸ01全景　中・ＳＩ01床面検出状況　下・ＳＩ02床面検出状況
図版５　上・ＳＩ01全景　中・ＳＩ02全景
図版６　上・ＳＩ03土層図と床面傾斜状況　下・ＳＩ03全景
図版７　上・ＳＩ03床面検出状況　中・ＳＩ04検出状況　下・ＳＩ04全景
図版８　上・ＳＩ05検出状況　中・ＳＩ05土器出土状況　下・ＳＩ05落ちこみ部土器検出状況
図版９　上・ＳＩ05全景　下・ＳＩ06全景
図版10　上・ＳＩ06遺物出土状況　下・ＳＩ06ピット内土器出土状況　下・ＳＩ07遺物出土状況
図版11　上・ＳＩ07床面検出状況　中・ＳＩ07床面検出砂利敷　下・砂利敷の断面
図版12　上・ＳＩ07全景（貼床除去前）　下・ＳＩ07全景（貼床除去後）
図版13　上・ＳＩ07壁際ピット　中・作業風景　下・ＳＩ08検出状況
図版14　上・ＳＩ08全景　下・ＳＩ09全景
図版15　上・ＳＩ09検出状況　中・ＳＩ09遺物出土状況　下・ＳＩ09ピット内土器出土状況
図版16　上・ＳＢ01全景　下・ＳＢ01溝内土器検出状況
図版17　上・ＳＢ04全景　中・ＳＢ04全景　下・ＳＢ04溝内土器出土状況
図版18　上・ＳＢ05・ＳＢ06全景　下・ＳＢ08全景
図版19　上・ＳＢ09全景　中・ＳＢ10全景　下・ＳＢ14内土器出土状況
図版20　上・ＳＢ18全景　下・ＳＢ21～26．ＳＸ02全景
図版21　上・ＳＤ02全景　下・ＳＫ01
図版22　上・ＳＫ02　中・ＳＫ03　下・ＳＫ04
図版23　上・ＳＫ05　中・ＳＫ06　下・ＳＫ06八稜鏡、紡錘車出土状況
図版24　上・ＳＫ07．08　中・ＳＫ09土層図　下・ＳＫ10土器出土状況
図版25　上・ＳＫ11　中・ＳＫ12遺物出土状況　下・ＳＫ13須恵器甕検出状況
図版26　上・ＳＫ13須恵器甕検出状況　中・ＳＫ13完掘状況　下・土師器甕検出状況
図版27　上・ＳＫ15　中・ＳＫ16土層図　下・ＳＫ17
図版28　上・ＳＫ18土層図　中・ＳＫ19遺物出土状況　下・焼土１
図版29　上・調査前の堂床古墳　下・調査前の堂床古墳
図版30　上・堂床古墳全景　下・堂床古墳全景
図版31　上・堂床古墳全景　下・調査参加者
図版32　勝負遺跡試掘調査時出土遺物

図版33　勝負遺跡ＳＩ01出土遺物
図版34　勝負遺跡ＳＩ02．03出土遺物
図版35　勝負遺跡ＳＩ03出土遺物
図版36　勝負遺跡ＳＩ03．04．05．ＳＤ01出土遺物
図版37　勝負遺跡ＳＩ05．06出土遺物
図版38　勝負遺跡ＳＩ06．07出土遺物
図版39　勝負遺跡ＳＩ07出土遺物
図版40　勝負遺跡ＳＩ07出土遺物
図版41　勝負遺跡ＳＩ07．08出土遺物
図版42　勝負遺跡ＳＩ09出土遺物
図版43　勝負遺跡ＳＢ01～03加工段覆土出土遺物　勝負遺跡ＳＢ01溝内出土遺物
勝負遺跡ＳＢ02．03床面出土遺物
図版44　勝負遺跡ＳＢ02．03床面出土遺物
図版45　勝負遺跡ＳＢ01～03加工段下方部出土遺物
図版46　勝負遺跡ＳＢ01～03加工段下方部出土遺物
図版47　勝負遺跡ＳＢ01～03加工段下方部出土遺物
図版48　勝負遺跡ＳＢ01～03加工段下方部出土遺物
図版49　勝負遺跡ＳＢ01～03加工段下方部出土遺物　勝負遺跡ＳＢ04出土遺物
図版50　勝負遺跡ＳＢ05ピット内出土遺物
図版51　勝負遺跡ＳＢ05ピット内出土鉄滓．羽口
図版52　勝負遺跡ＳＢ05．06覆土出土遺物
図版53　勝負遺跡ＳＢ08出土遺物　勝負遺跡ＳＢ16．18出土遺物　勝負遺跡ピット226出土遺物
勝負遺跡ＳＢ14出土遺物
図版54　勝負遺跡ＳＢ18出土遺物　勝負遺跡ＳＢ23溝３内出土遺物　勝負遺跡ＳＢ20出土遺物
勝負遺跡ＳＢ19．ＳＢ23溝３内出土遺物
図版55　勝負遺跡ＳＢ21～26覆土出土遺物
図版56　勝負遺跡ＳＢ21～26覆土出土遺物
図版57　勝負遺跡ＳＤ02出土遺物　ＳＤ02出土臼玉　出土遺物ＳＫ04．05出土遺物
勝負遺跡ＳＫ19出土遺物
図版58　勝負遺跡ＳＫ06出土遺物　勝負遺跡ＳＫ10出土遺物
図版59　勝負遺跡ＳＫ12出土遺物　勝負遺跡ＳＫ13出土人骨
図版60　勝負遺跡ＳＫ14出土遺物　勝負遺跡第１土器溜出土遺物
図版61　勝負遺跡第１土器溜出土遺物
図版62　勝負遺跡第１土器溜出土遺物　勝負遺跡第２土器溜出土遺物
図版63　勝負遺跡第２土器溜出土遺物　勝負遺跡第３土器溜出土遺物
図版64　勝負遺跡第３土器溜出土遺物
図版65　勝負遺跡谷部遺物包含層出土遺物
図版66　勝負遺跡谷部遺物包含層出土遺物

図版67　勝負遺跡谷部遺物包含層出土遺物
図版68　勝負遺跡谷部遺物包含層出土遺物
図版69　勝負遺跡谷部遺物包含層出土石器　谷部遺物包含層出土鉄滓
勝負遺跡調査区西側斜面出土遺物
図版70　勝負遺跡調査区西側斜面出土遺物　勝負遺跡地すべり断層西側平坦部出土遺物
堂床古墳出土遺物
図版71　堂床古墳出土遺物
図版72　勝負遺跡ＳＩ07出土玉未製品
図版73　勝負遺跡ＳＩ07出土玉未製品　勾玉．管玉の穿孔のＸ線写真
図版74　勝負遺跡ＳＩ07出土碧玉片接合資料　ＳＩ07出土滑石製未製品　ＳＢ21～26覆土出土砥石
ＳＢ21～26覆土出土玉未製品　谷部遺物包含層出土有孔円盤
図版75　谷部遺物包含層出土玉未製品

第１章　勝負遺跡・堂床古墳の位置と環境

勝負遺跡・堂床古墳の位置と環境

勝負遺跡と堂床古墳は、島根県東部の東出雲町に所在する。地理的にみると東は安来市、西は松江市があり、地形的には南には京羅木山をはじめとする山々が連なり、北には中海が広がっている。中海の現在の湖岸線は、掘り込み干拓地を除き縄文中期（約6000～5000年前）のいわゆる「縄文海進」の後、縄文晩期（約3000年前～2300年前）に湖岸線が海側に退いて形成されたものと考えられている。そのため、平地は現在では中海に面した北側と、南の山々から派生する尾根が形成するいくつかの谷に存在している。しかしながら、遺跡は主に尾根の先端部の緩やかな丘陵上に点在しており、古代においては中海が丘陵部先端付近や内陸部まで入り込んでいた可能性もある。当遺跡（1）も中海沿岸の緩やかな丘陵上に位置しており、当時は丘陵と丘陵との間の谷部を一つの単位として集落が形成されていたと考えられる。

東出雲町の西端部には中海に注ぐ意宇川が流れ、広大な意宇平野を形成している。この意宇平野は、古代には出雲国府（3）・出雲国分寺（5）などが置かれ、古代出雲の政治の中心地として栄えたところである。また東隣の安来平野は、弥生時代後期の大規模な墳丘墓や集落が多数検出されるなど古代出雲において重要な位置を占めたところでもある。このように意宇平野と安来平野の中間に位置し、中海の見渡せる交通の要衝でもある当地域が、当時においても重要な地であったことは想像に難くない。

以下、東出雲町とその周辺の主な遺跡を時代ごとに取り上げ、この地域の歴史的環境を概観してみたい。

縄文時代

東出雲町においては旧石器時代の遺跡はまだ見つかっていない。縄文時代の遺跡は、数は少ないが意宇川周辺の中海に面した地域を中心に確認されている。出雲郷の竹の花上遺跡(18)から前期から晩期の土器が、春日遺跡(13)から後期から晩期の土器が出土している。

近年、この安来道路建設予定地内でも縄文時代の遺構・遺物が検出されている。鵜貫遺跡(73)からは、後・晩期の土器片と共に、当時の中海の海岸線を想定させる海性の堆積層が確認されている。また、縄文時代と推定される落し穴が多数検出されている。渋山池遺跡(40)、渋山池古墳群(82)、島田遺跡(81)、岸尾遺跡(28)などで検出されており、特に渋山池遺跡では20基を越える県内最大級の落し穴群が検出されている。この時代の明確な集落等は見つかっていないが、縄文時代と考えられる石器類が上記の遺跡や当遺跡でも出土しており、この地域でも古い時代から人々が生活していたことは明らかである。

第1図　勝負遺跡・堂床古墳の位置

弥生時代

弥生時代になると、平野や谷の縁辺の丘陵上に多くの遺跡が確認されている。低地の遺跡としては、前期末～中期の籾痕付きの土器が出土した磯近遺跡(72)、後期の水田跡の見つかった夫敷遺跡(8)、弥生期の拠点的集落と考えられる布田遺跡(6)などがある。集落については、寺床遺跡(35)より前・中期の竪穴住居が検出されている。

後期においては、安来道路建設予定地内遺跡である渋山池遺跡、渋山池古墳群、原ノ前遺跡(41)より竪穴住居が検出されおり、いずれも丘陵上に立地しているのが特徴的である。当遺跡でも明確な遺構はないが、後期の土器片が出土している。他に注目される遺跡として、四隅突出型墳丘墓の可能性もある後期末の大木権現山1号墳(29)がある。

古墳時代

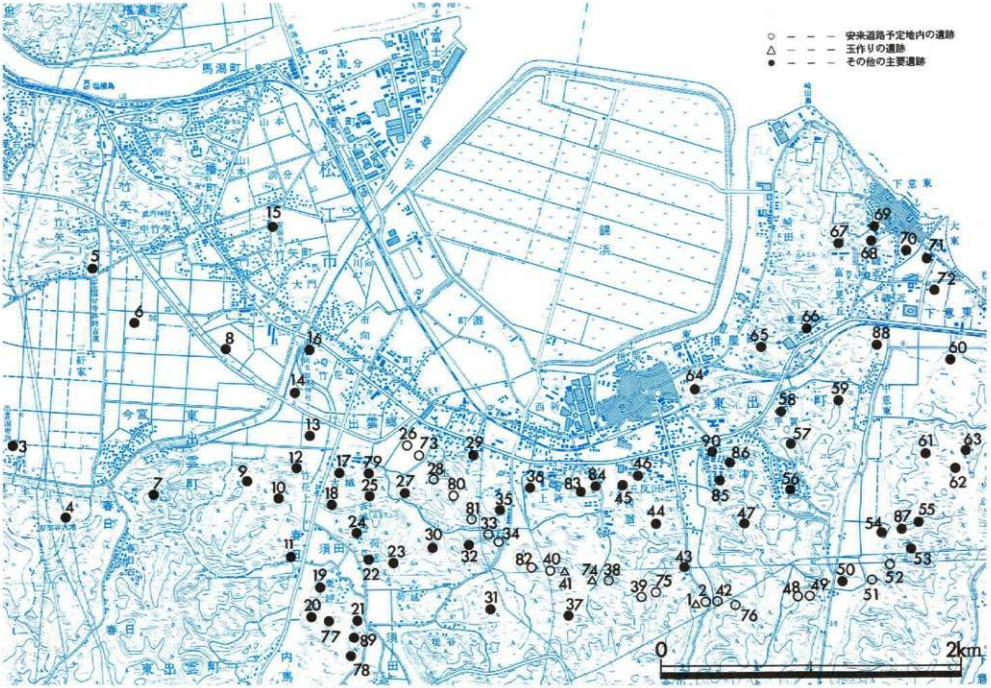
古墳時代に入ると、平野に面した丘陵上を中心に数多くの古墳が造営されるようになる。前期には、1辺21～33mの方墳で県内でも最古級の寺床1号墳(35)がある。主体部は礫床構造で2段掘りの墓壙に割竹形木棺を置くもので、斜縁神獣鏡や鉄剣などが副葬されていた。この他、舶載の内行花文鏡が出土した古城山2号墳(25)がある。中期には、箱式石棺が検出された大木権現山2号墳(29)地山岩盤を船形に穿って造られた大草岩船古墳(4)などがある。また、安来道路建設予定地内である島田池遺跡、島田遺跡、渋山池古墳群の丘陵上には、小規模な古墳群が中期から後期にかけて築造されており、うち島田1号墳からは人物埴輪が出土している。その他、碧玉製勾玉未製品が出土した堤谷1号墳(36)などがある。後期古墳としては、石棺式石室をもつ栗坪1号墳(89)、横穴式石室の中意東古墳(88)などが知られる。また、この地域は四柱式家型の横穴墓が多く分布している。前述した島田池遺跡、島田遺跡、渋山池古墳群で大規模な横穴墓群が展開しており、後背墳丘や家形石棺をもつものも少なくない。この他、古城山横穴墓群(79)、四ツ廻横穴墓群(83)などが知られる。

その他、当遺跡をはじめ安来道路建設予定地内の渋山池遺跡、原の前遺跡、四ツ廻Ⅱ遺跡(74)において前～後期の集落が多数検出されている。そのうち谷違いの当遺跡、四ツ廻Ⅱ遺跡、原ノ前遺跡からは中期の玉作工房跡が見つかっており、花仙山周辺と安来平野周辺の玉作地帯の間の玉作空白地帯を埋める結果となった。その他、須恵器の窯跡として後谷遺跡が確認されている。

また、東出雲町ではないが、松江市の原の前遺跡から5世紀と推定される地震による液状化現象が見つかっている。規模はマグニチュード6クラスと考えられており、周辺への影響は少なくなかったであろう。時期は不明だが、当遺跡でもマグニチュード6クラスの地震の痕跡が見つかっており、その関係が注目される。

奈良・平安時代

意宇平野の意宇川沿いは、航空写真により条里制が敷かれていたことが推測されている。前述したように意宇平野には出雲国府、出雲国分寺跡が確認されており、この地が古代出雲の政治的中心地であったことが伺える。隣接する東出雲町内では、これまでこの時期の遺跡がほとんど明らかでなかったが、安来道路建設予定地内において多数の奈良・平安期の遺構・遺物が調査された。集落としては、当遺跡や渋山池遺跡、渋山池古墳群、原ノ前遺跡、岸尾遺跡、島田池遺跡、林廻り遺跡などがある。うち注目される遺構としては、渋山池遺跡と渋山池古墳群からは須恵器の窯跡が、島



第２図　勝負遺跡・堂床古墳の位置と周辺の遺跡（Ｓ＝１：25,000）

No.	遺跡名	種別	No.	遺跡名	種別
1	勝負遺跡	集落、玉作	46	東出雲中学校校庭遺跡	散布地
2	堂床古墳	古墳？お堂か	47	五反田１号墳	古墳
3	出雲国庁跡	官衙	48	毛無遺跡	散布地
4	春日（大草）岩舟古墳	古墳	49	毛無古墳	散布地
5	出雲国分寺跡	寺院	50	青木遺跡	散布地
6	布田遺跡	集落	51	土元遺跡	散布地
7	春日城遺跡	城跡	52	御崎谷遺跡	散布地
8	夫敷遺跡	弥生水田ほか	53	足ヶ平遺跡	古墳
9	姫津古墳群	古墳	54	泥田遺跡	集落
10	以下谷池北岸遺跡	散布地	55	雉子谷古墳群	古墳
11	以下古墳	古墳	56	附谷遺跡	散布地
12	島越古墳	古墳	57	黄泉谷古墳	古墳
13	春日遺跡	散布地	58	平賀遺跡	祭祀
14	意宇平野条里遺跡	条里制	59	平賀Ⅱ古墳	古墳
15	安国寺古墓	古墓	60	まろつか古墳	古墳
16	阿太加夜神社境内	集落	61	油免古墳群	古墳
17	古城山城跡	城跡	62	焼田古墳群	古墳
18	竹の花上遺跡	散布地	63	焼田遺跡	集落
19	栗坪古墳群	古墓	64	揖屋神社古墳	古墳
20	城山城跡	城跡	65	畷田遺跡	散布地
21	栗坪遺跡	集落	66	神子谷遺跡	散布地
22	須田神社境内遺跡	集落	67	深田上の古墳	古墳
23	荷延古墳群	古墳	68	永島窯跡	窯跡
24	赤廻遺跡	散布地	69	鳩峰山焼窯跡	窯跡
25	古城山古墳群	古墳群	70	永島長通し窯跡	窯跡
26	恵比須遺跡	散布地	71	石橋窯跡	窯跡
27	後谷池古墳	古墳	72	磯近遺跡	散布地
28	岸尾遺跡	集落	73	藤貫遺跡	散布地
29	大木権現山古墳群	古墳	74	四ツ廻Ⅱ遺跡	集落、玉作
30	後谷窯跡	窯跡	75	林廻り遺跡	集落
31	安垣古墳群	古墳	76	受馬遺跡	祭祀
32	大畑遺跡	散布地	77	内馬池横穴墓群	横穴墓
33	長廻遺跡	散布地	78	戸田屋敷横穴墓群	横穴墓
34	長廻古墳群	古墳群	79	古城山横穴墓群	横穴墓
35	寺床遺跡	古墳、集落	80	島田池遺跡	横穴墓、集落
36	堤谷古墳群	古墳	81	島田遺跡	横穴墓、古墳
37	渋山池南古墳群	古墳	82	渋山池古墳群	横穴墓、集落
38	四ツ廻Ⅰ遺跡	散布地	83	四ツ廻横穴墓群	横穴墓
39	大鳥遺跡	散布地	84	屋台垣横穴墓群	横穴墓
40	渋山池遺跡	集落	85	高井横穴墓群	横穴墓群
41	原ノ前遺跡	集落、玉作	86	中津横穴墓群	横穴墓群
42	堂床遺跡	散布地	87	雉子谷横穴墓群	横穴墓
43	東西畑遺跡	散布地	88	中意東遺跡	横穴式石室
44	五反田遺跡	散布地	89	栗坪１号墳	石棺式石室
45	東出雲中学校東側遺跡	散布地	90	高庭経塚	経塚

周辺の遺跡一覧表

田池遺跡からは鍛冶工房とみられる建物跡が見つかっている。その他、当遺跡の土壙墓や、島田池遺跡の祭祀的な建物跡から八稜鏡が出土している。

また、文献に見える出雲国最古の地震として、元慶四年（880年）に発生したものが『三代実録』に記録されている。規模はマグニチュード7.0と推定され、東出雲町が震源地の候補の一つとしてあげられている。

鎌倉・室町時代

中世の山城として、春日城跡（７）、古城山城跡(17)、京羅木山城跡、福良城跡などが知られている。春日城は下河原氏の居城であったが、尼子氏との激しい攻防を繰り広げた末、落城したと記録されている。現在でも本丸・出丸・空堀が残っている。古城山城は砦として利用されていたと考えられ、当時の井戸や郭が残されている。京羅木山城跡は広瀬町の月山富田城を一望することができ、毛利氏が尼子氏を攻める際に重要な城であったと考えられる。福良城は尼子氏の家臣である作間左衛門入道の居城であったが、この城も尼子氏と毛利氏との重要な攻防戦の地と考えられる。

参考文献

東出雲町教育委員会　『東出雲町の遺跡』　1988

島根県教育委員会・建設省松江国道工事事務所　『一般国道９号安来道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書　西地区Ⅰ』　1993

島根県教育委員会　「岸尾遺跡・島田遺跡」『一般国道９号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区Ⅴ』　1997

島根県教育委員会　「茨山池遺跡・原ノ前遺跡」『一般国道９号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区Ⅶ』　1997

島根県教育委員会　「島田池遺跡・勘貫遺跡」『一般国道９号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区Ⅷ　1997

島根県教育委員会　「原の前遺跡」『朝酌川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　1995

第2章　調査に至る経緯と調査の経過

1．調査に至る経緯

昭和47年、建設省松江国道工事事務所から島根県教育委員会に「国道９号線バイパス」建設の基本設計資料として、安来市吉佐町から松江市乃白町に至る30.3㎞における埋蔵文化財の有無について照会があった。

これを受けて島根県教育委員会では、地元教育委員会の協力を得て昭和47年、昭和48年にこの区間の遺跡の分布調査を実施した。これらの調査結果等をふまえ、建設省からルート変更案が呈示され、昭和48年７月には松江市東地区の予定ルートにかかわる遺跡の取扱いについて協議があった。昭和49年７月には安来地区の清水－月坂間のルート案につい協議があった。つづいて、昭和50年１月22日付けで県教育委員会あてに松江東地区と安来地区のうち、清水－月坂間の一部について発掘調査の依頼があった。これを受けて、昭和50年７月には建設省と契約を取り交わし、昭和50年度、松江市竹矢町才の峠古墳群、同矢田町平所遺跡、安来市早田町大坪古墳群の発掘調査を実施し、昭和51年度には松江市平所遺跡の関連再調査、東出雲町出雲郷夫敷遺跡の試掘調査を実施した。平所遺跡では、埴輪窯跡から馬、家、人物などの形象埴輪が出土し、昭和52年には国の重要文化財に指定された。

昭和55・56年度には、昭和57年度に開催が決定していた「くにびき国体」の主要幹線道路となる「松江東バイパス」（以前は「米松バイパス」と呼ばれていた。）の東出雲町出雲郷から松江市古志原町に至る5.4㎞間の７遺跡（東出雲町の春日遺跡、夫敷遺跡、松江市の中竹矢遺跡、才の峠遺跡、勝負遺跡、石台遺跡）のうち２車線分を緊急に調査した。

その後、「松江バイパス」は高規格道路に設計変更され「松江道路」となり、昭和60年に建設省から前回調査した７ヶ所の残り４車線分の調査依頼があった。調査は昭和61年から平成３年まで順次行った。

昭和61年度には安来市島田町から同赤江町に至る延長6.9㎞が「安来バイパス」として事業化されたが、翌昭和63年度には高規格道路に計画変更され、「松江道路」につなぐ東出雲町出雲郷－安来市吉佐町間の18.7㎞の「安来道路」として実施されることになった。この計画変更で、予定ルートにも変更が生じたため、昭和62・63年度に再度分布調査を実施した。

「安来道路」は平成元年度から４年度まで、まず安来市赤江町から島田町に至る6.9㎞において調査が行われ、平成４年度からは安来市荒島町－東出雲町出雲郷間を「安来道路西地区」として、さらに平成５年度からは安来市吉佐町－島田町間を「安来道路東地区」として調査が行われた。

平成４年度から調査を開始している安来道路西地区については、この年度に東出雲町内の御崎谷遺跡・土元遺跡・清水遺跡の発掘調査と、勝負遺跡・堂床古墳を含む22遺跡のトレンチ調査を実施した。

そして平成７年度は、東出雲町内に所在する８遺跡（岸尾遺跡、島田池遺跡、島田遺跡、渋山池古墳群、渋山池遺跡、原ノ前遺跡、勝負遺跡、堂床古墳）、荒島町内に所在する５遺跡（竹ヶ崎遺跡、柳Ⅰ遺跡、柳Ⅱ遺跡、小久白墳墓群、神庭谷遺跡）において大規模な発掘調査を実施した。うち東出雲町内の遺跡については、数々の成果をあげつつ平成７年度をもって対象遺跡の調査をすべて終了した。

2．調査の経過と概要

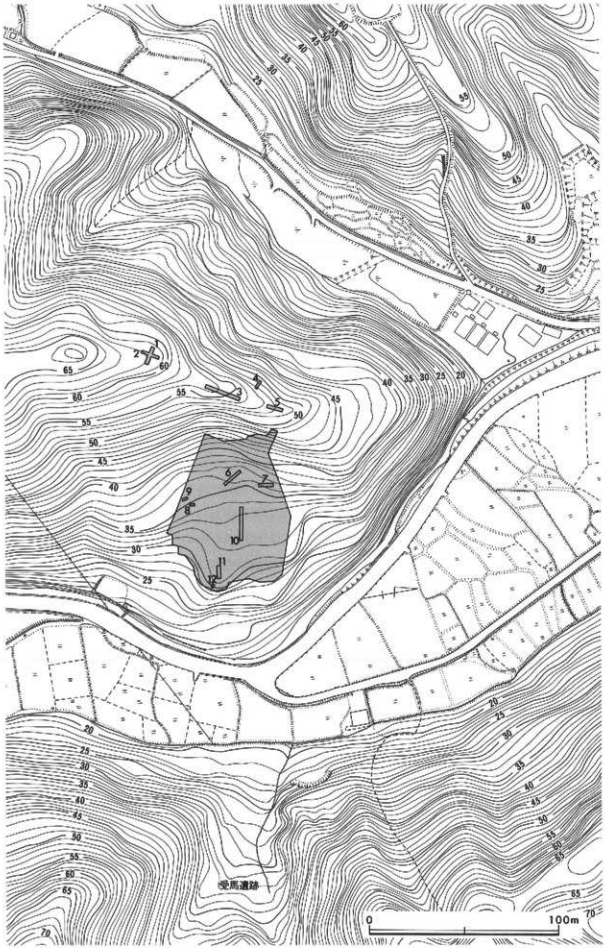
勝負遺跡・堂床古墳の発掘調査は、まず平成４年度にトレンチ発掘による確認調査から始まった。

勝負遺跡は、標高約50ｍの丘陵が中海に向かって南北方向に延びる地形となっている。調査対象地であるこの丘陵尾根上は標高55ｍ強と高く、中海から遠く島根半島まで望むことができる。しかしながらこの尾根上は北側に向かって比較的平坦な地形が観察された。また尾根頂部から東側の斜面も中腹までは急峻であるが、これより低い位置は非常に緩やかな斜面をを呈し、水田部へと移行している。この緩斜面は後世の開墾等により周辺はかなり改変していると思われるが、平坦部は広範囲に舌状に広がっていた。これらの地形的様相から集落等の存在が想定され、当初はこの丘陵尾根上を勝負遺跡Ⅰ区、丘陵東側の緩斜面を勝負遺跡Ⅱ区と呼称し、各々に５ヶ所トレンチを設定した。

調査の結果、丘陵尾根上のⅠ区では明確な遺構・遺物は検出できなかった。だがⅡ区は調査前から多くの土器片が表採され、トレンチ調査においても多数の遺物やピット状の遺構が検出された。代表的なものを第４図に示している。１・４・６は土師器である。１は坏であり、底部外面を削り内面に放射状の暗文を施している。トレンチ７（トレンチの位置は第３図参照）から出土した。４・６はトレンチ６から出土しており、４は甕で６は高台付きの坏であろうか。２・３・５は須恵器である。２は坏身でありトレンチ６から出土した。３は甕の口縁部である。４は口縁部を欠くが、肩部にカキメが施されている。壺であろうか。それぞれトレンチ10・７から出土している。７は小型の土製支脚でトレンチ７から出土している。いずれも古墳時代後期以降のものと思われる。８は用途不明の石器である。一辺は半月形に打ち欠いて整形されており、直線状に整形されたもう一辺の中心よりずれた位置には抉りが施されている。その形状はあたかも抉状耳飾り、或いは環状石斧が中心から折れたもののように見受けられるが、その形態や性格は全く異なる。時期的にもどこに所属するものか不明であり、ここは便宜上、「抉入り打製石器」とでも称しておく。長さは17.1cmを測り、材質は凝灰岩（安山岩製か）である。[1] トレンチ７より出土している。

堂床古墳は、勝負遺跡（Ⅱ区）の立地する緩斜面の東端部に位置しており、地山を加工した墳丘状の高まりが確認された。標高は約26ｍを測り、地形的には勝負遺跡と一体のものであるが、この付近は字名が「堂床」なので堂床古墳と称した。この堂床古墳を挟んで南北側には狭長な谷が入り込んでおり、さらに古墳から東側は水田部に向かってかなり急な崖となっている。この墳丘部と水田部との標高差は約20ｍを測った。そのため堂床古墳は地形的にみると

空から見た勝負遺跡



第３図　勝負遺跡・堂床古墳の位置と周辺の地形（Ｓ＝１／2000）

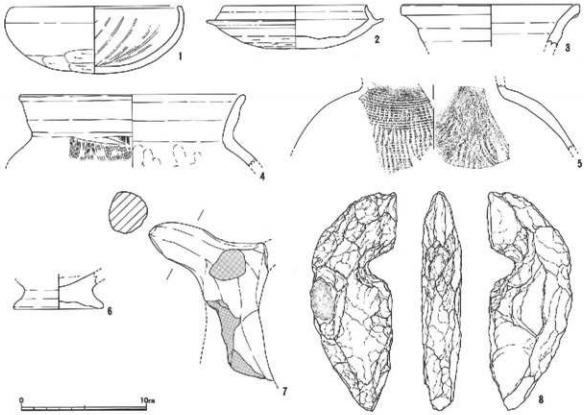
平坦部から東側に突出した位置にあり、四方からその墳丘を望むことができる。しかしながら墳形は不明であり、この古墳も後世にかなりの改変を受けていると思われた。トレンチ11・12を設定したが、墳端部を明らかにすることは出来なかった。

以上のような確認調査の結果を受けて、丘陵尾根上（勝負遺跡Ⅰ区）は調査対象地区から外し、丘陵東側斜面部（同Ⅱ区）と堂床古墳を対象に調査範囲を設定し、平成7年4月17日より本調査に入った。

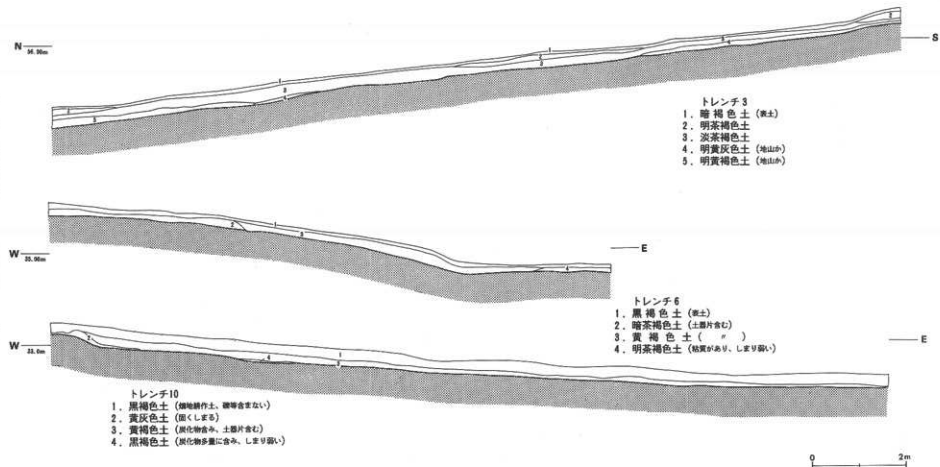
調査はまず勝負遺跡の西側の平坦部が始まる付近から掘削を開始した。ところが斜面からも土器片が数点ずつ検出されるので、調査範囲を尾根上に向かって広げる結果となり、かなり尾根に近いところから調査に取りかかることになった。また堂床古墳については残りが悪いと判断したので、勝負遺跡の様子を見ながら同時進行で行うことにした。

遺構はまず調査区西端に性格不明の加工段を確認した。それを手初めに、調査が斜面部から平坦部に進むに従って住居跡などの遺構が明確に姿を表すようになった。だか掘り進んでいくうちに、理解しがたい数々の奇怪な遺構に直面することとなった。

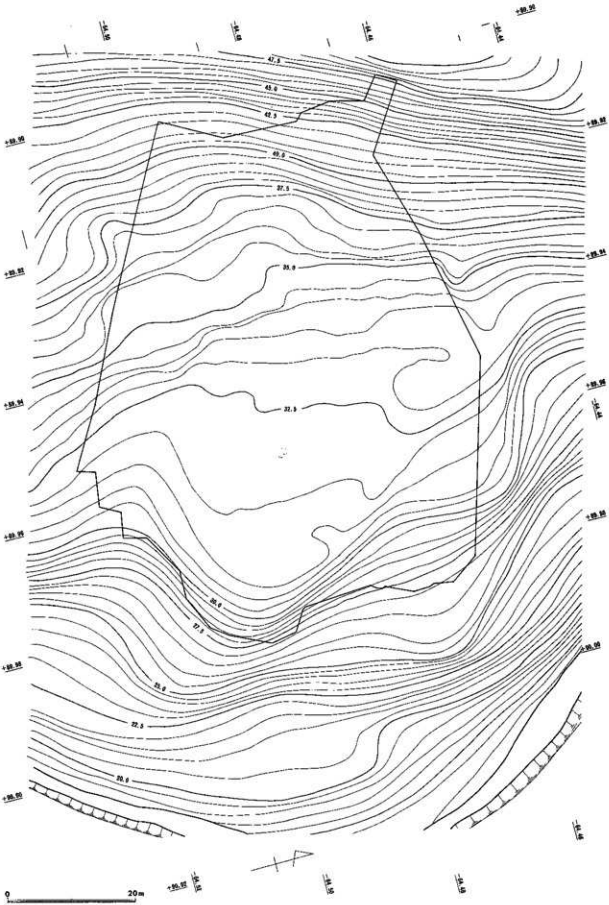
まず地山である。急斜面から平坦部に移行する付近で、地山の土質が急に変化しているのであった。まるで地面に線を引いたかのように、突然地山の土色も性質も変化しており、当初は理解することができなかった（後に地滑りによるものと判明する）。また、その地点から東へ約10m進んだ付近で古墳時代中期の竪穴住居を検出したが、その竪穴住居の床が西側に向かって10°も傾斜していた。しかしながら玉作住居にみられるような半傾斜住居と推測して調査を進めることにした。その後は、平安時代の木棺墓から県内4例目となる八稜鏡が検出され、調査区東端付近では、東出雲町では3例目となる古墳時代中期の玉作工房跡を検出するなど、いくつかの成果をあげることがで



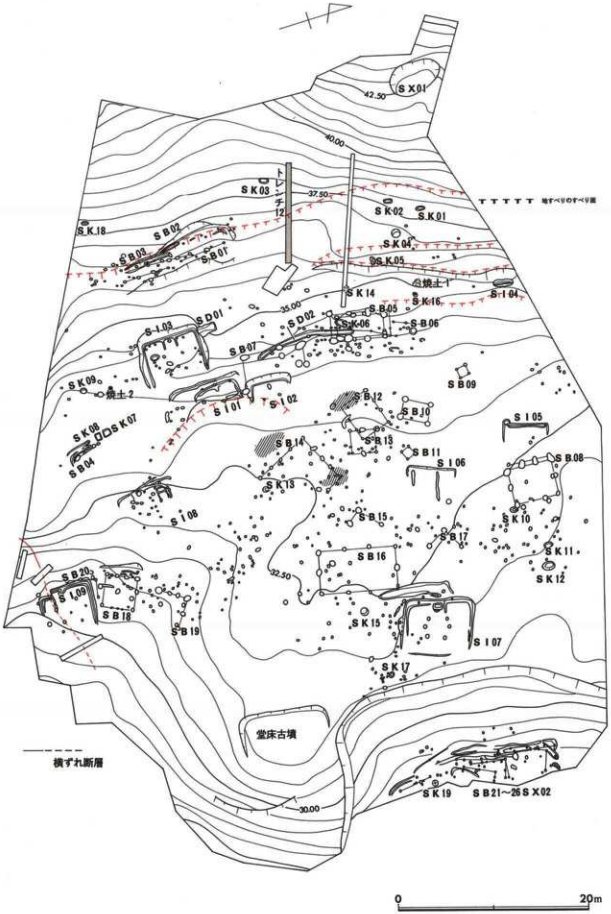
第4図　トレンチ調査時出土遺物実測図（1：3）



第5図　勝負遺跡トレンチ土層図（S＝1／80）



第6図　勝負遺跡調査前地形測量図（S＝1／600）



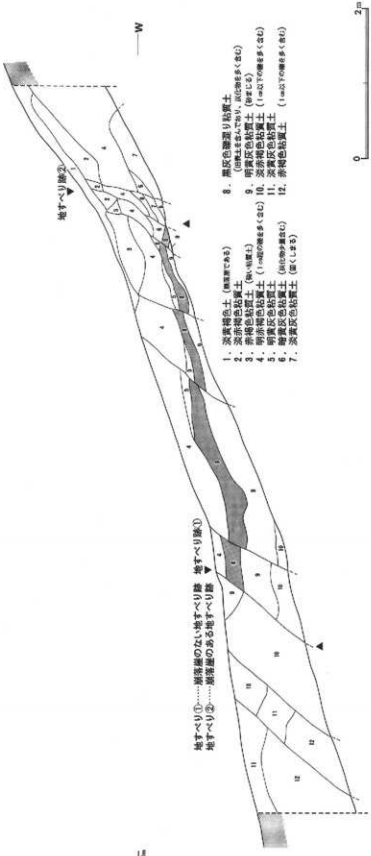
第７図　勝負遺跡調査後地形測量図及び遺構配置図（S＝1／400）

きた。しかし調査区の南東部で検出された竪穴住居は床に15㎝の段差と水平方向にも60㎝ずれが生じており、当初は建て替えた２棟の住居跡が重なっているものと判断し調査を終えた。

最終的に勝負遺跡における遺構は竪穴住居が９棟、掘立柱建物が20棟以上、溝状遺構が２基、土坑が19基検出され、古墳時代から平安時代にかけての小集落が営まれていたことが明らかになった。調査については一部の測量などの補足調査を残し、12月22日、現地での作業を終えた。

その後、寺村光晴氏に玉作工房跡について指導を受けた際、特異な形態の住居跡は地震によるものではないかと指摘され、この段階でようやく勝負遺跡に地震の痕跡が残っていることが判明したのである。年も変わった１月11日のことであった。そして２月２日には地質学の先生方の指導を得、地震の断層や地滑り面の範囲を確認するため、調査区の数ヶ所にトレンチを設定した。

前述した地山が変化する付近に、斜面に直交するかたちで設定したのがトレンチ12である（第７図参照）。その断面を第８図に示した。詳しくは第４章で述べるが、地滑り跡を大きく２ヶ所確認できる(地滑り跡①・②)。地山の性質が突然変化しているのが地滑り跡①である。地滑り跡②は土層が複雑な様相を呈しているが、地山の表面には地滑り面が現れてこない。こ



第８図　勝負遺跡トレンチ12土層図（S＝１／50）

れは、地滑り面の上に、地滑りの際に崩落した土砂が堆積しているからである。しかしながら地滑り跡①には崩落した土砂が堆積していない。このことは、勝負遺跡には過去大規模な地滑りが最低2回はあったことを示している[2]。そして調査の結果、地滑り面を5ヶ所、横ずれ断層を1ヶ所確認することができた。

一方堂床古墳については、当初の推測通り残りが悪く、おおよその規模は確認できたが盛土や周溝、主体部など古墳に伴うと思われるものは検出することができなかった。出土遺物も近世の陶磁器がほとんどで、字名の「堂床」からも推測されるように後世に「お堂」など信仰の対象となる何らかの施設が造成されていた可能性が高いと考えられる。

注

(1) 柴田喜太郎氏のご教示による。
(2) 山内靖喜氏のご教示による。

12月9日に行った現地説明会では、調査員による玉作りをもとにした寸劇を行った。現説で劇を披露したのは県内ではここが初めてだろう。

第3章　勝負遺跡の調査

S I 01～03の調査風景

勝負遺跡の調査結果

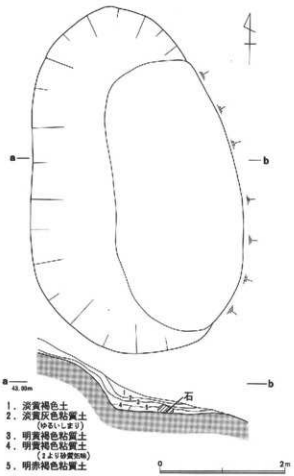
勝負遺跡は東出雲町揖屋字勝負に所在する。中海に向かって延びる丘陵尾根上から東側に広がる斜面に位置しており、遺跡の標高は45～28ｍを測る。前章で述べたように、この斜面は尾根上付近は急峻であるが、標高37ｍ辺りからは水田部にかけて緩やかな斜面となり、かなり広範囲に平坦部が広がる様相をみせる。地形をみると、この平坦部は丘陵部から谷部に向かって舌状に突き出た形で広がっているのが観察できる。さらにこの平坦部は緩やかに谷の水田部にかけて傾斜する訳ではなく、平坦部の東端部に立地する堂床古墳を境に崖状に急傾斜している。そのため谷部から勝負遺跡を望むと、谷に向かって突き出た丘陵斜面の、かなり高い位置に平坦部が台地状に形成されているように見受けられる。そのため谷部からは平坦部を見ることができない。また、遺跡内の大半は最近まで果樹園として利用されており、遺跡の上層はかなり削平されているものと思われる。さらに調査前の観察では、遺跡内に地形の段差もかなりみられた。当初は後世の開墾時の削平によるものと推測していたが、後に地滑りにより生じた段差もあることが判明するなど、この平坦部はかなり不規則な要素も多分に含んでいる。

調査は西側斜面から平坦部を東側谷部に向かって順に行った。耕作土と思われる堆積土を50㎝程度掘り下げると遺構が掘り込まれている地山面が現れる。遺構は平坦部を中心に検出され、古墳時代前期の竪穴住居から平安時代の掘立柱建物や木棺墓など多岐にわたっている。以後、加工段、竪穴住居、掘立柱建物、溝状遺構、土坑の順で各遺構の様相を追っていき、後章で集落の変遷を考えてみたい。

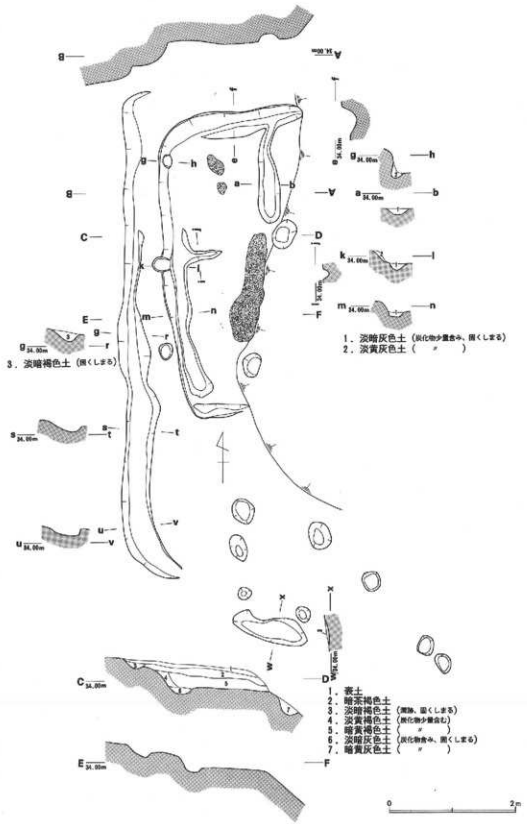
1．加工段・竪穴住居の調査

ＳＸ01　遺跡の西側斜面の尾根上に近い位置で検出され、遺跡内では最も高い位置にある。当初はこの斜面部は調査する予定ではなかった。しかしながら土器片が調査区端部で出土し、調査範囲を尾根上に向かって拡張していくうちに検出されたものである。床面の標高は42.5ｍを測る。

遺構の大半は流出していると思われるが、現状で平面は南北方向に約４ｍ、東西方向に約２ｍを測る。また、削り出された壁は高さ約80㎝を測る。平面形は全体的に湾曲気味で不正な形にみえ、ピットや溝状のものは一切検出されていない。出土遺物もなく、この遺構の性格は不明であるとしかいいようがない。



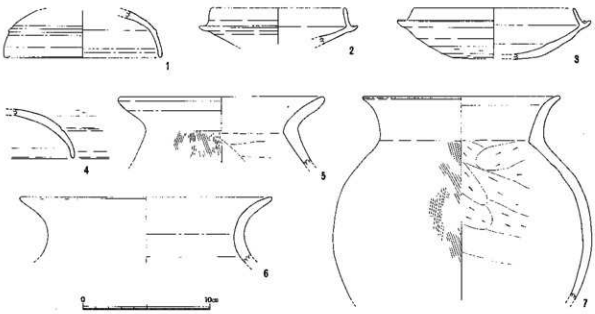
第９図　ＳＸ01平面図（Ｓ＝１／60）



第10図　ＳＩ01平面図（Ｓ＝１／60）

ＳＩ01（第10図）

遺跡のほぼ中央付近よりやや南西よりのところで検出された。床面の標高は33.50ｍを測る。ＳＩ01のすぐ北側にはＳＩ02が隣接し、西側にはＳＩ03がある。住居の東側は流出しており残存状況



第11図　ＳＩ01出土土器実測図（１：３）

はよくないが、残っている西側の掘り方からみて一辺4.8ｍの方形竪穴住居であろう。住居の上方は削平されていると思われ、現状で深さ約30㎝を測る。床面には壁帯溝が廻るが、流出したためか床面の隅では途切れている。北側と西側の壁帯溝は、その中心付近から床面中央に向かっても溝が床を仕切るように延びている。ピットは床面より２点ほど検出されているが、屋根を支えるような並びを示していない。床面東側が流出しているので不明だが、北西側でピットが検出されなかったので、恐らく中央部のピットともう１つのピットが屋根を支える２本柱の竪穴住居だったかもしれない。西側の壁際にある３つのピットは垂木の跡と思われる。その他、床面から焼土が３ヶ所検出された。うち床面中央の焼土は、住居の規模と不釣り合いなほど大きく広がっており、固く焼きしまっていた。住居の覆土から炭化物も多く検出されたので、この住居は焼失住居だった可能性もある。この焼土は熱残留磁気測定を行っており、結果はＡＤ.650±15の測定値が示された（第５章参照）。

また、この住居の西側には幅約40㎝・深さ約20㎝の直線状の溝が見られる。この溝は現状で長さ約7.3ｍで、溝の南北両端は東側に折れ曲がる気配をみせる。溝の南端の延長上にも長さ1.2ｍの小さい溝があり、当初は両者は繋がっていたと思われる。この溝の性格としては、まずＳＩ01の周溝と考えられる。しかしながら、この溝の中央付近より北側に拠ったところに竪穴住居は位置しており、さらに溝と竪穴住居は厳密には平行関係を示していない。また土層観察でも、竪穴住居が埋まってから溝が掘り込まれたように見受けられるなど、周溝としては否定的な見解もできる。或いは竪穴住居と後世の掘立柱建物が重なっているとも推測できるが、溝は竪穴住居を取り囲むように廻っているので、現状ではこの溝はＳＩ01の周溝としておきたい。

なお、ＳＩ01の東側は流失しているが、これは開墾時の削平等によるものではなく、地滑りにより崩落したものと判明した[1]（第５章参照）。

ＳＩ01出土遺物（第11図）

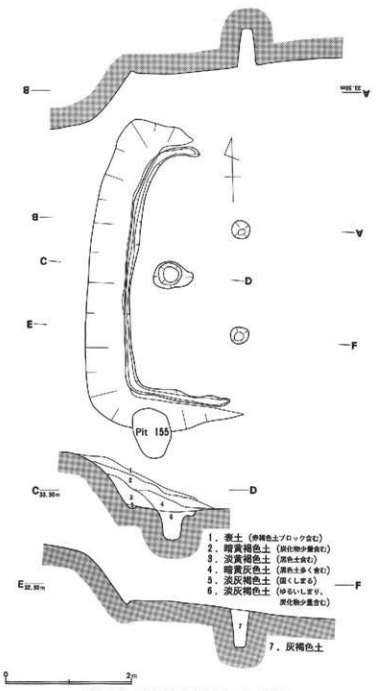
１～４は須恵器の蓋坏であり５～７は土師器の甕である。１・４は坏蓋である。１は口径12.3㎝を測り、天井部と口縁部の境には凹線によって稜を作り出している。４は細片であるが、肩部に沈

線が施されている。2・3は坏身である。ともに口縁部はやや内傾して立ち上がり、3は底部外面は下半部全体に浅くヘラケズリが施されている。口径は2は10.5cm、3は12.5cmを測る。これらの蓋坏は大谷編年出雲4期[3]に属すると思われる。5は口縁部が肩部から大きく外反するタイプである。口縁端部にかけてはやや立ち上がり、口径15.9cmを測る。6・7は頸部がやや長めで口縁端部が大きく外反するタイプで、7の胴部の最大径は中程に近い位置にある。口径は6は19.6cm、7は15.3cmを測る。

蓋坏の形態から、ＳＩ01の時期はおよそ6世紀後半と推定される。

ＳＩ02（第12図）

ＳＩ02はＳＩ01のすぐ北側に隣接している。ＳＩ01と同様に住居の東側は流出している。勝負遺跡で検出された竪穴住居はいずれも斜面に対して平行するかたちで建てられており、そのためすべての住居跡の東側は流出している。ＳＩ02の西側は掘り方がよく残っており、壁の高さは現状で90cmを測るが壁面は比較的緩やかに立ち上がっている。床面形は、残存している西側の一辺が直線状ながらもやや湾曲しており、隅丸方形の形態の残る方形プランといえる。床面の一辺は3.8ｍを測り、壁際には壁帯溝が廻っている。焼土は確認できなかったが、ピットは3点検出され、南北に並列した2つのピットが主柱穴と考えられ、柱穴間の間隔は1.7ｍを測る。壁際に近い位置にあるピットは他の2つに比べて比較的大きく、直径約40cm、深さ約50cmを測る。堆積土には炭化物を含んでおり、土質のしまりも弱く感じられた。いわゆる「壁際ピット」と称されるものと思われる。なお、掘り方の南側にはピット155が重なっており、これは後述するＳＢ07の柱穴の1つ



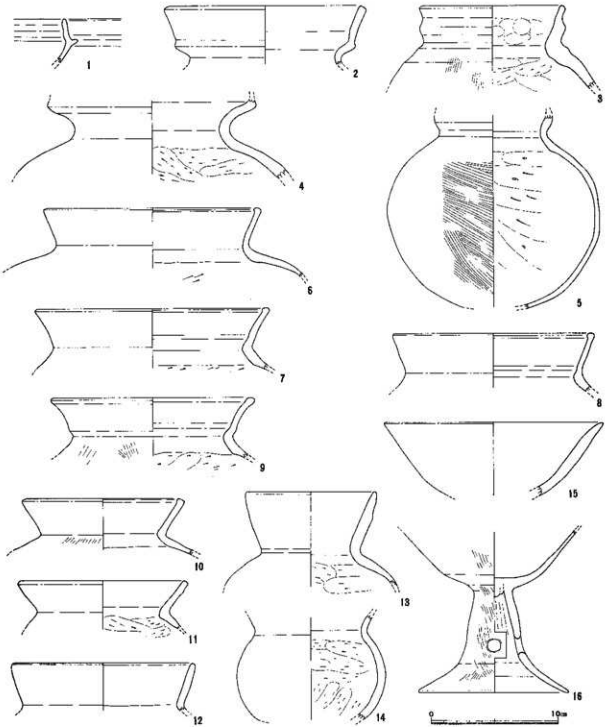
第12図　ＳＩ02平面図（S＝1／60）

と考えている。

また、ＳＩ02とＳＩ01は隣接しているにも拘わらず、床面の高さにかなりの差がある。ＳＩ01は標高にして床面の高さは約33.9ｍだが、ＳＩ02は約33.2ｍであり、約70cmもの差がみられる。これは、時期によって竪穴住居の形態が異なることを示していると考えられよう。

ＳＩ02出土遺物（第13図）

須恵器は１のみで、２～16は土師器である。１は坏身の口縁部の小片で、口縁端部に段を有しない。大谷編年出雲２期の新相に属すると思われる。３・５～12は甕で、２重口縁を示すもの（３・



第13図　ＳＩ02出土土器実測図（１：３）

5）と単純口縁で口縁がくの字を呈するもの（6～12）に分けられる。3・5は2重口縁が退化した形態を示し、器壁は厚く色調は茶褐色を呈する。6～12は口縁が大きく外反し、うち6・7・8・10についてはロ縁端部にかえりがみられる。4は壺で、口縁は大きく外反し、端部が内傾気味に垂直に立ち上がる様相を示す。弥生時代終末期から古墳時代初頭のものと思われる。13・14は小型丸底壺である。13は口縁部が逆ハ字状にまっすぐ立ち上がっている。15・16は高坏である。15は坏の破片である。底部から口縁にかけてゆるやかに立ち上がり、端部は外反している。また、表面は風化も著しいが丹塗りの痕跡がわずかにみられる。16は口縁端部を欠くが、底部から口縁にかけてわずかにアクセントをもつ。また底部に粘土を充填し、坏部と脚部を接合している。脚部には円形透かしが3方向から施されている。

これらの遺物のうち、1・2・4・6～9・11～13は上層からの出土なので周囲からの流れ込みと考えられる。床面出土遺物は3・5・10・14～16である。甕については退化した2重口縁が主体であり、高坏16の形態は松山編年[3]のⅡ期新相からⅢ期にかけてのものと考えられるので、ＳＩ03の時期は古墳時代中期と推定される。

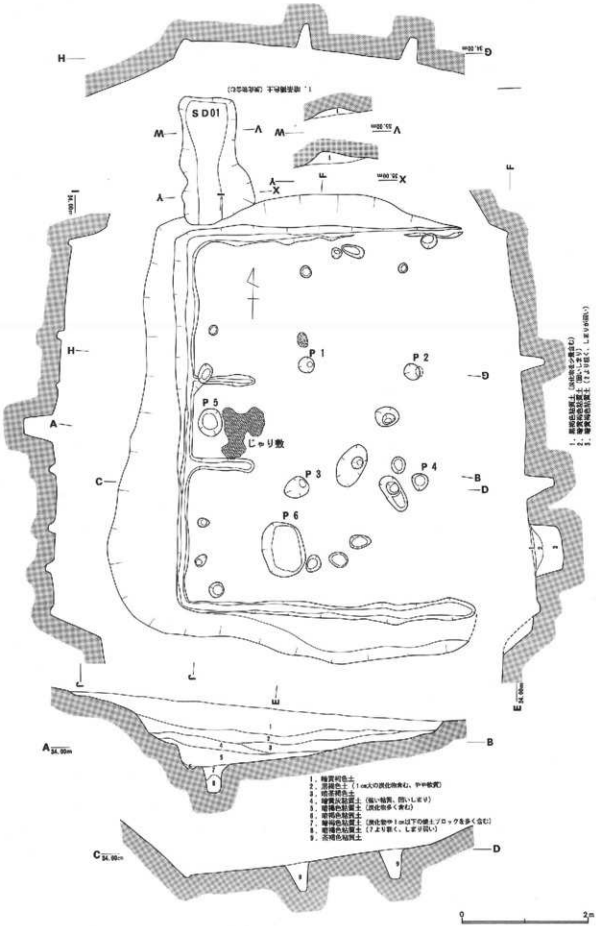
ＳＩ03（第14図）

遺跡の西側の斜面が緩やかに平坦部に移行した付近より検出された。ＳＩ01のすぐ西側に位置している。住居の西側は流失のため残存していないが、他はよく残っており、床面形は一辺約6ｍを測る比較的大型の方形住居である。壁沿いには壁帯溝が廻り、住居の南側壁帯溝の外側にも平坦な面があるが、これは検出時に掘りすぎたためである。ピットは床面に10点以上検出されたが、主柱穴はＰ1～4の4本であろう。4本とも直径はほぼ25cm、深さは50cmを測る。床面西側の壁際にはＰ5があり、直径・深さとも約40cmを測る。堆積土には炭化物や焼土のブロックが含まれており、そのＰ5を挟むように壁帯溝が延びているのが特徴的である。このＰ5の堆積土については土壌分析を行っている（第5章参照）。その他、床面の南側にはＰ6がみられる。直径は長辺で約90cm、深さ約50cmを測る大型の土坑で、逆台形状に掘り込まれている。また、Ｐ5のすぐ東側には図の網目の範囲で砂利敷が検出された。砂利は粘土で固く締められており、その性格については不明であるがＰ5の機能となんらかの関係があるのかもしれない。この砂利敷は後述するＳＩ07にもみられた。Ｐ1の北側には焼土も検出されている。

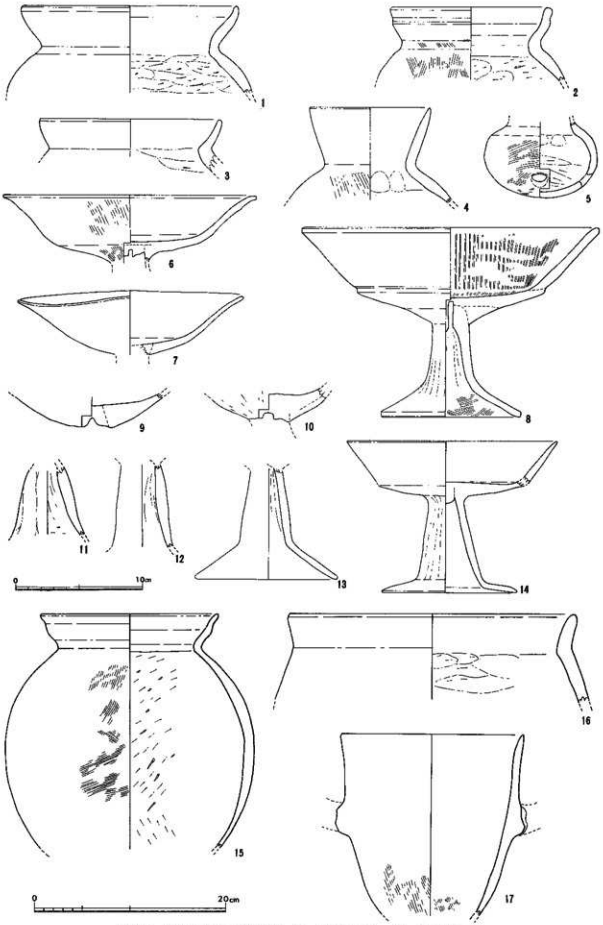
しかしながらこの住居の最大の特徴は、床面が大幅に傾いていることである。住居の奥に向かって約8°の傾斜がみられ、住居の西壁の高さは現状で約1ｍの高さを測る。また南側にむかっても約4°傾いており、正確には床面は南西方向に傾斜しているといえる。いわゆる「半傾斜床竪穴住居」[4]の様相を呈し、検出当初はなぜ傾斜しているのか理解できなかったが、後世の地滑りにより大きく傾いたことが判明している[3]。柱穴がナナメに掘り込まれたようにみえるのは、住居が建てられた後、住居が傾いたことを裏付けるだろう。

ＳＩ03出土遺物（第15図）

すべて土師器である。1～3・15・16は甕である。3タイプに分けられる。1・3はロ縁が内傾気味に外反するタイプである。いずれも黄褐色を呈する。2・15は鈍い稜を有する2重口縁の甕である。2はロ縁は端部に面をもち、15は端部を外反させ丸く収めている。両者とも色調は茶褐色を呈する。16はロ縁が直立気味に短く立ち上がるタイプである。口径が大きく、約30cmを測る。口縁



第14図　ＳＩ03及びＳＤ01平面図（Ｓ＝１／60）

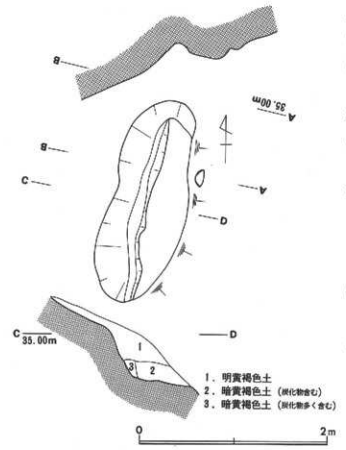


第15図　S I 03出土土器実測図（1～14は1：3　15～17は1：4）

第16図　ＳＤ01出土土器実測図（１：３）

は単純であり後期に下る可能性もあるかもしれない。４・５は小型丸底壺である。４は口縁が逆ハ字状に直立するタイプで、５は口縁を欠いているが体部は４と比較して小型である。ハケメやケズリなどで丁寧に仕上げられており、胴部下方部には下方向から穿孔が施されている。６～14は高坏である。６・７は口縁が底部から緩やかに外反するタイプで、底部に円盤を充填し脚部と接合している。10も底部のみであるが、円盤を充填するタイプと思われる。８・14は底部と口縁部の境に稜をもつタイプである。８は口縁が大きく開き、全面に丹塗りが、内面には暗文が施されている。また、坏部と脚部の境に粘土を巻き付けて両者を固定している。14は口縁が短めで、底部に肥厚した粘土が充填されている。９は底部のみであるが、坏部が椀形を呈するタイプであろう。11～13は脚部のみであるが、粘土を充填するタイプであろう。17は甕である。口径は約19cmを測る。底部を欠くが、口縁は直立している。色調は赤褐色を呈する。

これらの遺物のうち、床面出土のものは２・４～６・８・13～15・17である。高坏等の形態から、ＳＩ03の時期は古墳時代中期と推定される。



第17図　ＳＩ04平面図（Ｓ＝１／40）

ＳＤ01（第14図）

本来は溝状遺構のところでまとめて述べるべきだが、ＳＩ03と遺構が重なっているのでここで記載する。ＳＩ03の北側に位置しており、全貌はＳＩ03と切り合っているので不明だが、直線状を呈し、現状で最大幅1.1ｍ、長さ約２ｍ、深さ20cmを測る。北から南にかけて傾斜している。

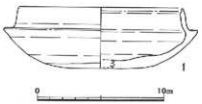
検出時の観察では、ＳＤ01がＳＩ03によって切られているように見受けられた。

ＳＤ01出土遺物（第16図）

２点ほど検出された。いずれも古式土師器の甕の破片である。明瞭な複合口縁を示し、口縁端部に平坦面を有する。出土遺物からみるとＳＤ01は古墳時代前期に相当し、ＳＩ03より古くなる。

ＳＩ04（第17図）

調査区北端に位置し、遺跡の西側斜面と平坦部との境付近より検出された。遺



第18図　ＳＩ04出土土器実測図（1：3）

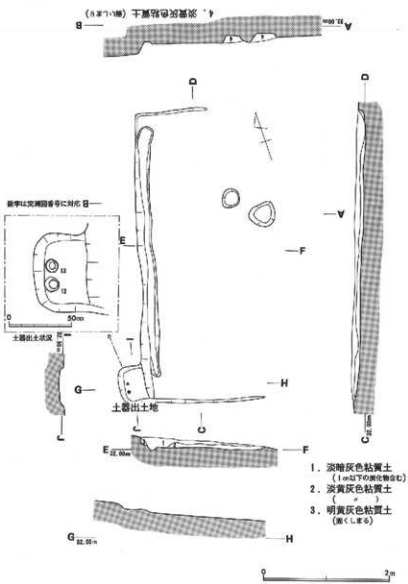
跡の竪穴住居はいずれも東側が流出しているが、ＳＩ04はその最たる住居である。現状で床面の長辺約２ｍ、短辺60cmを測り、住居の北西側の一部しか残存していないことになる。掘り方は現状で約55cmを測る。遺構の周辺は開墾によりかなり削平されていると思われるが、遺構のすぐ東側と西側に地滑り面が通っており（第７図参照）、地滑りにより遺構が崩壊した可能性も考えられなくはない。床面の壁際に壁帯溝がみられることから、竪穴住居と判断した。遺構の東側斜面には窪みがあるが、ＳＩ04のピットの痕跡と考えられる。

ＳＩ04出土遺物（第18図）

東側斜面のピット状の窪みより、須恵器の坏身が出土している。口径12.8cm、器高5.4cmを測る。口縁端部を段状に仕上げている。外面全体に自然釉が付着しており、天井部の調整が不明瞭である。出雲編年[2]の２期古段階に相当すると思われ、ＳＩ04の時期はおよそ６世紀前半と推定される。

ＳＩ05（第19図）

遺跡の中央部の北側で検出された。周辺は緩やかな平坦面が広がっており、床面は標高にして約32.5ｍを測る。遺構の東側は半分以上流出しているが、残存する西側からみて一辺約4.5ｍの方形竪穴住居と思われる。しかしながら、遺構の周辺はかなり削平されているとみられ、住居の壁面は西側でわずか15cm程度しか残存していない。西側の壁際には幅15cmの壁帯溝がみられる。床面には浅いピットが２点検出されたが、位置や規模からみて屋根を支えていたとは考えられず、主柱穴らしきものは検出されなかった。また、遺構の南壁と西壁のコーナー付近に、長さ40cm、幅60cmの土坑状の落ち込みが検出され、底面より土器が２点検



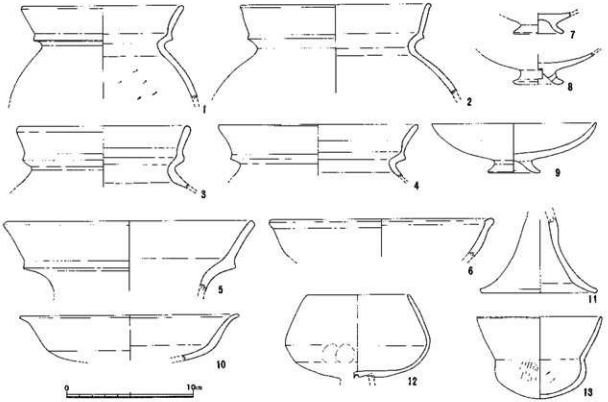
第19図　ＳＩ05平面図（Ｓ＝１／60　囲み内はＳ＝１／30）

出された。この落ち込みの底面とＳＩ05の床面とは６cmの段差がみられる。この落ち込みとＳＩ05の切り合い関係は明確でないが、ＳＩ05南壁がこの落ち込みに自然につながるようも見受けられ、この住居の付属の施設の可能性も考えられる。この類似例として、安来市岩屋口北遺跡のＳＩ05がある。[6] 岩屋口北のＳＩ05は当遺跡のＳＩ05と時期や形態も異なるが、やはり住居のコーナー付近に落ち込みが認められている。調査者はこの落ち込みの性格を不明としているが、住居に付設されたものである可能性も示唆している。

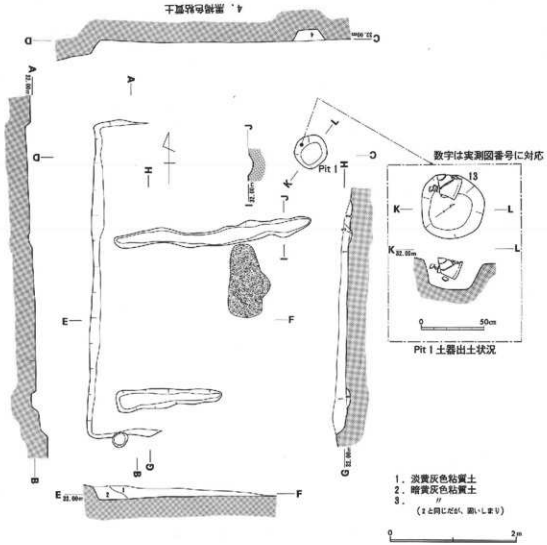
ＳＩ05出土遺物（第20図）

いずれも土師器で、小片が多い。うち１～10がＳＩ０５床面や覆土から、12・13が落ち込みより出土したものである。１～６は甕・壺である。明瞭な複合口縁を示すものと（１～５）、単純なもの（６）がある。風化が著しく、全体的に口縁端部や稜は鈍くなっていると思われる。２は若干端部が屈曲し面をもつ。５は壺であり、器壁が厚手で口縁が大きく外反し、端部に明瞭に面を有している。６は口縁端部のみの小片であるが、端部を外側に外反させ、内面にも肥厚させている。いずれも全体的に薄い乳褐色を呈する。７～９は低脚坏である。７・８は脚部のみである。脚は外反気味に大きく張り出し、７は端部を丸く収め、８には貫通孔が施されている。９は坏部の口縁が内湾気味に大きく開き、口径は13.0cmを測る。坏の深さは口径に対し非常に浅く、脚部は端部が尖り気味である。10・11は高坏である。10は底部から口縁にかけて緩やかに外反する。

12・13は落ち込みの底面に並列して置かれていた。12は当地ではあまり例のない形態のものであるが、ブランデーグラス状を呈する脚付き椀といえるだろう。[7] 口径８cm、器高6.6cmを測る。底部には円盤が充填され、円盤外面には刺突痕がみられる。脚部を欠くが、意図的に打ち欠いた可能性もある。これに似た形態のものは、四隅突出型墳丘墓である西谷３号墓より出土した北陸系とみら



第20図　ＳＩ05出土土器実測図（１：３）



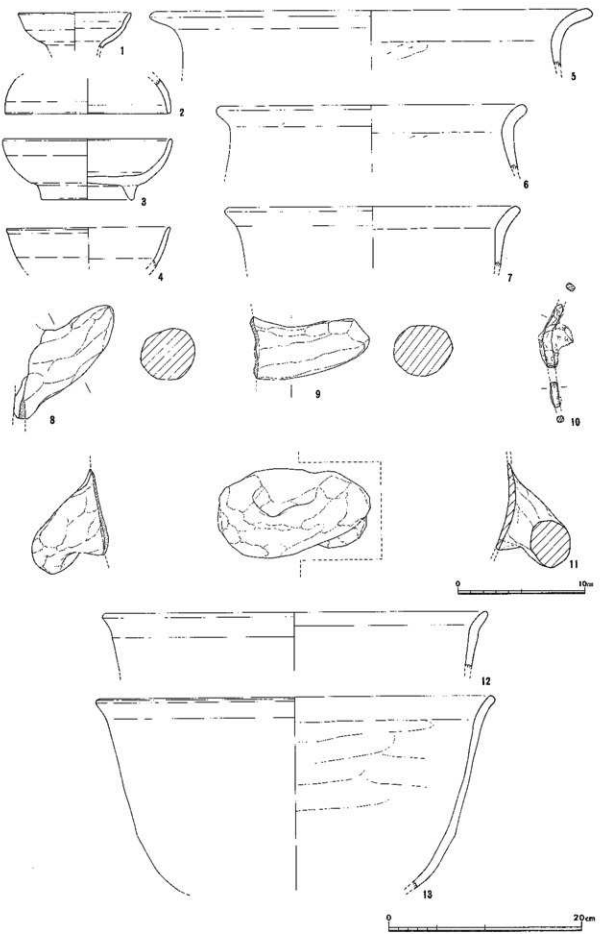
第21図　ＳＩ06平面図（Ｓ＝１／60　囲みはＳ＝１／30）

れる脚付き短頸壺があげられる。[5] しかし当遺跡のものと時期が異なり、その間の時期に同形態のものがみられないことから、同系譜に属するとは考え難い。また胎土は当地の土器と同様に思われる。13は小型丸底壺である。内面にはヘラケズリ痕がみられ、底部は尖り気味で口縁は内傾気味に逆ハ字状に立ち上がる。

これらの遺物は、12を除いて従来の小谷式の範囲に収まるもので、松山編年[3]のＩ期新相に属すると思われる。また13についても、脚部との接合の特徴が小谷式の高杯と同様なので、同時期と考えられよう。よってＳＩ05の時期は古墳時代前期と推定され、落ち込みも住居に付設するものである可能性が高い。

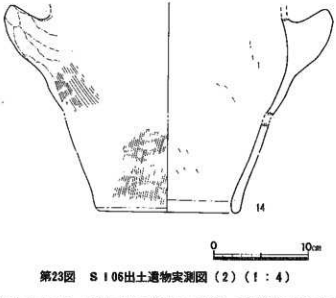
ＳＩ06（第21図）

ＳＩ05の南東５ｍ付近で検出された。遺構の東側は流出しているが、残存している西側から復元して、一辺約4.8ｍの方形竪穴住居と思われる。ＳＩ05と同様、遺構の上方はかなりの削平されていると思われるが、現状で約20㎝の掘り込みが確認できるので竪穴住居と判断した。床面に主柱穴や壁帯溝は検出されなかったが、床面の北東隅付近よりＰ１が検出されている。直径約50㎝、深さ



第22図　S I 06出土遺物実測図（1）（1～11は1：3　12・13は1：4）

約20cmを測り、ピット内より甕の破片が出土した。P1がSI06に伴うものかは不明瞭だが、位置的にみてSI06のいわゆる壁際ピット状のものと思われる。また、床面に東西方向に直線状に延びる溝が2条検出された。2条の溝は布掘状にほぼ平行に延びており、2条の溝の間隔は約2.2mを測る。北側の溝は長さ約3m、最大幅25cm、最大深6cmを測り、南側の溝は長さ約1.6m、最大幅30cm、最大深10cmを測る。南側の溝が短いが、これは流失しているためだろう。この溝の



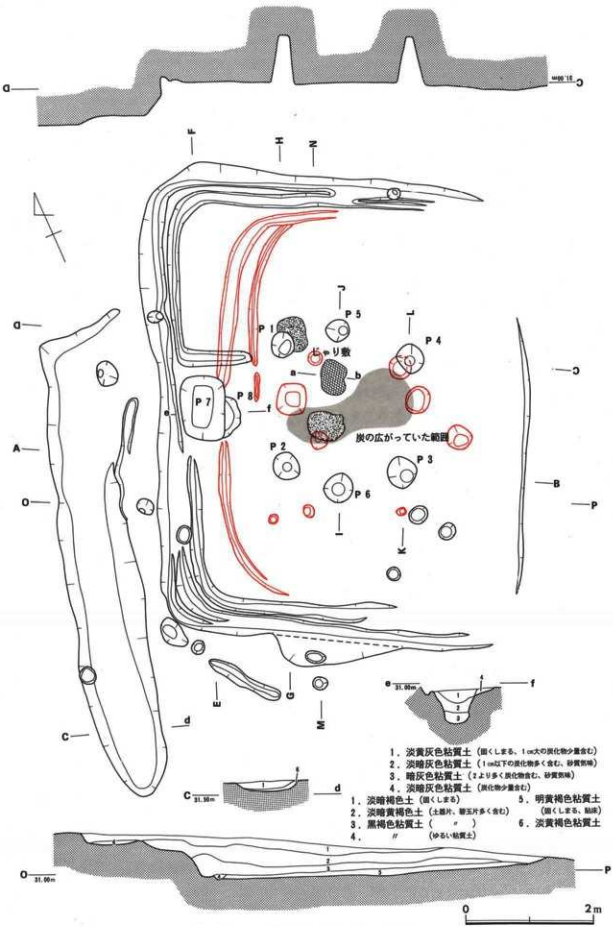
第23図　SI06出土遺物実測図（2）（1：4）

性格については、まず床面の仕切り溝と考えられるが、南側の溝と住居の南壁との距離が狭すぎるように思われる。また布掘建物と竪穴住居が重なっている、或いはSI06自体が布掘建物である可能性もあるが、布掘りに伴うピットが検出されていない。いずれにせよこの溝の性格は不明としかいいようがない。[9] その他、床面中央には焼土が検出されている。南北幅が1m以上あり住居の規模と不釣り合いなほど大きく、固く焼きしまっている。この焼土については熱残留磁気測定を行っており、AD.670±15の測定値が示された（第5章参照）。

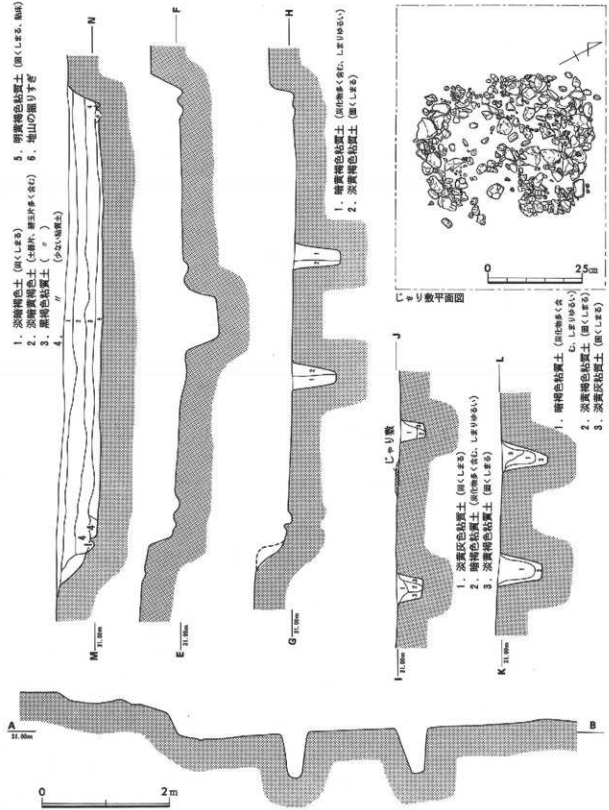
SI06出土遺物（第22・23図）

遺構の残りが悪く、周囲が撹乱されていることもあり、覆土中には様々な時期の遺物がみられた。1～4は須恵器である。1は鉢である。口縁の小片だが、頸部から口縁にかけて丸く立ち上がるタイプである。2は口縁部の小片でなので判断が難しいが坏蓋であろう。口縁は内湾気味に丸みを帯びており、端部を丸く収めている。出窯編年4期[2]の範囲内にあたると思われる。3は溝内より出土した高台付き坏である。復元口径は13.1cmを測る。高台は底部の内側につき、体部は丸みをもって立ち上がる。全体的に風化が著しいが、底部に回転糸切り痕が残る。4は坏の口縁である。復元口径は12.7cmを測る。端部は若干外反しており、口縁が逆ハ字状に立ち上がるタイプであろう。5～7は土師器の甕である。5は口縁が大きく外反し、6・7は口縁の屈曲が緩い。7は頸部が直線的であり、胴部の張出しのないタイプである。8・9は甑の把手である。8は湾曲し、9は直線状を呈する。10は鉄製品である。屈曲しており断面は方形を呈するが、錆の付着が著しく詳細は不明である。鉄釘であろうか。11は甑形土器の把手である。橋状把手の歪みの向きから横方向に復元した。なおこの図ではすぼみ口縁を下にして図化している。12は復元口径の大きさから竈と考えられる。13はP1内から出土した甕である。復元口径は45cmを測り、胴部の張出しがなく胴部に対し口径が広い。14は甑である。底部は無底であり、穿孔の有無は不明である。

さてSI06の時期であるが、遺物は様々なものが混在しており時期特定は困難である。しかしながら、最も数の多い土師器甕の形態や甑、竈の存在から少なくとも古墳時代後期以降であることが伺える。また、P1出土の甕（13）のように胴部の張りがなく、胴部に対し口縁が広いものは8世紀以降にみられるようである。[10] さらに溝内から出土している高台付き坏（3）は回転糸切り痕がみられることから、SI08の時期はおよそ8世紀代と推定できるのではないだろうか。



第24図　ＳＩ07平面図（1）（S＝1／60）



第25図　ＳＩ07平面図（２）（Ｓ＝１／60　囲み内はＳ＝１／30）

ＳＩ07（新）（第24・25図）

遺跡の平坦部のほぼ東端付近に位置し、住居の堆積土や床面からは多数の碧玉片が検出された。

遺構の東側は流出しているが、わずかに段差が残っている。これをもとに復元すると掘り方で南北7.3m、東西5.8m、床面で南北7m、東西5.5mを測る方形竪穴住居であり、遺跡内の竪穴住居では最大の規模を誇る。建て替えが行われているようで、床面にはピットが13点、壁帯溝も2重になって検出された。また、この住居は床面を粘土で貼っており、その貼り床を除去するとさらに新たなピットと溝が検出された。24図の赤線で示したものがそうである。従って、貼り床後をSI07の新段階、貼り床前をSI07の古段階とする。ここでは新段階について述べ、古段階については後述する。

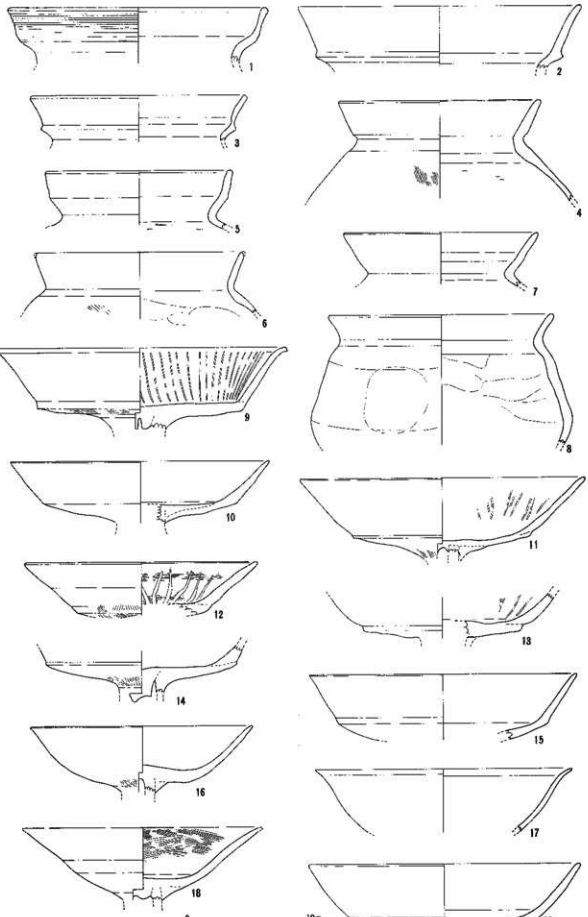
ピットは床面中央に六角形状に検出されている。これは主柱穴がP1～P4の4本柱の時とP5・P6の2本柱の時に分けられるだろう。壁際には切り合っているP7・P8があり、壁帯溝も2重に検出されている。建て替えごとに住居の規模は大きくなったと考えられるので、恐らく「4本柱・外側の壁帯溝・壁際ピットP7」の段階と、「2本柱・内側の壁帯溝・壁際ピットP8」の段階と区別できる。その前後関係は、壁際ピットの切り合いから前者が新しく、後者が古くなると考えられる。また、壁際ピットの北側には壁帯溝が続いているが、南側にはみられない。これは、SI07検出時にトレンチをちょうどこの位置に設定したため、床面を掘りすぎて溝をなくした可能性があり、本来は壁際ピットを挟む形で両側に溝が存在していたと考えられる。ところで、壁際ピットを挟む溝は内側の壁帯溝から延びており、4本柱時の壁際ピットであるP7の段階では、両側に溝が存在しなかったことになる。焼土も2面みられるが、北側の焼土はP1によって切られていることから、2本柱時の焼土であると考えられる。また、床面中央の焼土の北側には幅約50cmの砂利敷きが検出された。粘土で固められておりSI03で検出されたものと同様であるが、SI03では壁際ピットの手前に敷かれていた。さらに床面であるが、SI03同様、住居の西側に向かって若干の傾斜が認められる。これはSI07の特徴であるのか、或いは地滑りの影響を受けているのかは不明である。

その他、SI07の西側に幅1.1m、長さ7.5mの溝が検出されている。土層観察ではSI07と同時に存在していたように見受けられるが、その性格は明らかでない。溝自体は南から北にかけて傾斜しており、北端はSI07の中心付近に向かって屈曲している。雨水等を住居内に導入するための施設と考えられなくもないが、想像の域であり定かではない。また、その溝の内側とSI07の南側にも幅25cm程度の小さい溝が検出されている。竪穴住居の壁帯溝の痕跡とも考えられ、SI07と切り合っている住居が存在していた可能性もあるが、現状では不明瞭である。

しかしながら、SI07の最大の特徴は玉作を行っていたことであり、現状からSI07の最後の建て替え時（4本柱時）に玉作工房になったことが伺える。壁際ピットであるP7は幅70cm、長さ102cm、深さ84cmを測り、円形状であるP8に比べより大規模に方形状に掘り変えられている。従来よりいわれる「工作用ピット」に相当するものであるが、ピット内の堆積土について土壌分析を行っており（第5章参照）、その結果を踏まえピットの機能等については後章で触れてみたい。また、このピットの名称について「壁際ピット」と「工作用ピット」を併用して述べることがあるが、「工作用ピット」と呼ぶ場合はSI07のP7に限定して用いることにする。

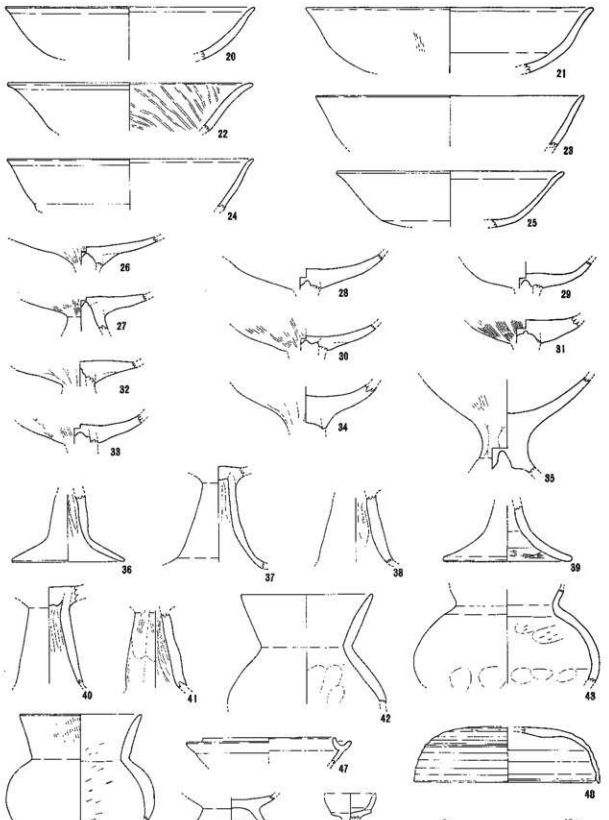
SI07出土遺物（第26・27図）

ほとんど土師器であり、中でも高坏が目に付いた。1～8は甕である。1は風化が著しく端部や稜は鈍くなっている。口縁外面には櫛状の工具によると思われる擬凹線が施されている。弥生後期



第26図　ＳＩ07出土土器実測図（1）（1：3）

のものである。2・3は明瞭な複合口縁を示すものである。口縁は大きく外反し、端部に面をもつ。4・5は口縁は短小で複合口縁が退化した形態を示すものである。器壁は厚手で、色調は茶褐色を呈する。7も風化が著しいが、同タイプのものと思われる。6・8はくの字口縁を示すものである。



第27図　S I07出土土器実測図（2）（1：3）

8は肩部付近が平板で叩かれたように平坦になっている。そのためか胴部の張りのピークは胴部下半にある。9～25は高坏の坏部である。9～16・22・24は底部と口縁部の境に明確に段をもち、口縁が大きく外反するタイプである。9は壁際ピットP7から出土した口径23.1cmを測る大型のものである。口縁内面には暗文が施され、底部外面には螺旋状にハケメが施されている。坏底部には肥厚した粘土が充填されており、深さ0.9cmの刺突痕がみられる。11～13・22は内面に暗文がみられ、12はハケメの後暗文が施されている。また、11は全面に丹塗りが顕著である。14は底部に肥厚した粘土が充填されているが、刺突痕はみられない。17～21・23・25は底部から口縁にかけて緩やかに立ち上がるタイプで、端部が大きく外反する。18は底部に肥厚した粘土を充填しており、刺突痕はみられない。内面にはハケメが著しい。20はP6内より出土している。26～35は坏の底部から脚部にかけて残存しているものである。およそ底部に円盤を充填するもの（26～33）と坏が椀形になるもの（34・35）に分類できる。34・35は器壁が厚手で、35は脚内上部に深さ1.5cmの刺突痕がみられる。36～41は高坏の脚部である。36～38・40・41の内面にはしぼり痕が残る。39は端部内面にハケメが施されている。37と40は充填された肥厚した粘土が残っている。42～44は小型丸底壺である。いずれも口縁は逆ハ字状に開き、口縁より胴部が大きく張り出すタイプである。内面にハケメや指頭圧痕が残る。45は土師質土器の坏で、ハ字状に開く高台をもつ。46は高坏を模したミニチュア土器である。小さいながらも口縁と底部の境に段をもっている。口縁端部が残っているか不明瞭だが、復元口径4cmを測る。47・48は須恵器である。住居内より2点ほど出土した。47は坏身である。口縁部の小片であり、復元口径10.5cmを測る。口縁の立ち上がりは非常に短く、出雲編年[20]5期に相当すると思われる。48は坏蓋である。復元口径は14.6cmを測る。口縁端部には段があり、口縁と天井部との境には強いナデで稜を表現している。出雲編年の2期に相当する。

これらの遺物のうち、床面、あるいはピット内より検出されてたものは3・4・9・10・12・14・16～20・22・24・30・32・33・37・42・44である。弥生土器の1や土師質土器の45、須恵器の47・48は上層からの出土で周囲からの流れ込みであろう。床面から出土したものでも形態にばらつきがあるが、高坏は底部に粘土を充填し、口縁と底部の境に段を有するものが多い。遺物の下限はおよそ松山編年[20]のⅡ期新段階と考えられ、SI07の時期は古墳時代中期と推定される。

SI07出土玉製品[11]（第28～35図）

SI07からは玉作に使用された碧玉や瑪瑙、滑石などが約450点出土している。そのほとんどが剥片やチップであるが、明らかな未製品も30点ちかく検出されている。ここでは未製品と考えられるものを、出土した位置により「床面～下層」と「上層」に分け、製作工程順に完成品に近いものから図化した。また、製作工程品の呼び方につい

SI07の調査では、小さな碧玉片などを漏らさないように住居内の堆積土をすべて篩にかけた。白玉などをこれで見つけることができた。

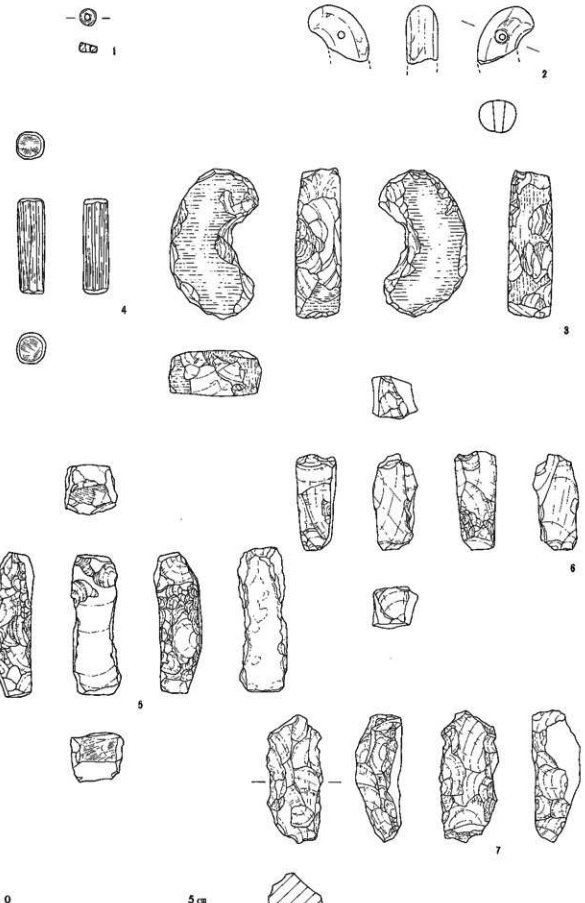
ては、松江市・福富Ⅰ遺跡[12]で報告された成果を参考に、「仕上げ工程品」「一次研磨工程品」「側面打裂品（調整剥片、角柱状加工品含む）」「素材剥片」「石核」「原材」とする。その他、接合資料が層位関係なく出土しているので、まとめて図化した。なお、遺物の面などの呼び方は、便宜上図示した方向に従っている。

未製品としては勾玉・管玉・臼玉が出土している。1は滑石製の臼玉である。片面が斜めになっており、仕上げ研磨の途中のものであろうか。直径・高さとも0.46cmを測る。2は碧玉製の勾玉である。穿孔も完了し、仕上げ研磨もきめ細かく行われている。もはや未製品とは呼べない段階のものであり、欠損部の断面も球形を呈する。なお穿孔は片面穿孔である。現状で長さ1.85cm、幅1cmを測る。3は碧玉製勾玉の一次研磨工程品である。背面や腹部を調整剥離により曲線に仕上げており、一見して勾玉と判断することができる。両側面は長軸に対し横方向に、背面は縦方向に研磨が行われているが、抉られている腹部は研磨痕が見られない。また、左側面の上部に研磨されていない窪みが見られるが、穿孔の痕跡であろうか。長さ3.7cm、幅1.7cmを測り、断面は長方形である。4は碧玉製の管玉の一次研磨工程品である。穿孔は行われていないが、細かい縦方向の研磨により12角柱に整形されている。長さ2.4cm、幅0.7cmを測る。5は碧玉製の管玉未製品である。上下の端部に研磨が行われており、一次研磨工程品とで考えられる。両側面は細かく調整されているが、表裏面は自然面が残るなど調整剥離が行われていない。長さ3.6cm、幅1cmを測る。6・7は碧玉製管玉の側面打裂工程品と思われるが、6は4・5に比べて短く、7は全体的に平べったい印象を受ける。6は長さ3.6cm、幅1.3cmを測る。形態は直方体を呈し全面に主要剥離面を残しており、調整前の素材剥片の可能性もある。7は長さ3.3cm、幅1.3cmを測り、縁辺に細かな調整が行われている。いずれも研磨痕はみられない。8・9・10は碧玉製の角柱状未製品であるが、長さが2cmもなく、勾玉か管玉か判別が難しい。だが後述する上層出土のものに同規格の管玉仕上げ工程品がみられることから、管玉の側面打裂工程品と考えられる。ただ9については角柱状を呈しておらず管玉と考えにくいが、碧玉製勾玉については9と同規格のものがみられないことから、ここでは管玉未製品としておきたい。11も側面打裂工程品である。器種の判別が難しいが、形態は角柱状を示さず、側面を湾曲気味に整形していることから勾玉と考えられる。

第30・31図は接合した資料である。12は5点の剥片が接合されたものであるが、剥片自体が素材剥片になるものはない。12(b)・12(c)は自然面が残っており、原材から石核・素材剥片を採取する際に順に剥離されたものと考えられる。12(d)は床面からの出土であるが、他は上層から検出されたものである。13は2点接合されたものである。13(a)は自然面の残る偏平のものであるが、13(b)は、長さ2.2cm、幅2cmの立方体を呈する素材剥片である。2次的な加工は認められないが、これに調整剥離を施し、8・10のように整形されることが考えられる。

第32～35図は上層より出土したものである。14～16は勾玉の仕上げ工程品であるが、材質が異なる。14は滑石製のもので、破損が著しい。現状で長さ1.7cm、幅0.7cmを測る。15も滑石製と考えられるものである。尾部の先端を欠くが、現状で長さ1.1cm、幅0.5cmを測る小型品である。16は検出時に尾部先端を欠いてしまったが、蛎石質の勾玉である。現状で長さ2.4cm、幅0.9cmを測る。

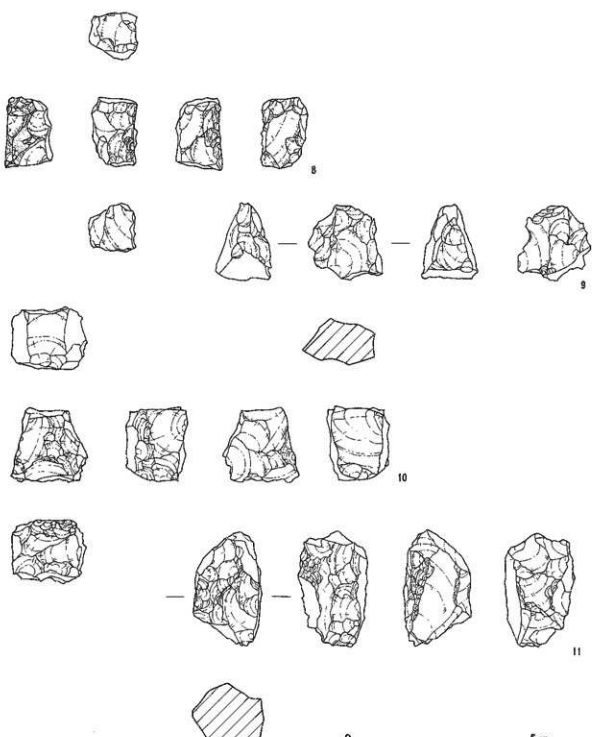
17～20は碧玉製の管玉未製品である。17は仕上げ工程品である。両面穿孔が行われており、側面には粗い研磨痕が残る。長さ1.7cm、幅0.5cmを測る。18は一次研磨工程品で、上端面に研磨痕がみられる。側面は細かく剥離されており、角柱状に仕上げている。長さ3.3cm、幅1.2cmを測る。19・



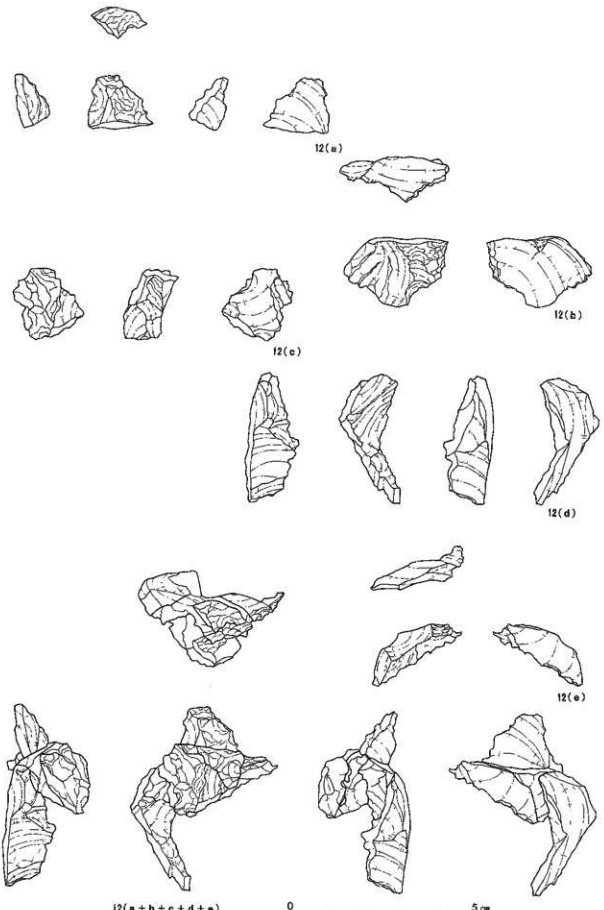
第28図　S I 07下層～床面出土滑石・碧玉未製品実測図（1）（1：1）

20も角柱状に仕上げられた側面打裂工程品である。18と大きさに差があり、異なる規格があったことを伺わせる。いずれも長さ約2.3cm、幅0.9cm程度である。また20は碧玉製と思われるが、かなり黒色を呈している。21は碧玉製勾玉で、側面に細かく調整剥離が行われている。22は碧玉製の剥片であるが、側面に２次的な剥離痕がみられる。器種の判別が難しく、その形態は小型の勾玉を意図しているように見えなくもないが、よくわからない。

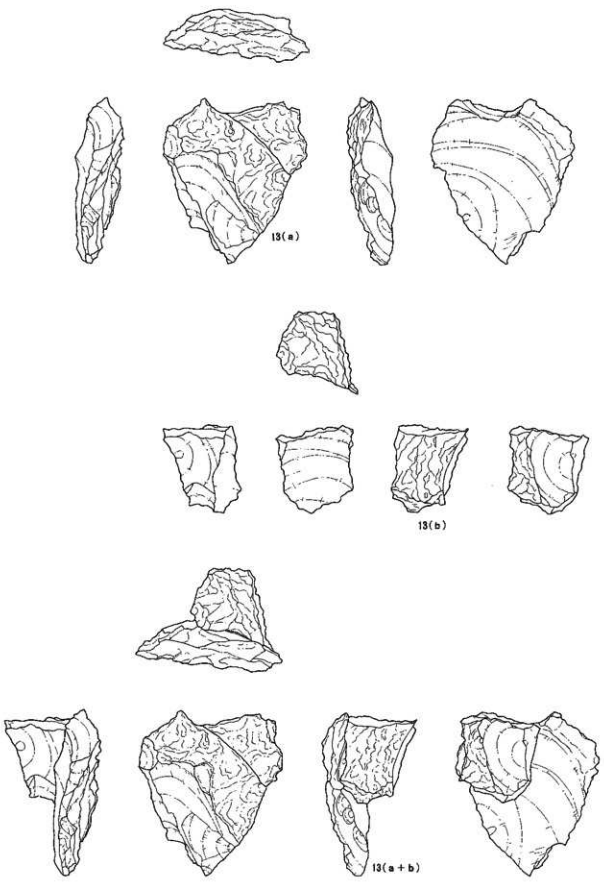
第33図23は碧玉製の石核に相当する。ＳＩ07から出土した碧玉で、石核と考えられるのはこの１



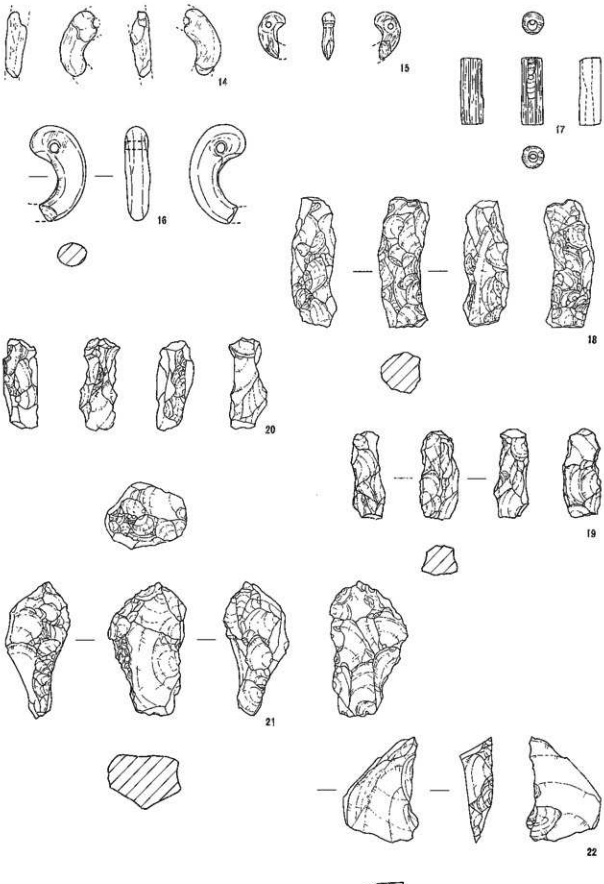
第29図　ＳＩ07下層～床面出土碧玉未製品実測図（2）（１：１）



第30図　S I 07上層～床面出土碧玉接合資料実測図（1）（1：1）



第31図　S I 07上層～床面出土碧玉接合資料実測図（2）（1：1）



第32図　ＳＩ07上層出土玉未製品実測図（１：１）

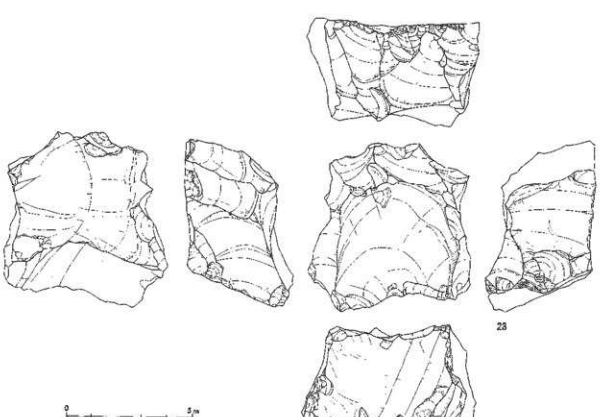
点のみである。長さ4.4cm、幅5.8cm、厚さ3.8cmを測り、直方体を呈している。側面に素材剥片を剥離した痕跡がみられ、この石核からは偏平な長方形状の素材剥片が採られたように考えられる。

第34図はＳＩ07の上層で出土した接合資料である。24(a)は長さ3.3cm、幅2.5cmを測る偏平な剥片である。24(b)は側面をかなり敲打した痕跡がみられるが、調整剥離ではないだろう。長さ3.2cm、幅2.7cmを測る。いずれも表面に自然面を残している。なお、24(a)は中心付近で２つに分かれるが、打ち欠いて分離したものではないと思われる。

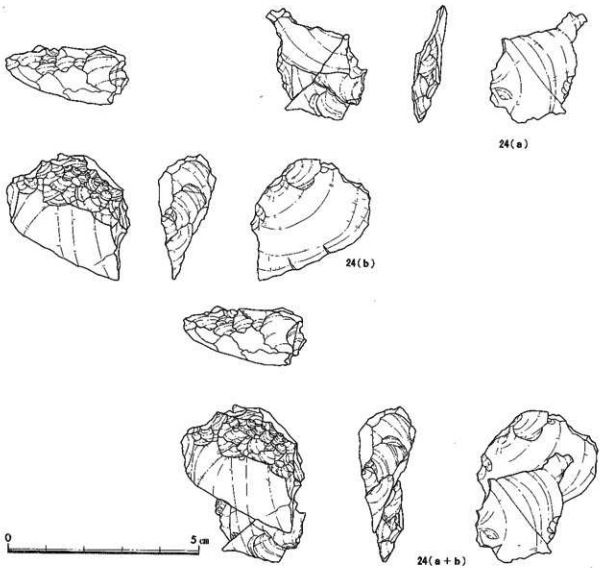
第35図は上層出土の小玉・臼玉・有孔円盤である。１・２はガラス質の小玉である。いずれも青色を呈する。１・２とも長さ、幅とも約0.5cmを測り、他に出土している臼玉とほぼ同規格である。側面に細かな削痕がみられるが、研磨痕であろうか。３～６は滑石製の臼玉である。いずれも大きさが微妙に異なるが、直径でおよそ0.4cm前後を測る。両面に研磨痕がみられ、面がナナメのものは研磨途中品であろうか。６は厚さ約0.1cmと非常に薄いものである。７は滑石製の有孔円盤である。直径2.3cm、厚さ0.6cmを測る。穿孔は両面から施され、両面にわずかに研磨痕が残る。この円盤の用途は明らかでないが、同様のものは東出雲町内の四ツ廻Ⅱ遺跡[13]や原ノ前遺跡[9]でも出土している。

ＳＩ07出土その他の遺物（第37図）

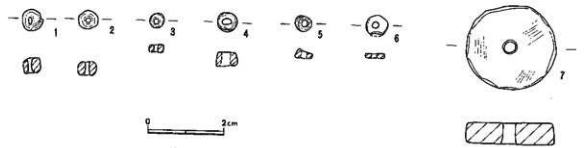
１は上層から出土した玉髄製の無茎石鏃である。長さ2.4cm、幅1.3cm、厚さ0.4cmを測る。縄文時代の遺物と思われる。２は床面から出土した凝灰岩質の砥石である[16]。長さ13cm、幅14.5cm、厚さ6.2cmを測り、広い面が砥面として利用されている。しかしながら表面は凸凹しており、わずかに磨かれている程度で、砥石としては長時間使用されていなかったような印象を受ける。玉の砥石で



第33図　ＳＩ07上層出土碧玉石核実測図（2：3）



第34図　ＳＩ07上層出土碧玉接合資料実測図（１：１）



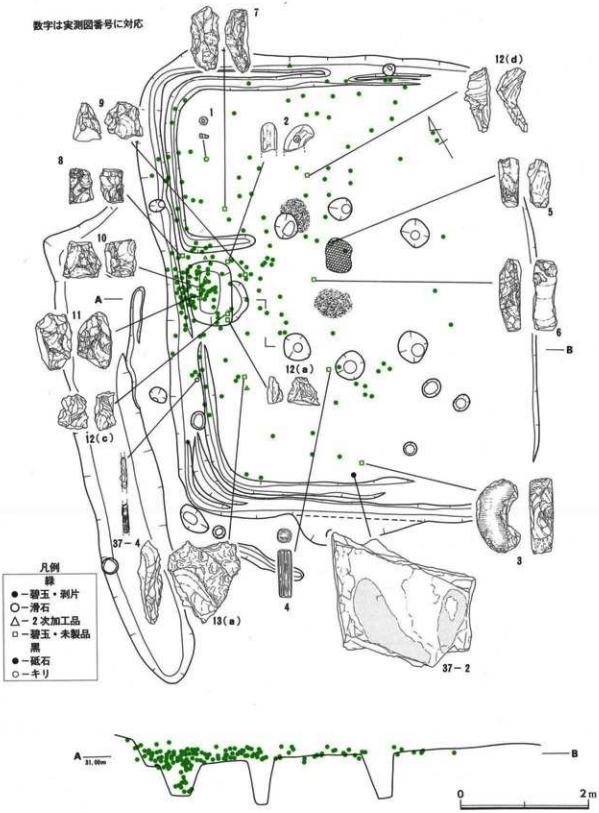
第35図　ＳＩ07上層出土ガラス質・滑石未製品実測図（１：１）

はなく、錐などの鉄製品用と思われる。３・４・５は鉄製品である。３は偏平な長方形を呈するタガネ状鉄製品である。基部が欠損しているが、現状で長さ４cm、幅1.9cm、厚さ0.5cmを測る。下層から出土している。４は床面から出土した錐状の鉄製工具である。ここでは先端部を上に図化している。破損が著しいが下は基部と考えられ、木質が残存しており断面は長方形を呈する。上は断面が円形を呈し、先端にいくに従い細くなっている。５は円盤状の鉄製品である。直径およそ5.3cmを測る。玉の穿孔に舞錐法が用いられたとし、その際の弾み車などと考えられなくもないが、中央

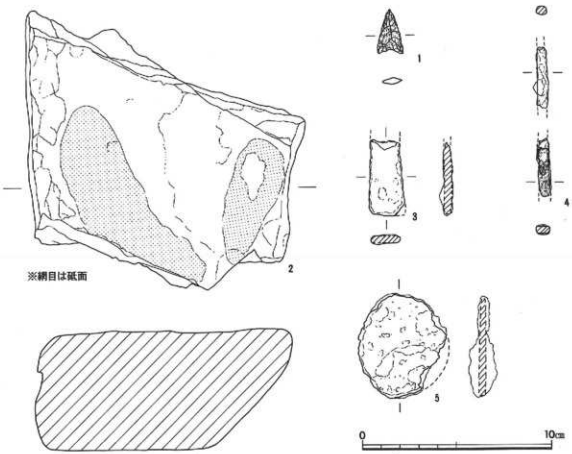
に穿孔がみられず、その用途は不明である。

未製品・剥片の分布状況（第36図）

住居内堆積土からは、前述した未製品以外にも剥片やチップが多数検出されている。ここではそれらの資料を利用して遺物の分布状況を観察し、ＳＩ07で行われた玉作についての一応の傾向を考



第36図　ＳＩ07未製品・剥片の分布状況（Ｓ＝１／60）



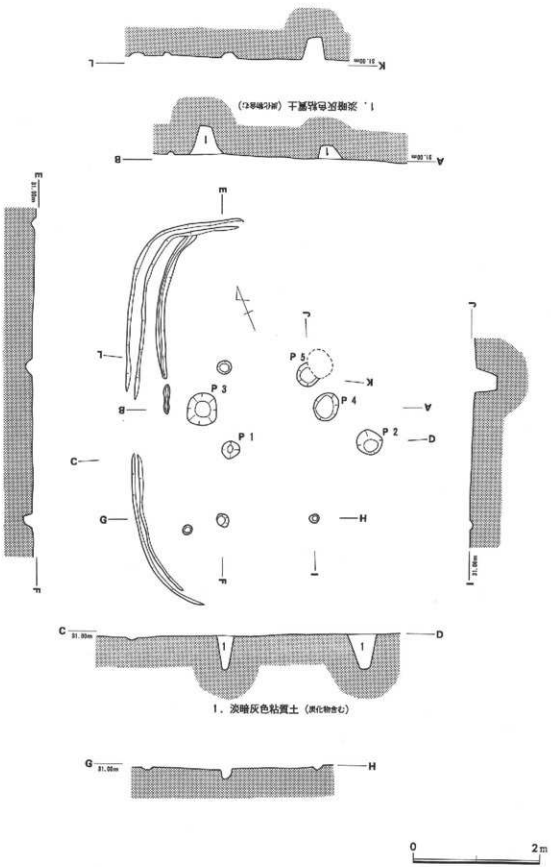
第37図　ＳＩ07出土遺物実測図（１：２）

えてみたい。なお、その際に上層出土の資料を省き、下層～床面出土の資料と床面出土の砥石や鉄製工具についての分布状況の復元を試みた。ただし、これはあくまで検出された現状を元にした見解であることを前置きしておく。発掘された段階では住居の東側が流出しており、さらに床面も西側に向かって傾斜しているなど、ＳＩ07が破棄された時点とはかなり様相が異なることが明白だからである。なお、検出された碧玉未製品・剥片は総数にして208点を数え、うち未製品が10点、接合資料は４点みられた。石材別にみると、検出されたものは滑石製の臼玉１点を除けば、すべて碧玉であることが判明した。

以上を前提に図を観察すると、遺物の分布状況は住居の西半分、特に壁際ピット周辺に集中しているのが一目瞭然である。また、未製品や接合資料、砥石・鉄製品もすべて西側に分布していることがわかる。従ってこの図が示す範囲内では、玉作の作業工程は壁際ピット周辺で行われていたとみることができる。

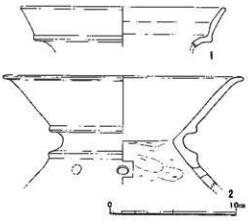
次に未製品10点をみると、側面打裂工程品（５・７・８・９・10・11）と一次研磨工程以降のもの（２・３・４・６）に分けられる。うち研磨痕がみられるものは、主に住居の南側に分布する傾向がある。それに対応するかのように砥石（37－２）も南側壁帯溝付近で検出されている。この状況をそのまま受け取れば、研磨工程は住居の南側付近で行われ、形割りや調整剥離は壁際ピット周辺で行われていたと考えることができる。

ＳＩ07（古）（第38図）



第38図　ＳＩ07貼床除去後平面図（Ｓ＝１／60）

最初に検出されたＳＩ07（新）の床面全面には厚さ約10cmの粘土が貼られており、その粘土を除去すると下から新たな溝とピットが９点検出された。これをＳＩ07の古段階とする。建て替えの際にかなり改変されていると思われ住居の形態等はあまり明確でない。しかしながら、西側に壁帯溝とみられる溝が残っているので、これを元に復元すると、一辺約5.5ｍを測る隅丸方形の竪穴住居となる。また、溝は２条みられ、内側の溝を外側の溝が切っている。そのため、ＳＩ07の古段階においても建て替えが行われていたと考えられる。



第39図　ＳＩ07貼床除去後出土土器実測図
（1：3）

主柱穴は２本柱と思われ、ピットと溝との距離から「外側の溝とＰ３・Ｐ４の２本柱」の段階と「内側の溝とＰ１・Ｐ２の２本柱」の段階とに区別できる。その前後関係は、溝の切り合いから前者が新しく、後者が古いと考えられる。なお、外側の溝が中央で途切れているのは、この部分に新段階の壁際ピットが掘られるからである。また、Ｐ５は並びを示さないピットであるが、或いは新段階の壁際ピットのような機能をもつものかもしれない。

以上のように、ＳＩ07は新段階も含めて４回の建て替えが行われていたことになる。

ＳＩ07（古）出土遺物（第39図）

２点ほど出土しており、いずれも古式土師器に相当する。１は床面から出土した甕の口縁である。風化が著しいが、復合口縁を呈し端部はわずかに屈曲している。２はＰ５から出土した鼓形器台である。脚台部は先端を欠くが、直径約1cmの穿孔が２点確認できる。

これらの遺物の時期であるが、甕の形態や鼓形器台があることから従来の小谷式の範囲に収まるものと考えられ、ＳＩ07（古）は古墳時代前期に推定される。これらは松山編年[3]Ⅰ期古段階まで溯る可能性もあり、遺物をみた限りでは、松山編年Ⅱ期新段階としたＳＩ07（新）とＳＩ07（古）とは隔たりがみられる。

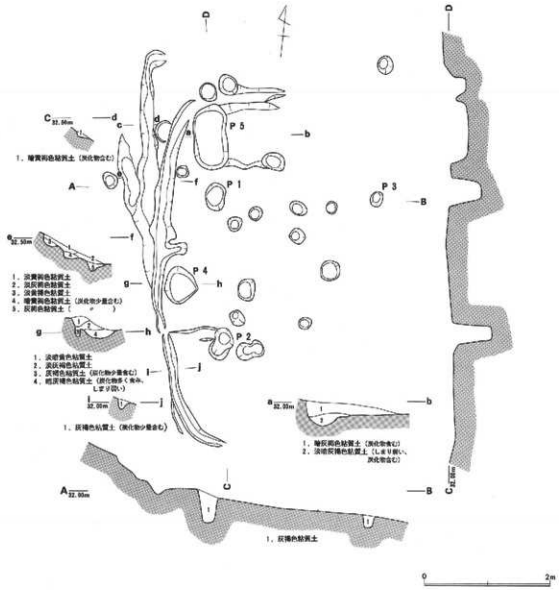
ＳＩ07観察表

		時　期	床　面				壁際（中央）ピットの特徴				備　考
			形　態	規　模	主柱穴	柱　間	形態	最大径	深さ	位置	
新段階	ＳＩ07－４期	古墳時代中期（松山Ⅱ期新）	方形	南北6.6m	４本柱	南北1.9m 東西1.9m	四角形	102cm	54cm	壁際	玉作工房址
	ＳＩ07－３期	古墳時代中期か	方形	南北6.2m	２本柱	南北2.5m	円形	70cm	15cm	壁際	壁際ピットを溝が挟む
古段階	ＳＩ07－２期	古墳時代前期（松山Ⅰ期古～新）	隅丸方形	南北5.5m	２本柱	東西1.9m	円形	36cm	35cm	中央・付近か	
	ＳＩ07－１期	古墳時代前期か	隅丸方形	推定 南北5.5m	２本柱	東西2.3m	円形	36cm	35cm	中央付近か	

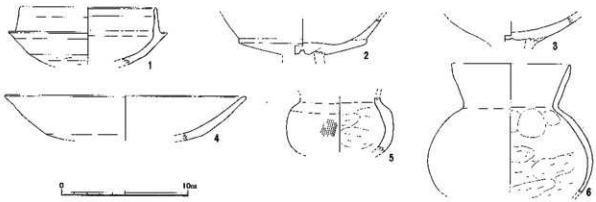
ＳＩ08（第40図）

ＳＩ08は、遺跡の平坦部やや南よりに位置する。この周辺は開墾により遺跡内でもかなり削平されているところでもある。従って遺構の残りは悪く、床面もかなり削平されており竪穴住居の掘り方はほとんど検出できなかった。遺構の西側で壁帯溝が残っており、それを元に復元すると、一辺約５ｍのやや隅丸方形の竪穴住居と考えられる。床面には16点のピットがみられるが、主柱穴はＰ１～Ｐ３の３本であり、もう一本は失われているが４本柱で屋根を支えていたと思われる。壁際のＰ４が壁際ピットに相当すると思われ、柱穴と比べると直径は大きく深さは浅い。そのＰ４を挟むように壁帯溝が延びているが、北側の溝は短く、南側の溝はＰ２まで延びている。また、床面の北端にはＰ５がみられ、長さ１ｍ、幅0.5ｍ、深さ0.3ｍを測る。逆台形状に掘り込まれており、さらにＰ５の東側は、Ｐ５と同じ長さで床面より20㎝下がった落ち込みが続いている。これが何の機能を示しているのかは不明である。

また、ＳＩ08の東側には南北に延びる２段の段差がみられる。ＳＩ08に伴うものかは定かでない



第40図　ＳＩ08平面図（Ｓ＝１／60）



第41図　ＳＩ08出土土器実測図（１：３）

が、内側の段の北端は溝状を呈し直角に屈曲している。また、角度的にみてこの段はＳＩ08の南側には続かないように見受けられる。図をみる限りでは、ＳＩ08と他の住居跡・加工段が切り合っているように見受けられるが、遺構の残りが悪く土層観察でも切り合い関係を明確にできなかった。ＳＩ08の床面にはピットが多数検出されており、この段に伴う柱穴とも考えられるが、住居跡のような並び方は示さない。従ってこの段の性格は不明と言わざるをえない。

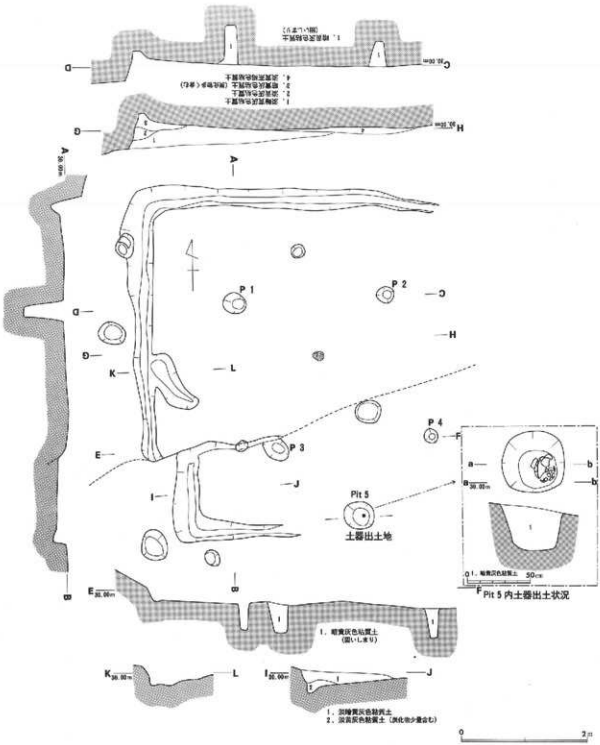
ＳＩ08出土遺物（第41図）

遺物については、遺構の大半が流出しているため床面出土のものはみられなかった。１は須恵器、３～６は土師器である。１は坏身である。口縁はほぼ直立気味に立ち上がり、端部には段を有しない。大谷編年[22]２期新段階に属するものであろう。復元口径は10.5cmを測る。２～４は高坏である。２は口縁部を欠くが、底部と口の境に明確に段を有している。底部には円盤が充填されており、円盤外面には刺突痕がみられる。３は坏の底部の破片である。小片であるため詳細は不明瞭だが、口縁は内湾気味に立ち上がる様相をみせる。４は口縁部である。底部から口縁にかけて緩やかに外反する。５・６は小型丸底壺である。５は胴部のみの残存で、外面にハケメ、内面にケズリがわずかに残るが、つくりは全体的に雑である。６はＰ５から出土した。口縁が逆ハ字状に開き、口径に対し胴部の方が大きい。

これらの遺物は、４を除けばすべて溝・ピット内から検出されたものであるが、時期にばらつきがあり、ＳＩ08の時期を特定するのは難しい。土師器については高坏の形態から、およそ松山編年[23]のⅡ期の範囲内と考えられるが、坏身１と時期差が生じてしまう。しかしながら、坏身と同時期のものが他に見受けられないことから、坏身は流れ込みである可能性が高い。従って、ＳＩ08の時期は古墳時代中期と推定される。

ＳＩ09（第42図）

ＳＩ09は調査区のほぼ南端で検出された。位置的に水田部に抜ける谷状斜面に立地しており、周辺はもはや平坦部とは呼べない様相を呈している。そのため遺構は斜面に沿ったように東側が流出している。その他は掘り方が比較的良好に残存しているが、住居内を断層が東西に通っており床面には垂直方向に15cmの段差と、水平方向に65cmものズレが生じている。第42図の破線で示したものがおおよその断層のラインである。その影響なのかは不明だが、床面自体もちょうど中央付近から西壁に向かって傾斜している。しかしながら断層を抜きにすると、床面形で一辺約５ｍを測る方形



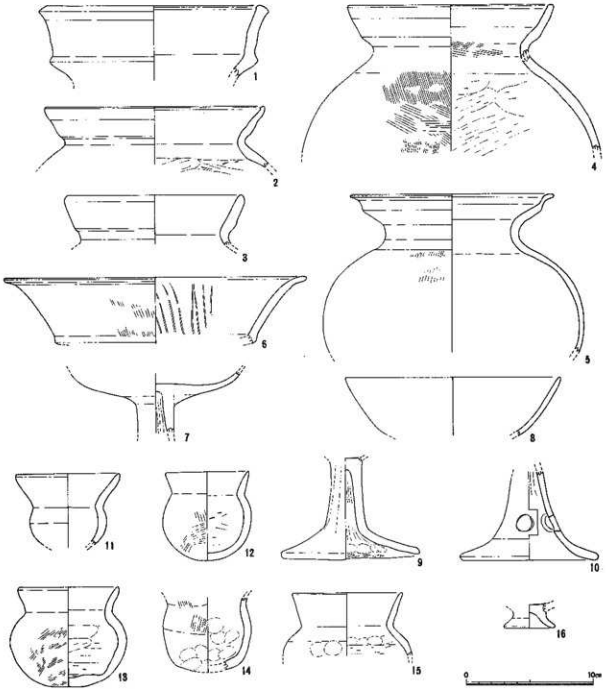
第42図　ＳＩ09平面図（Ｓ＝１／60　囲み内はＳ＝１／30）

竪穴住居が復元できる。主柱穴はＰ１～Ｐ４の４本柱であるが、床面のズレのため形状はあたかも平行四辺形を呈している。また、断層はちょうどＰ３を横切っており、そのためＰ３は２つに分断している。その他、床面中央から小規模な焼土面が検出され、南壁付近には壁際ピットであるＰ５がみられる。そのＰ５内からは土師器の壺が検出されている。遺跡内の他の竪穴住居にみられる壁際ピットは、すべて住居の西壁沿いに検出されたが、ＳＩ09のみ南壁沿いに付設している。その反面、壁帯溝がちょうど西壁の中心付近で土坑状に突出している。これが何の機能を示しているのか

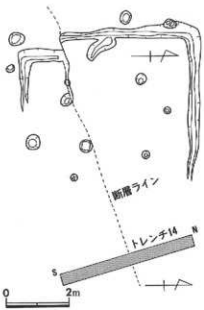
は不明であるが、或いは西壁の土坑状の溝が本来の壁際ピットの役割を示し、南壁のＰ５はＳＩ03やＳＩ08に付設している土坑状ピットにあたるのかもしれない。

ＳＩ09出土遺物（第43図）

すべて土師器である。１～５は壺・甕である。１は複合口縁を呈する壺である。端部は平坦を呈し外方に肥厚する。器壁は厚い。２は口縁が内湾気味に立ち上がり、端部は内側に肥厚する。３・４は口縁は内湾気味に立ち上がり、複合口縁が退化したような形態を示す。器壁は厚手である。４は肩部に縦方向のハケメが施され、頸部内面にもハケメが施されている。５はＰ５から出土した壺である。複合口縁を呈するが、端部は肥厚し大きく屈曲する。肩部は大きく張り、ハケメが施され



第43図　ＳＩ09出土土器実測図（１：３）



第44図　ＳＩ09東側トレンチ14位置図（Ｓ＝１／120）

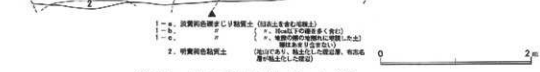
ている。6～10は高坏である。6・8は坏部の口縁である。6は明瞭に段を有し、端部は屈曲気味に大きく外反する。外面にはハケメが、内面には暗文が施されている。8は口縁が内湾気味に立ち上がり、椀状を呈するタイプである。7は口縁部を欠くが、底部に粘土を充填した痕跡はみられない。底部は平坦である。9・10は脚部である。9は脚が筒状を呈し、内面にしぼり痕が残る。10は緩やかに開くタイプで、円形透しが施されている。11～15は小型丸底壺である。1は胴部に対し口縁が大きく開く。12～15はほぼ同タイプであるが、12・14は胴部に張りがない。12はつくりがかなり雑な印象をうける。13・15は口縁が逆ハ字状に開くが、13は厚手で短小である。16は上層から出土した低脚坏の脚部である。

これらの遺物は若干のばらつきはあるが、おおよそ松山編年[3]のⅡ期新段階～Ⅲ期に位置づけられ、ＳＩ09の時期は古墳時代中期と推定される。

ＳＩ09にみられる断層についてのトレンチ調査（第44・45図）

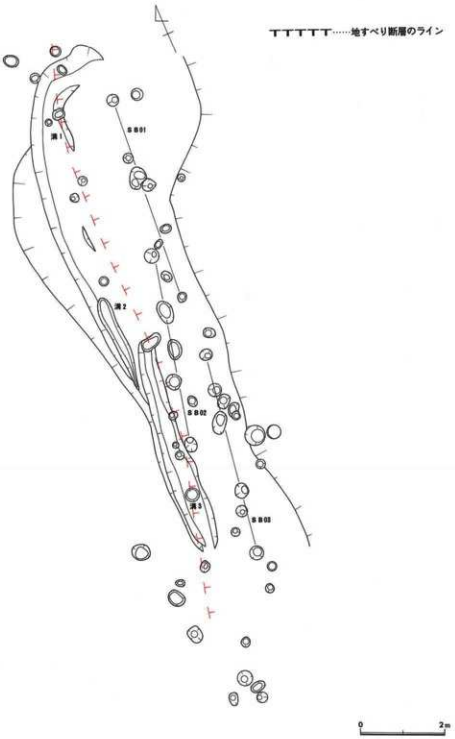
前述したようにＳＩ09には東西方向に延びる断層がみられ、そのためＳＩ09は大きく改変している。この断層の特徴は、遺跡内の他の地滑りラインと比較して、その方向（地滑りラインは南北方向に平行）や、ズレが垂直方向だけではなく水平方向にも生じていることがあげられる（第5章参照）。この断層を詳しく調査するため、ＳＩ09の西側に断層に対し直行する形でトレンチ14を設定した[15]（第44図）。以下、この断層について簡単に述べてみたい。

第45図にその土層図を示した。表土は発掘調査時に除去したため存在しない。土質はおもに2種類に分けられる。矢印が断層のラインであり、2はいわゆる岩盤に相当する。しかしながら、2は約45cmの縦ズレがみられ、ＳＩ09にみられる15cmの縦ズレとは大きく差がある。これはＳＩ09に段差を生じさせた地震の以前にも、この断層が引き起こした地震が存在していたことを示すものである。1は地震の際に崩落した土砂が堆積した土層である。ＳＩ09はこの崩落土を掘り込んで造成さ

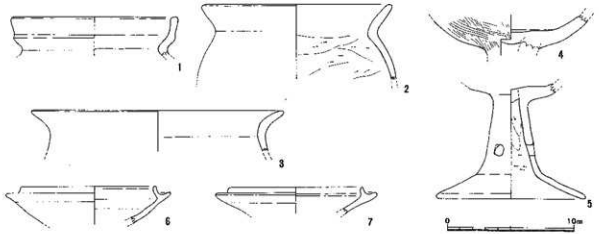


第45図　トレンチ14土層図（Ｓ＝１／50）

れている。また、１ｃは地震の際に生じた地割れに堆積した土層である。しかし、表土を欠いているため、どの土砂が堆積したものかは不明である。



第46図　ＳＢ01～03加工段遺構配置図（Ｓ＝１／90）



第47図　ＳＢ01～03加工段覆土出土土器実測図（１：３）

３．掘立柱建物の調査

遺跡内からは、掘立柱建物が総数26棟検出された。しかしながら、調査時に掘立柱建物と判別できたのはこのうち半数ほどである。特に平坦部は削平が著しい上にピットが多数検出されたので、掘立柱建物を選別するのは容易ではなかった。従って調査終了後、図面を観察することによって掘立柱建物を復元したものも少なくない。その際、掘立柱建物である根拠が乏しいものは破線で示した。また、ピット内より遺物が検出されず、時期の特定が難しいものも多数ある。

ＳＢ01～03加工段（第46図）

この加工段は、調査区西側のちょうど急斜面から平坦部へ移行する位置あり、標高にして36m付近に立地している。斜面を切り出して平坦部を形成しており、この加工段の東側は流出、或いは削平により存在しないが、現状でおよそ幅12m、奥行き3.5mを測る。この平坦部や周辺からは溝が３条、ピットが57点検出され、なんらかの建築物が存在していたことは明白である。しかしながら、遺構はいずれも残りが悪く、明確に建物群を復元することは難しい。そこで溝に合わせて等間隔に並ぶピットを選別し、掘立柱建物を３棟ほど復元してみた。それぞれの切り合い関係は明確でないが、以下ＳＢ01～ＳＢ03を個別に論述して前後関係を考えてみたい。

その他、この加工段には南北方向に「地滑り断層」が縦断している。もはや段差が認められないことから、この加工段は地滑りの後に造成された可能性が高い。また、この地滑りによりＳＩ03が傾斜した可能性が指摘されている。(16)

ＳＢ01～ＳＢ03加工段覆土出土遺物（第47図）

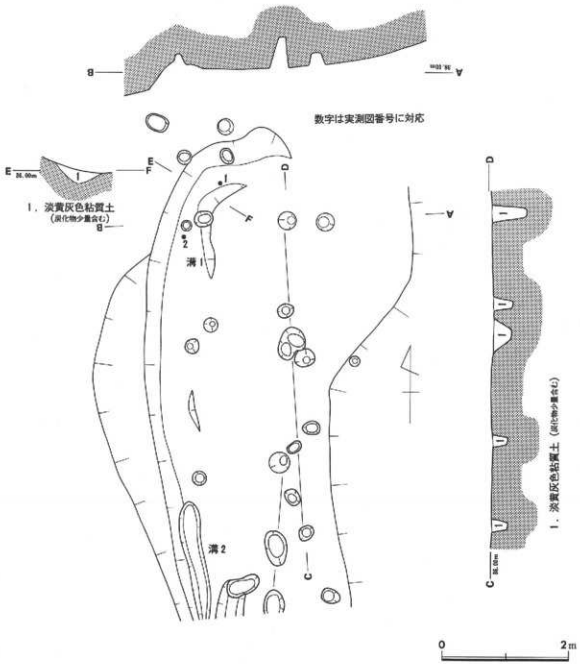
この加工段の覆土からは遺物が多数検出されているが小片が多く、図化できたものを示した。当初はこの加工段付近を調査区の西端としていたが、遺物が検出されたことにより調査区をさらに西方に拡張した経緯がある。これらの遺物は、その出土状況からこの加工段に伴うものかは明確でない。

１～５は土師器、６・７は須恵器である。１～３は甕である。１は複合口縁が退化した形態を示す。器壁は厚手で、口縁は垂直気味に立ち上がり端部に面をもつ。２・３は単純口縁を示す。２は

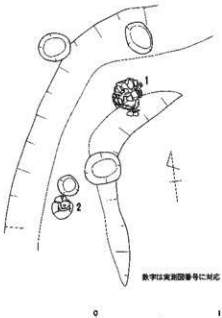
口縁がくの字状に内湾気味に開くが、3は大きく外反する。4・5は高坏である。4は底部のみの残存であるが、底部に粘土が充填されているが、器壁は厚く口縁は椀形の様相を呈する。外面のハケメは粗い。5は脚部である。坏部との接合部には充填された粘土が残る。筒部に円形透しが施されている。6・7は坏身である。いずれも小片で、復元口径はおよそ10.5cmを測る。立ち上がりは短く、大谷編年[10]出雲5期に相当すると思われる。

これらの遺物は、おおよそ古期時代中期後半（1・2・4・5）と古墳時代後期後半（3・6・7）に大別できるだろう。

SB01（第48図）



第48図　SB01平面図（S＝1／60）

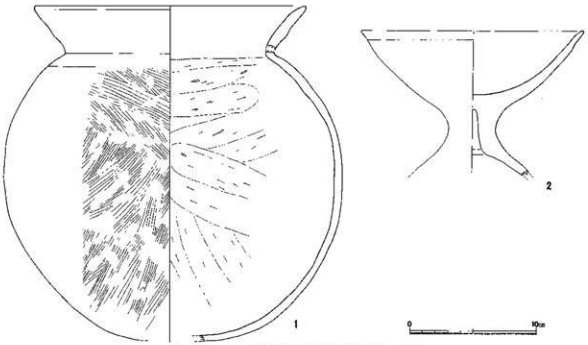


第49図　ＳＢ01溝内土器出土状況
（Ｓ＝１／30）

加工段の北側に位置するものをＳＢ01とする。この加工段には溝が３条検出されたが、北側の溝１の単位に沿ってＳＢ01を復元してみた。溝１は加工段を造成した際の壁帯溝と考えられるが、これに沿って地滑り面が通っているためかかなり撹乱された様子であり、残存状態は良好でない。溝の形態は湾曲気味に南北方向に延び、北端部はかなり掘り込まれ直角に近いカーブをみせる。現状で幅約60㎝、北端部で深さ約30㎝を測る。ＳＢ01の柱穴配置は桁行き３間で約５ｍを測り、梁間部は流出により明らかでない。ピットはいずれも直径・深さとも20～30㎝程度であり頑丈な建物は想像できないが、北端のコーナーにあたるピットは深さ約60㎝と他のピットに比べて掘り込まれている。

ＳＢ01出土遺物（第50図）

遺物は溝内より２点検出された（第49図）。いずれも土師器で、完形に近い状態で出土している。１は甕である。横倒しになったものが押し潰された状態で検出された。口縁はくの字状に開き、口縁の中程に稜らしき膨らみがある。器壁は厚手で、胴部は球形を呈する。調整は体部外面の肩部以下にナナメ方向の粗いハケメが施されている。色調は淡い茶褐色を呈する。２は高坏である。口縁を下に伏せた状態で検出された。口縁先端を若干と脚部の端部を欠くが、ほぼ完存している。口縁は椀状に内湾気味に立ち上がるが、端部は細く外反する。また脚部は筒状を呈さず端部に向かって大きく開く。脚内上部には直径1.5㎝、深さ３㎝の刺突痕が施されている。風化が著しく調整は不明瞭だが、色調は茶褐色を呈する。

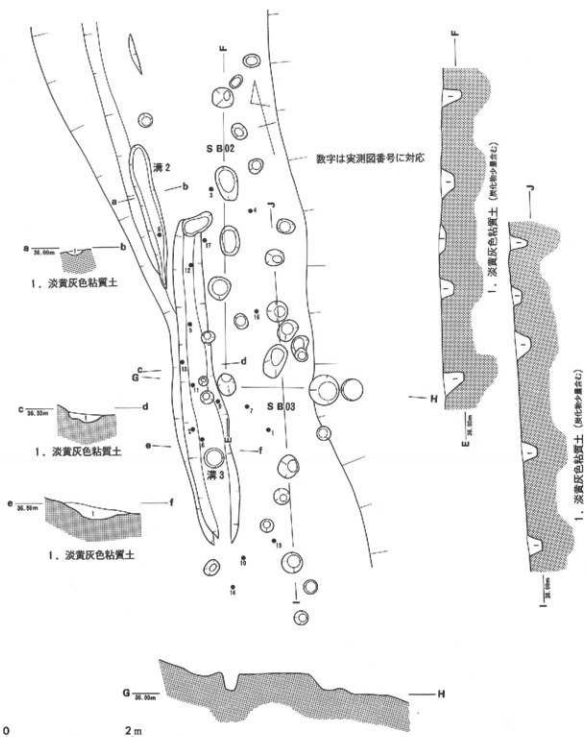


第50図　ＳＢ01溝内出土土器実測図（１：３）

これらの遺物の時期であるが、甕や高坏の形態はおよそ松山編年[9]V期に相当すると思われ、ＳＢ01の時期は、当地域で須恵器が普及し始める前後の時期に平行すると考えられる。

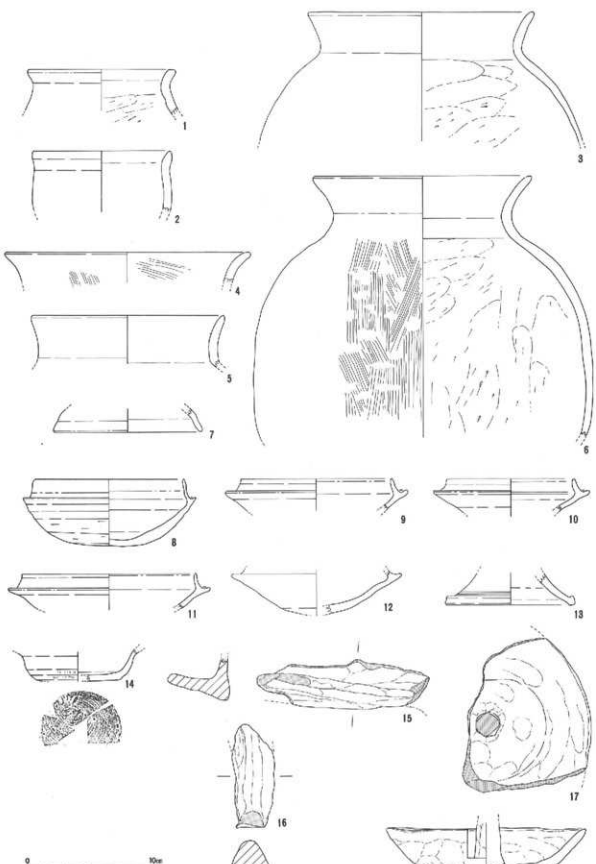
ＳＢ02・03（第51図）

平坦部の中央から南側に位置するものをＳＢ02・03とする。掘立柱建物の壁帯溝として溝２・溝３があり、それに沿ってそれぞれＳＢ02・03を復元してみた。溝２は現状で長さ約2.3m、幅30cm、



第51図　ＳＢ02・03平面図（Ｓ＝１／60）

深さ約10cmを測る小規模な溝である。溝2の南側は溝3によって切られているように見受けられ、



第52図　ＳＢ02・03床面出土遺物実測図（１：３）

同じようにこの加工段の西壁も、ちょうど溝2の南端付近で急に角度を変えている。また、溝2とSB02の柱列は角度が異なるが、柱穴配置は桁行き3間で4.6mを測る。梁間は流出しており定かでないが、残存した1間は1.6mを測る。ピットは直径35cm、深さ25cm前後で掘り方も浅いが、北南端のコーナーのピットは他のものと比較して深く掘り込まれている。溝3は加工段の南方に突出したような様相を呈する。長さ5.1m、幅70cm、深さ25cmを測り、ほぼ直線上に南北に延びている。この溝3に沿ってSB03を復元した。柱穴配置は桁行き3間で4.9mを測るが、SB01・02と同様に東側は流出している。柱穴はいずれも直径35cm、深さ25cm前後と小規模である。

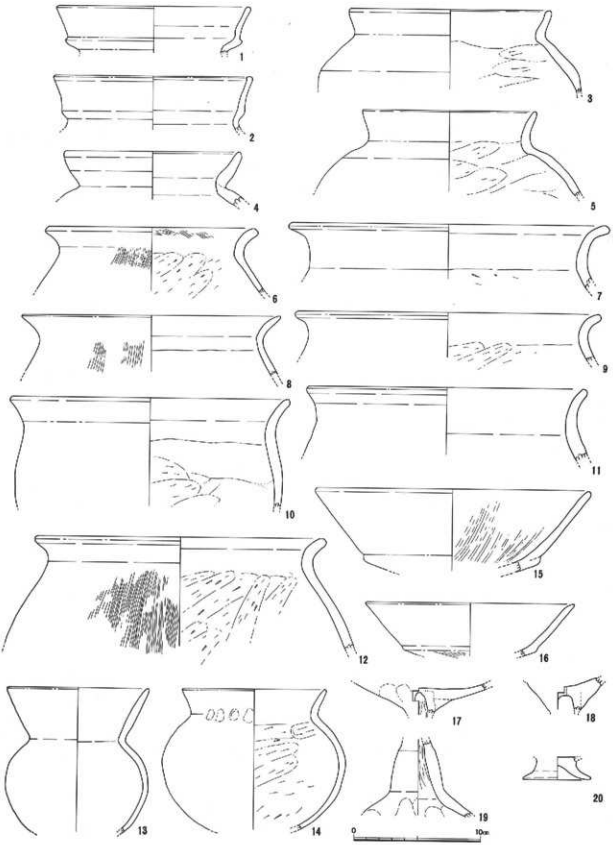
以上のように、この加工段に造成されたと思われるSB01～03は、いずれもほぼ同形態・同規模の掘立柱建物と考えられる。

SB02・03床面出土遺物（第52図）

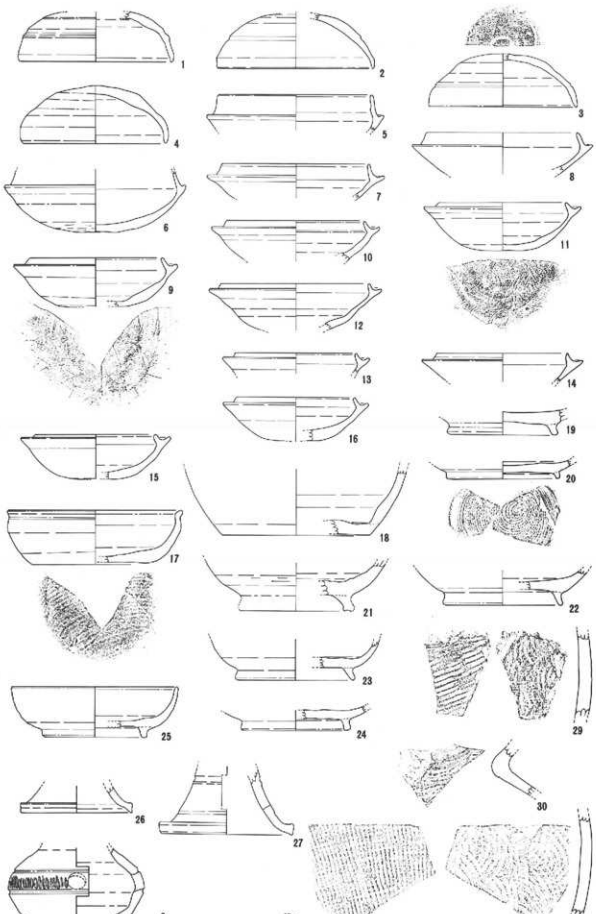
地山直上から出土したものを、床面出土遺物として区別した。1～6は土師器で、1・3～6はいずれも単純口縁の甕である。1は頸部が小さくすぼまり、口縁は短く外反する。3は口縁がくの字状に外反し、体部は肩部が張らず球形状を呈する。6は頸部が若干立ち上がり口縁にかけて外反している。器壁は比較的厚手で、胴部はあまり張らない。体部外面にはナナメ方向の粗いハケメが施されている。色調は茶褐色を呈する。4は口縁が大きく外反し、5は口縁が直立気味に立ち上がる。2は胴部の膨らみが弱く小型の鉢と思われる。口縁は短く外反し、復元口径11cmを測る。色調は淡い黄褐色を呈する。7～14は須恵器である。7は小片であり器種の判別に苦しむが、坏蓋として復元した。全体的に厚手であり、復元口径は11.5cmを測るが定かでない。8～12は坏身である。8はほぼ完形品で、口径11.8cmを測る。口縁は直立気味に立ち上がり、端部に段を有しない。大谷編年出雲3期に属すると思われる。9～12はいずれも口縁の立ち上がりが短く、12はヘラケズリが省略されている。13は高坏の脚部である。脚端部は内傾し面をもつ。14は口縁端部を欠くが、灯明皿である。外面下方にはハケ状工具による刻み目が施されており、底部には回転糸切り痕が残る。15・16は竈の各部小片である。15は焚き口外縁部の庇に相当すると思われ、鍔状の粘土帯が貼り付けられている。16は焚き口の側部底面に相当し、裏面は剥離した痕跡がみられる。いずれもナデ調整が顕著である。17は当地域ではあまり類例のみられない土器である。形態は皿形を呈するが、内面の中心付近に突起が付くのが特徴的で、まさにロウソク立てのような形態を示す。皿部の復元口径は15.8cmを測り、突起は先端を欠くが現状で高さ3.5cm、幅2cmを測る。皿部内面と外面には強いヨコナデが顕著で、底部はヘラケズリが施されている。色調は淡い黄褐色を呈している。この土器の用途は不明であるが、その形態的特徴から「突起付皿形土器」と称しておく。また、この土器と同様のものが、遺跡内よりもう1点検出されている（第128図参照）。

突起付皿型土器出土状況

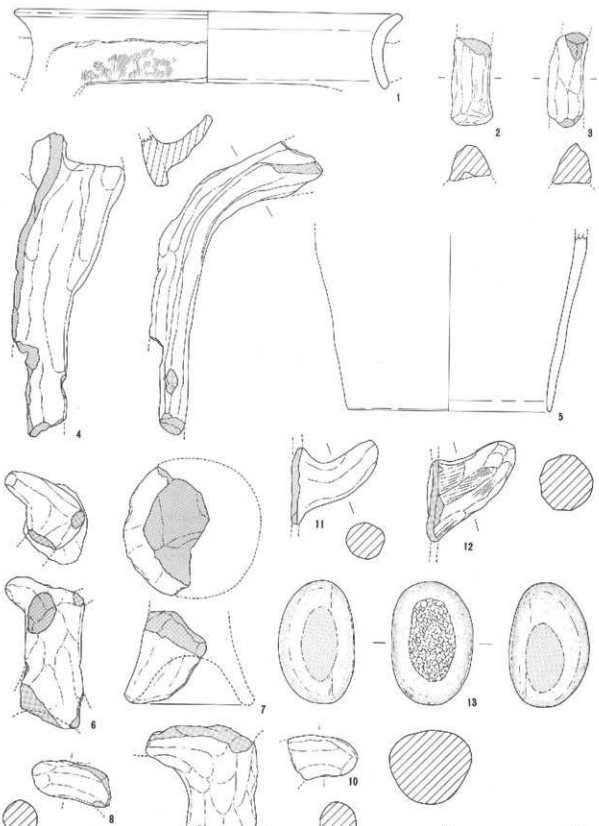
これらの遺物の時期であるが、若干の時期差がみられ分布状況もまとまりがない。床面から検出された遺物ではあるが、遺構の周辺は後世かなり改変しているとみられるので、様々な時期のものが流れ込んでいる可能性が高いと思われる。しかしながら、最も数の多い土師器甕や須恵器の坏身



第53図　ＳＢ01～03加工段下方部出土土師器実測図（１：３）



第54図　ＳＢ01～03加工段下方部出土須恵器実測図（１：３）



第55図　ＳＢ01～03加工段下方部出土その他の遺物実測図（１：３）

の形態、及び竈の存在から、遺物の中心時期はおおよそ６世紀後半から７世紀代と考えられる。従ってＳＢ02・03の時期は古墳時代終末期としておく。

さて、この加工段上における掘立柱建物の変遷について整理してみたい。それぞれ検出された遺

物をみると、ＳＢ01が最も古い時期に造成されたことになる。そしてＳＢ01が破棄されてしばらくした後、場所を南側に移行した形でＳＢ02・03が造成されたことになる。またＳＢ02とＳＢ03については、遺物により前後関係を明らかにすることは難しいが、建物に伴う溝２と溝３の切り合いにより、ＳＢ02がＳＢ03より先行すると考えられる。しかしながら、ＳＢ01とＳＢ02・03とはかなりの時期差があり、この間の断絶が何を物語るのか興味深い点ではある。

ＳＢ01～03加工段と加工後下方平坦面

ＳＢ01～03加工段下方部出土遺物（第53～55図）

これらはＳＢ01～03が検出された加工段から、東側の一段下がった平坦面より出土したものである。位置的にはＳＢ01～03加工段とＳＩ03の間にあたり、かなりの平坦面が広がっている。この平坦面からは加工段から流出したと思われる遺物が多量に検出されており、掘立柱建物群の性格を考える上で興味深い資料である。一括して種類ごとに記述する。

土師器（第53図）１～12は甕である。１は複合口縁を呈する甕口縁部である。口縁端部に面をもつ。２は風化が著しいが、やや退化した複合口縁を呈する甕である。口縁は逆ハ字状に開き、端部内面は若干肥厚する。いずれも古墳時代前期と思われる。３～５は単純口縁でくの字形を呈するものである。３・５は口縁が内傾気味に短く立ち上がり、端部はやや内傾する。４は複合口縁が退化した形態を示し、器壁は厚手である。これらは古墳時代中期に溯る可能性もある。６～12は大きく外反する口縁を呈するものである。10・11はあまり口縁が屈曲せず、胴部にも張りがみられない。いずれも古墳時代後期以降のものであろう。

13・14は小型丸底壺である。13は口縁が逆ハ字状に開き、体部と口径がほぼ同じである。14は口縁が短く外反し、胴部は大きく張る。頸部外面に指頭圧痕がみられ、内面にヘラケズリが施されている。いずれも古墳時代中期から後期にかけてのものであろう。

15～19は高坏である。15・16は坏の口縁部で、底部との境に明瞭な段をもつ。15は口縁が逆ハ字状に直線的に開き、全面に丹塗りが残る。16は端部が細く尖り外反する。17・18は底部であり、いずれも坏部と脚部を別々に作り、両者の境に粘土紐を巻いて固定するタイプである。19は脚部である。内面にしぼり痕が残り外面上部には粘土の剥離痕がみられる。15・16が古墳時代中期中葉～後葉、17～19は古墳時代中期後葉から後期前葉にかけてのものである。20は低脚坏の坏部である。端部は大きく外反し端部は尖り気味である。古墳時代前期のものである。

須恵器（第54図）１～４は坏蓋である。１は端部内面の上方に浅い沈線が施されている。２～３は天井部と口縁の境に細い沈線が施され、３は天井部にヘラ記号がみられる。４は肩部から口縁にかけて丸く湾曲している。１・２が６世紀後半代、３・４が７世紀前半代のものであろう。

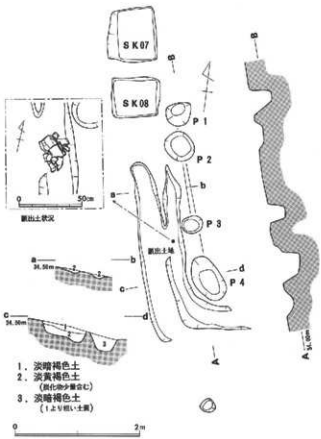
５～16はかえりの付く坏身である。５は口縁が直立気味に立ち上がり、端部内面にわずかに段を

有している。6は口縁端部を欠くが、口縁はほぼ直立し口径は12cm前後と推定される。5・6は6世紀前半代のものであろう。9は底部外面にヘラ記号が、11はハケ状工具による刻み目が施されている。7・8は6世紀後半代、9～16は7世紀前半代のものであろう。17は底部に糸切り痕の残る坏である。口縁は湾曲気味に立ち上がり、端部を外方につまみ出している。8世紀代のものと思われる。

19～20・22～25は高台付きの坏身である。7世紀後半から9世紀代のものであろう。18・21は壺の底部である。18は底部が平底で、21は高台がつく。18は9世紀代から10世紀代、21は8世紀代であろう。26・27は高坏の脚部である。27は方形透かしが施されている。およそ7世紀から8世紀代のものと思われる。28は甕の胴部である。体部の2条の沈線の間に刺突文が施されている。6世紀後半から7世紀代のものであろう。29～31は甕の破片である。29は体部の破片で、外面に単位の広い平行タタキ、内面に同心円タタキが施され、焼成は不良である。9世紀代から10世紀代にかけてのものと思われる。

その他の出土遺物（第55図）1～4は竈の各部片である。1は口縁部から焚き口にかけての破片である。頸部の内面径は推定で25～26cmを測り、竈に載る土師器甕の大きさの目安となる。焚き口の底部の剥離痕が明瞭に残っており、剥離面には単位の細かいハケメがみられる。2・3は焚き口側部の小片である。2は端部にあたる。いずれも裏面に剥離痕がみられる。4は焚き口の底部から左側面にかけてのものである。庇は上方に大きく立ち上がる。ナデによる調整が顕著である。

5・11・12は甕の底部である。胴部から底部にかけて緩やかに窄まり、底径は約16cmを測る。端部は細く尖り気味で、穿孔の有無は不明である。11・12は把手である。いずれもナデ調整が顕著であるが、12はハケメも施されている。いずれも断面は円形を呈する。



第56図　ＳＢ04平面図（Ｓ＝1／60　囲み内はＳ＝1／30）

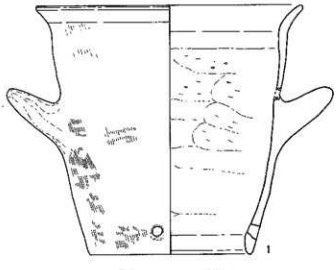
6～10は土製支脚である。いずれも欠損品である。6は比較的小型のもので、底部は上げ底である。7は底部の破片で上げ底である。8・10は突起片である。いずれも強いナデによる調整が施されている。13は磨石である。両側面に砥面がみられ、平坦をなす面には細かい敲打痕がみられる。

以上のように、この加工段下方の平坦面からは多種多様の遺物が出土している。時期については、およそ古墳時代前期から平安時代までのものがほぼ間断なく出土している。しかしながら、量が増えるのは6世紀後半、古墳時代後期以降であり、このことはＳＢ01～03、特に02

・03の時期に符合するものといえる。遺物の多さから、この掘立柱建物群ではかなりの生産活動が行われていたことが伺える。

ＳＢ04（第56図）

ＳＢ04は調査区のほぼ南端に位置し、標高にして約33mを測る。周辺は平坦面が広がっているが、すぐ東側は掘削されて崖になっている。遺構の周辺もかなり削平されていると思われるが、ピットが４点と溝が重なって２条、方形の土坑が２穴検出された。このうち方形土坑はＳＢ04とは異なる遺構と思われるので後述する。



第57図　ＳＢ04出土土器実測図（１：４）

ピットは南北方向に４点検出されているが、等間隔で並列しておらず、南側と北側に２点ずつ集まっている。さらに溝も東西２条あることから、このＳＢ04は建て替えが行われたと考えられる。すなわちＰ１・Ｐ３とＰ２・Ｐ４に分けることができる。柱間はＰ１－Ｐ３が約1.8m、Ｐ２－Ｐ４が約2.2mを測り、Ｐ２－Ｐ４間の方が長い。Ｐ１とＰ３はおよそ直径40cm、深さ30cmと同規模であるが、Ｐ２とＰ４は直径や、特に深さがＰ２が12cm、Ｐ４が35cmとかなり差がみられる。この２つの柱列に２つの溝がそれぞれ対応すると思われる。溝は西側のものが幅40cm・深さ20cm、東側のものが幅・深さとも30cmを測る。しかしながら遺構の残りが悪く、現状ではそれぞれの前後関係や、対応する溝を明らかすることはできなかった。ただ、東側の溝は西側の溝を掘り込んで造成しているように見受けられる。建て替えごとに住居の規模が大きくなったと仮定するならば、「Ｐ１－Ｐ３・東側の溝」と「Ｐ２－Ｐ４・西側の溝」となり、前者が古くなる。また、東側の溝の中央付近より甑が検出されている（第56図枠内参照）。

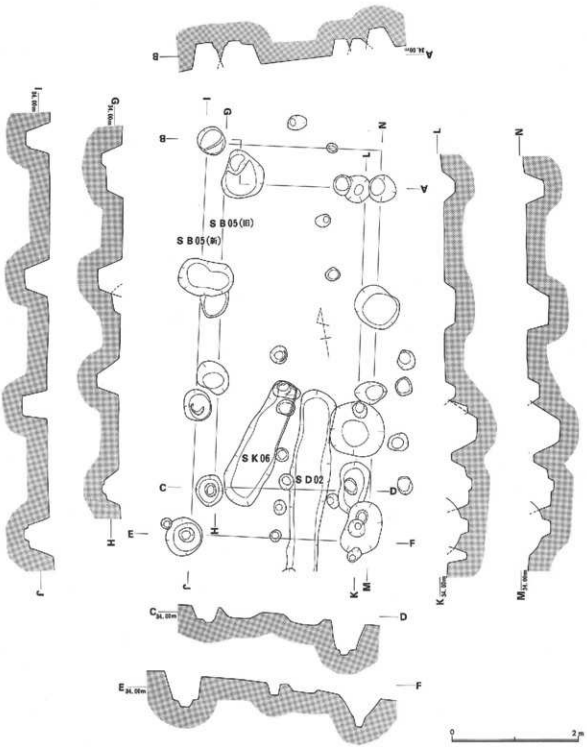
ＳＢ04出土遺物（第57図）

前述したように甑が溝内より出土している。横倒しになったものが圧し潰れた状態で検出された。現状では約半分復元することができた。器高約26cm、口径27.5cm、底径16.5cmを測る。底部から口縁にかけて緩やかに広がり、口縁は外反している。外面は斜め方向のハケメ、内面は横方向のヘラケズリが施され、胴部のほぼ中央に把手がつき、斜め上方に突出している。把手はナデ調整が顕著であり、底部には穿孔が１点確認できる。時期の特定は難しいが、おおよそ７世紀代から８世紀代であろう。

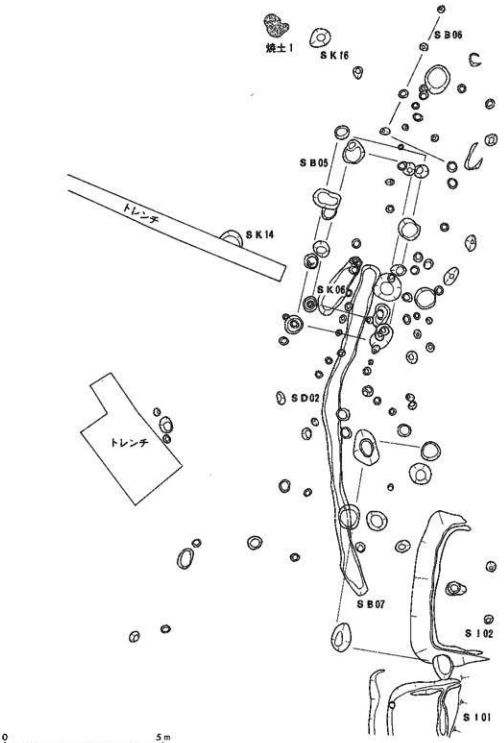
掘立柱建物群ＳＢ05～07（第59図）

竪穴住居群ＳＩ01～03のすぐ北側に数多くのピット群が検出され、数棟の掘立柱建物の存在が想定された。この付近は標高にして34.5～33.5mを測る。しかしながらピットの数が多く、当初は掘立柱建物が不明瞭であったが、他の住居跡と同様におおよそ南北方向に平行する形で柱の並びを見て取る事ができるようである。

まず、この平坦部の中軸線よりやや北側に直径が１m近くあるピットの集中部があり、一見して南北方向の並びを見て取れる。このピット群は複雑に切り合っているが、柱列が内側・外側と２重になっており、それぞれ明確な１間×３間の掘立柱建物を復元することができる。この内側の柱列をＳＩ05（古段階）、外側のものをＳＩ05（新段階）とした。また、このすぐ北側にＳＩ05とは角度を違えておよそ１間×３間の掘立柱建物が復元でき、これをＳＩ06とした。ＳＩ05と比較して柱穴の掘り方かなり小型である。この他に明確な並びを示す柱列はみられないが、ピットの密度は高



第58図　ＳＢ05平面図（Ｓ＝１／60）



第59図　ＳＢ05～07及び周辺の遺構配置図（Ｓ＝１／120）

く、削平などにより柱穴が消滅し住居が復元できない可能性は十分考えられる。ＳＩ05の南側は住居の空白地帯であり、そこからはＳＩ05と同規模のピットが数点検出されたので、ＳＩ05に平行する形でＳＢ07を復元してみた。

この掘立柱建物群の周辺からは土坑や溝・焼土面などが検出され、様々な時期の遺物が多数出土している。この平坦部は開墾による削平が著しい上に、この遺構群のすぐ西側には地滑りによる大規模な段差がみられるなど、周囲はかなりの撹乱や変動が想定される。以下、それぞれ個別に記載

していく。

ＳＢ05（第58図）

前述したように、ＳＢ05は３棟の掘立柱建物の真ん中に位置する。ピットは大形のものが多数検出され、互いに複雑に切り合っている。建物を復元するのは困難であったが、およそ南北方向に並列する柱列がみられ、１間×３間の２棟の建物跡の重複を復元することができた。ピットの切り合いから、内側がＳＢ05古段階、外側がＳＢ05新段階となる。古段階は桁行き4.8m、梁間2.3mを測り、新段階は桁行き方向6.2m、梁間方向2.8mを測る。従って、古段階から新段階にかけておよそ南北に1.5m、東西に0.5mほど拡張したことになる。また、これらの柱列は新段階・古段階とも柱間が等間隔を示していない。通常の掘立柱建物も大抵は等間隔ではないが、この古段階の桁行きの中央２本の間隔は極端に狭く、両側のピットに向けては長い傾向がある。また新段階の北東端のピットも明確なピットの対応位置にないことも目に付く。しかしながら、ＳＢ05の柱穴は最大のもので直径90cm・深さ45cmを測り、周辺の他の掘立柱建物と比べて際立って大きく、かなり頑丈な建物であったことは伺える。

ＳＢ05ピット内出土遺物（第60図）

ピット内より様々な遺物が出土している。１・２は須恵器であり、共に坏蓋である。復元口径は12.2cmを測る。天井部と口縁の境に明確な稜をもち、口縁端部はわずかに外反し、内面に明瞭に段がつく。大谷編年[22]出雲１期に属するものである。２は天井部から口縁にかけては湾曲するが、端部は若干外反気味である。肩部にはわずかな凹みがあり、端部も丸く収めている。復元口径は13.6cmを測る。出雲３期のものと思われる。

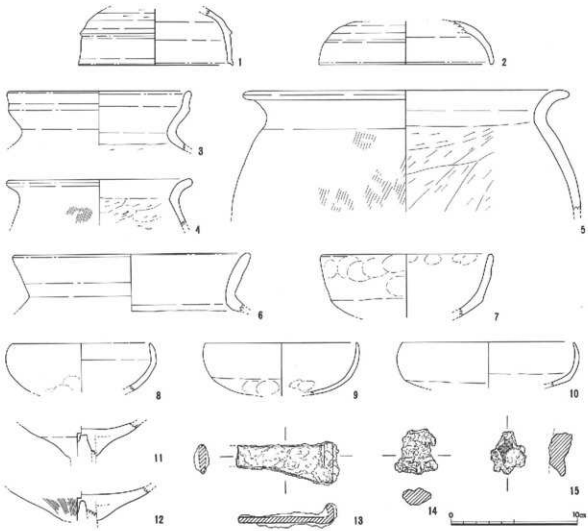
３～６は土師器の甕である。３は退化した複合口縁を呈する。器壁は厚手で、口縁は直立気味に短く立ち上がる。口縁外面は吹きこぼれ痕が顕著である。古墳時代中期のものであろう。４・５は口縁が大きく外反するタイプである。いずれも肩部はあまり張らない。古墳時代後期以降のものと思われる。６は口縁が逆八字状に立ち上がるタイプである。口縁は中央が膨らみ、端部にかけて細くなる。古墳時代中期まで溯る可能性もある。

７～10は土師器の坏である。７は器壁が厚手で、口縁は内湾気味に外反する。口縁端部内外面には指頭圧痕が顕著にみられ、雑なつくりである。８～10は器壁が薄手で椀状を呈する。外面底部に指頭圧痕がみられる。７は松山編年[22]Ⅱ期新段階、８～10はⅢ～Ⅳ期にかけてのものと思われる。

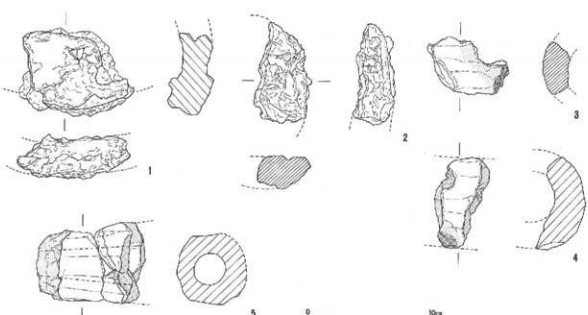
ＳＢ05ピット内土器出土状況

11・12は高坏の坏の底部である。いずれも坏部と脚部を別につくり、両者を合わせた後まわりに粘土紐を巻いて固定するタイプである。口縁は椀状を呈すると思われる。松山編年Ⅲ～Ⅳ期のものであろう。

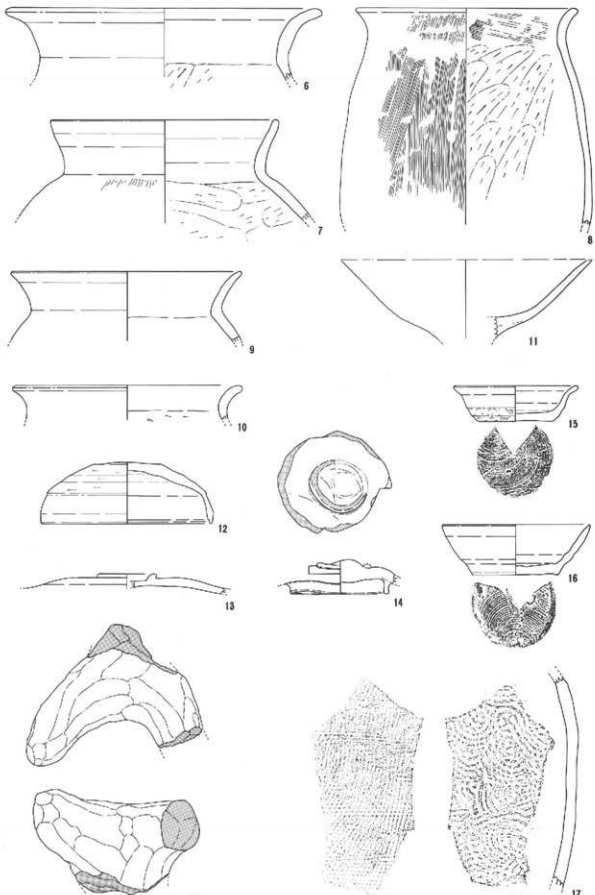
13は直刃鎌である。先端を欠くが、現状で長さ7.5cm・刃部幅



第60図　ＳＢ05Ｐｉｔ内出土遺物実測図（１：３）



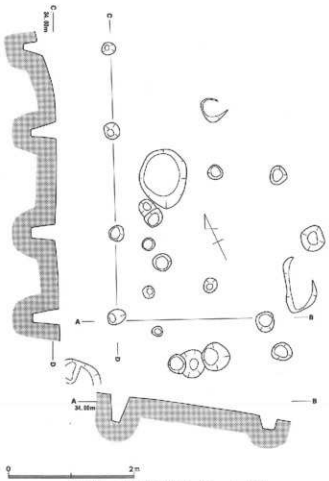
第61図　ＳＢ05・06覆土出土遺物実測図（１）（１：３）



第62図　ＳＢ05・06覆土出土遺物実測図（２）（１：３）

2㎝・厚さ約0.4㎝を測る。14は鉄滓、15は炉壁である。14は直径3.5㎝・厚さ1.3㎝を測る小型のものである。15は直径3.4㎝・厚さ1.8㎝を測る小片である。この炉壁については分析を行っており、鍛冶炉の炉壁（土坑壁か）であるとの結果が示された（第6章参照）。

これらの遺物の時期であるが、おおよそ古墳時代中期後半と古墳時代後期後半のものに分けられる。出土ピット別にみると、1・5・8・9が古段階ピット、2～4・6・7・10～15が新段階ピット出土であった。両者とも新旧の遺物を含んでおり、ＳＢ05新・古段階で明確に時期を区分することはできなかった。従って単純に中期後半が古段階、後期後半が新段階といえないようである。これらの遺物のうち、最も数が多いのは古墳時代中期後葉から後期前葉にかけてのものである。また、7・10・12・15はほぼ同時期と思われ、新段階の同じピットから検出されていることがあげられる。周辺はかなり撹乱をうけ流れ込みも多いと思われるので、これらを考慮してＳＢ05は古墳時代中期後葉から後期前葉の間に建て替えが行われたと考えられる。



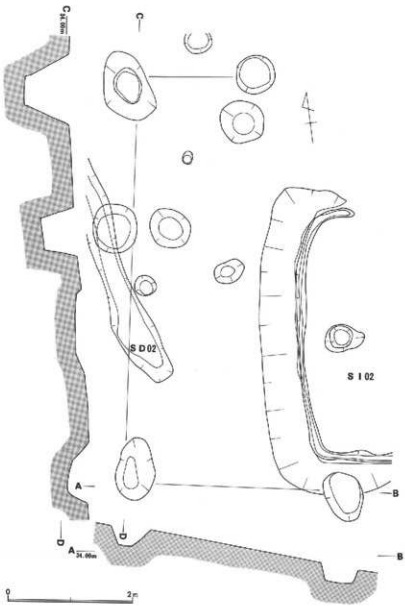
第63図　ＳＢ06平面図（Ｓ＝1／60）

さて、ここで問題となるのは14・15の鉄滓・炉壁である。このうち炉壁についての分析結果によれば精錬鍛冶炉の炉壁であるとされる。これらがＳＢ05に伴うとすれば、精錬鍛冶は古墳時代中期後葉に行われた可能性が高くなり、たいへん興味深い資料となる。(17)

ＳＢ05・06覆土出土遺物（1）（第61図）

通例ならＳＢ06について述べるところだが、まずこれらの掘立柱建物の覆土から出土した遺物をみていきたい。第61図は鉄滓・羽口である。前述したように、ＳＢ05のピットから鉄滓や炉壁が検出されているが、この覆土からも精錬関係の遺物が多数検出されている。

1・2は鉄滓である。いずれも形態が湾曲しており、椀形滓に相当する。大部分欠落しているが、現状で1はおよそ直径9㎝・厚さ2㎝、2が8㎝、厚さ2.5㎝を測る。3～5は羽口である。いずれも先端部は送風による被熱のため黒褐色に変色している。3・4は先端部の破片である。厚さ2～2.5㎝を測る。5は先端付近がほぼ完存するが基部を欠く。全体の断面は不正な円形であるが、孔の断面は円形を呈している。基部にかけて緩やかに広がる形態を示す。現状で長さ7.5㎝・最大幅6.5㎝・孔径2.5㎝・器壁厚1.5～2㎝を測る。これらのうち、1について分析を行っており、鍛冶炉の羽口であるとの結果が示されている(18)（第6章参照）。以上のように、周辺で精錬鍛冶が行わ



第64図　ＳＢ07平面図（Ｓ＝１／60）

れていた可能性は非常に高いといえる。後世の削平が著しく周辺から明確な鍛冶炉は未発見であるが、この掘立柱建物群のすぐ西側で検出された被熱土坑・ＳＫ16がその候補である。

ＳＢ05・06覆土出土遺物（２）（第62図）

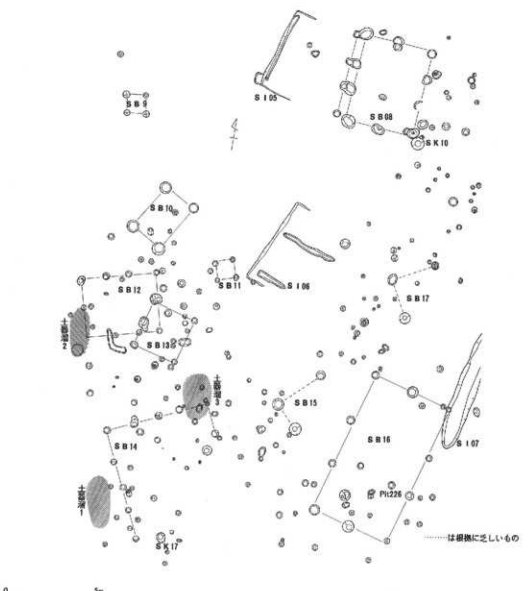
土器は多数検出されているが小片が多く、図化できたものを示した。６～10は土師器の甕である。いずれも口縁が外反するタイプであるであるが、形態は若干異なる。６は頸部に膨らみがあり、口縁にかけては屈曲気味に外反する。７は口縁が逆ハ字状に開くが、端部にかけては内湾気味に立ち上がっている。８は口縁が緩やかに外反し胴部には張りがない。外面にナナメ方向の細かいハケメが施されている。９は口縁がくの字状に外反し、先端は尖り気味である。10は８と同形態と思われる。時期はいずれも古墳時代後期以降のものと思われるが、８は少し溯る可能性もある。11は高坏の坏部である。風化が著しいが、底部と口縁の境に若干の屈曲があり、口縁は大きく開く。古墳時代中期後半のものであろう。

12～17は須恵器である。12・13は蓋である。12は肩部に稜が表現され、口縁端部をに段状に仕上げている。復元口径は13.3㎝を測り、大谷編年[2]出雲２期に属すると思われる。13は輪状つまみがつくタイプで、７世紀後半から８世紀のものであろう。14は高台のつく坏であるが、かなりの焼き歪みがみられ、底部内面には輪状つまみが付着している。15は灯明皿、16は口縁が逆ハ字状に開く坏である。いずれも底部に糸切り痕が残る。８世紀代から９世紀代のものと思われる。17は甕の体部の破片である。外面に平行タタキ、内面に同心円タタキがみられる。18は土製支脚である。全面にナデ調整が顕著である。

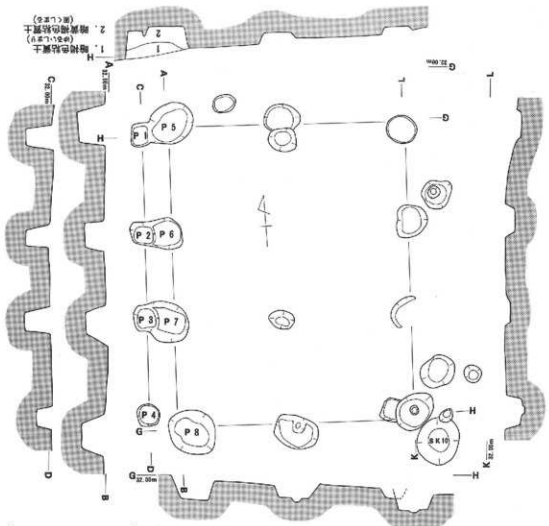
ＳＢ05ピット内からはおおよそ古墳時代中期の遺物が多くみられるが、覆土からは案外検出されていない。

ＳＢ06（第63図）

ＳＢ05のすぐ北側で検出された。南側の柱穴は流出しているが、おおよそ１間×３間の掘立柱建物と思われる。規模は桁行き方向で約4.3m・梁間方向で約2.5mを測り、ＳＢ05古段階とほぼ同じ大きさといえる。ただ柱穴は直径25cm・深さ45cm前後であり、ＳＢ05と比べた場合かなり小型である。柱穴から遺物が出土しておらず、時期は明確でない。またＳＢ05とＳＢ06は隣接しているが、両者が同時に存在していたかは定かでない。そのピットの規模の差や、建物の中軸の角度も異なることから両立していない可能性が高いと思われる。周辺や覆土から出土している遺物を見た場合、古墳時代後期以降のものが大半で、若干古墳時代中期のものや後期前葉のものがあるといえる。ＳＢ05の時期が古墳時代中期と考えられるので、ＳＢ06の時期は古墳時代後期以降である可能性がある。



第65図　ＳＢ08～17及び周辺遺構配置図（Ｓ＝１／120）



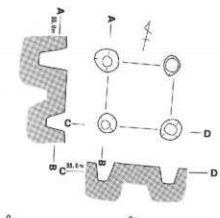
第66図　ＳＢ08平面図（Ｓ＝１／60）

ＳＢ07（第64図）

ＳＢ05の南側に位置する掘立柱建物である。この周辺は直径が１ｍ近くあるピットが多数検出されており、他の掘立柱建物と平行する形でおよそ１間×１間、或いは２間×２間の建物を復元してみた。桁行き方向でおよそ６ｍ、梁間方向で3.5ｍを測り、ＳＢ05新段階より若干大きい規模になる。ピットはいずれも大きく、北西端のピットは最大径110㎝・深さ70㎝を測る。しかしながら、柱間は不揃いで、柱穴の深さも一定ではない。これらのピットは土坑の集まりとも考えられ、掘立

第67図　ＳＢ08出土土器実測図（１：３）

柱建物であることを否定する要素も多い。ピット内より遺物が出土しておらず、時期は不明である。ただ、このＳＢ07のピットはＳＩ02の上から掘られ、ＳＤ02に切られている。ＳＩ02はおよそ古墳時代中期中葉、ＳＤ02は後期前葉と考えられるので、ＳＢ07の時期はおよそ古墳時代中期後葉に位置づけられるだろう。



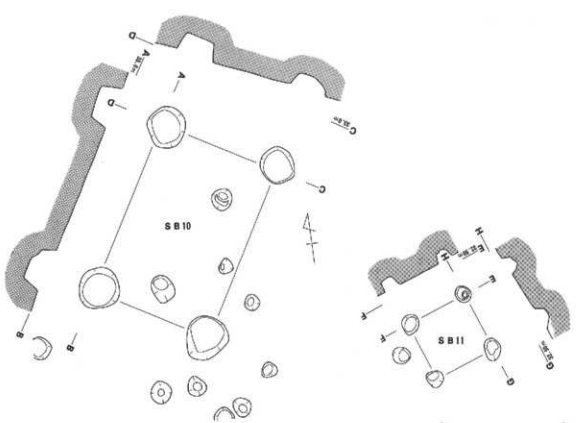
第68図　ＳＢ09平面図（Ｓ＝１／60）

掘立柱建物群ＳＢ08～17（第65図）

遺跡の平坦部ほぼ中央付近より、竪穴住居に混じって約10棟の掘立柱建物が検出された。しかしながら、これらの建物群は調査時に判別できなかったものが多く、ほとんどは図上で復元したものである。その際、建物である根拠が乏しいものは破線で示している。ピット内より土器が出土する例もあるが、周辺は削平が著しく、実際に建物に伴うものかは判別しにくい。平坦部の掘立柱建物の遺物はほとんど流失してしまう可能性が高いと思われ、注意する必要がある。また、これらの他にも平坦部にまだ別の建物が存在していた可能性も考えられる。以下、個別に詳細を述べる。

ＳＢ08（第66図）

平坦部の北端で検出された２間×３間の建物である。桁行き方向で4.8m、梁間方向で3.8mを測



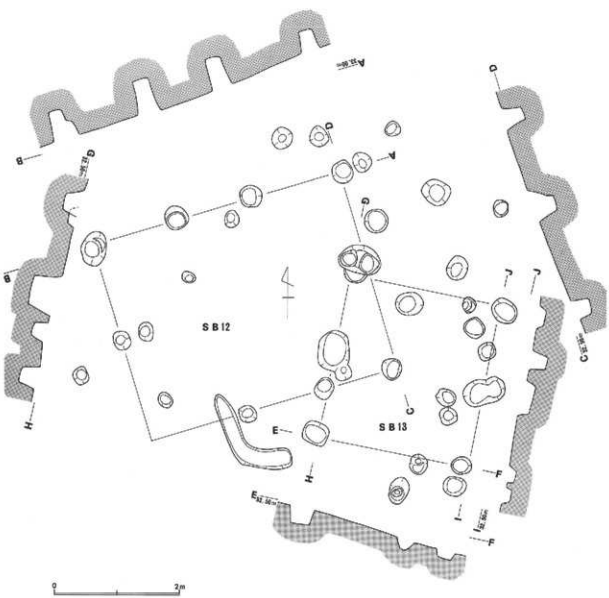
第69図　ＳＢ10・11平面図（Ｓ＝１／60）

る。西側の柱列はＰ１～Ｐ４・Ｐ５～Ｐ８と２重になっており、検出当初は建て替えの痕跡と考えていた。しかしながら土層観察では切り合いが認められず、他に対応するピットもみられないのでＰ１～Ｐ４は建物の庇部と考えられる。庇部の柱穴は直径・深さとも約40㎝、その他の柱穴はおよそ直径60㎝・深さ30㎝を測る。

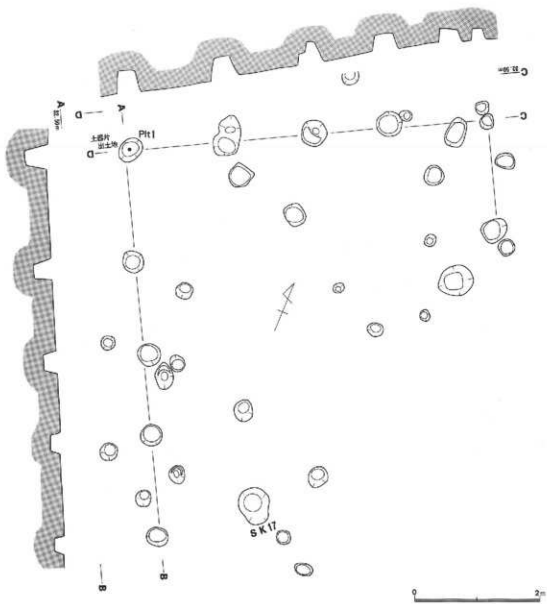
ＳＢ08出土遺物（第67図）

ピット内より土器片が数点検出されている。１～３は土師器の甕である。１は口縁が膨らみながら内湾気味に立ち上がるタイプである。端部はやや外反する。２は口縁が大きく屈曲するタイプである。３は口縁があまり外反しない。４は須恵器の坏身の小片である。短く立ち上がる口縁をもつ。５は甑の把手である。調整はナデの他、ヘラケズリも施されている。

これらの時期であるが、１は若干溯るかもしれないが、２・３は古墳時代後期以降のものと思われる。また甑の存在や、４の坏身の形態もそれに矛盾しないので、ＳＢ08の時期は古墳時代後期以降、坏身の形態からおよそ６世紀後半から７世紀代に想定される。



第70図　ＳＢ12・１３平面図（Ｓ＝１／60）



第71図　ＳＢ14平面図（Ｓ＝１／60）

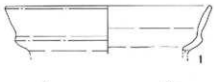
ＳＢ09～11（第68・69図）

いずれも平坦部北西付近より検出された１間×１間の建物跡である。ＳＢ09（第68図）は柱穴の配置が正方形を呈しており、柱間はおよそ１ｍ測る非常に小型の建物である。また柱穴は直径35㎝・深さ40㎝前後を測る。ピット内より遺物が出土しておらず、時期は不明である。

ＳＢ10・11（第69図）はＳＢ09の南側に位置している。ＳＢ10は桁行き方向で2.8ｍ・梁間方向で２ｍを測る。柱穴は直径60㎝・深さ30㎝を測り、ＳＢ09と比べるとかなり大きめに掘られている。ＳＢ11はＳＢ10のすぐ東側に検出されており、規模・形態ともＳＢ09とほぼ同じである。いずれも時期は不明であるが、ＳＢ09とＳＢ11は同様の機能をもつものと考えられる。

これらの建物群の性格であるが、床面積が小さく、通常の住居としては考えにくい。例えば、削平により上方が消滅した竪穴住居とみることもできる。しかしながら、ＳＢ09・11は４本柱の竪穴

住居としては柱間が狭すぎ、ＳＢ10もピットの掘り方が大きいように思われる。さらに中央ピットにあたるものもみられない。４本柱の掘立柱建物は近年、安来市岩屋口北遺跡[6]や柳遺跡[19]などで類似したものが検出されている。いずれも弥生時代後期の集落における、竪穴住居群に付属する倉庫としての機能などが考えられている。こうした事例が古墳時代前期にまで継続するのであれば、ＳＢ09～11はＳＩ05やＳＩ07古段階に付属する掘立柱建物と考えられなくもない。いずれにせよ、これらの建物群の性格は定かでない。

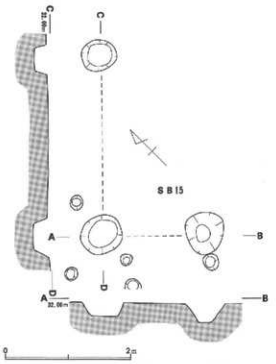


第72図　ＳＢ14Ｐｉｔ１内出土土器実測図（１：３）

ＳＢ12・13（第70図）

いずれも図上で復元した掘立柱建物である。ＳＢ10のすぐ南側に位置しており、２棟重複して検出されている。ＳＢ12は２間×３間の柱列が復元できるが、中軸方向を南北方向に合わせていない。規模は桁行き方向で4.1m、梁間方向で3.3mを測る。柱穴はいずれも直径35cmを測り、深さも60cm近くしっかり掘り込んでいるものもみられる。このＳＢ12と角度にして約60度違えてＳＢ13が復元できた。１間×２間の柱列が復元でき、桁行き方向で2.6m・梁間方向で2.4mを測る。両側の桁行きの真ん中のピットは、いずれも他のピットに比べて大きい傾向がみられる。掘立柱建物としては小型な感があり、ＳＢ09～11と同様の機能をもつものかもしれない。

いずれもピット内より土器が出土しておらず時期は不明である。ただピットの切り合いから、ＳＢ12はＳＢ13より新しいと考えられる。また、ＳＢ12の西側には後述する土器溜３が重なっている。土器溜３はおおよそ古墳時代後期以降の遺物が主であり、或いはこの建物が破棄された時期を示しているかもしれない。その他、ＳＢ12の南側には幅25cm・深さ５cmの屈曲した小溝が検出されている。竪穴住居等の壁帯溝の残存とも考えられたが、この溝に伴う柱穴の並びは確認できなかった。



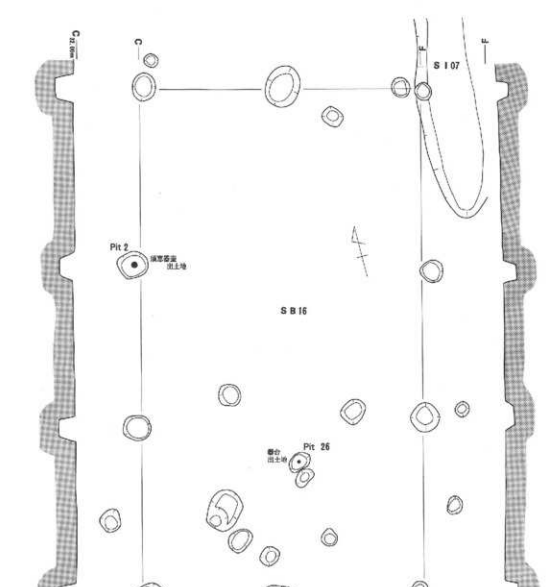
第73図　ＳＢ15平面図（Ｓ＝１／60）

ＳＢ14（第71図）

ＳＢ14はＳＢ12・13の南側に図上で復元したものである。調査区のほぼ中央部に位置しており、付近は標高にして32.5mを測る。西側が流失しており全体の形状は不明であるが、現状で４間×４間の柱列が検出された。その規模は梁間方向が６m・桁行き方向が6.1m以上となり、他の建物に比べてかなり大型の掘立柱建物が復元できる。なお、建物の長軸は南北方向に平行していない。周辺はかなり削平されていると思われ、柱穴はいずれも直径40cm前後・深さ35cm前後を測る。

ＳＢ14出土遺物（第72図）

北西端のＰ１から、土師器の甕の破片が１点検出されている。風化が著しいが、口縁は明確

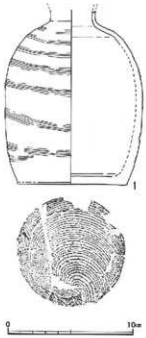


第74図　ＳＢ16平面図（Ｓ＝1／60）

な複合口縁を呈しており、従来の小谷式、古墳時代前期に相当するものである。

出土遺物により、ＳＢ14は古墳時代前期に相当する可能性も考えられる。しかしながら、県内では古墳時代前期にこの規模の掘立柱建物は未だ例がない。遺物はこれ１点のみであり、また周辺は削平されていることも考慮して、この遺物は流れ込みの可能性が高いと思われる。この建物の北側と西側には

第75図　Ｐｉｔ226出土鼓形器台実測図（1：3）



第76図　SB16Pit2内出土土器（1：3）

土器溜1・2が重なっている。土器溜は古墳時代後期以降の遺物が主体をなすことから、SB14が破棄された時期を示していると考えられる。また、建物の南側にはSK17が検出されている。詳しくは後述するが、SK17はおよそ9～10世紀代と思われるので、SB14は古墳時代後期から平安時代前葉までの間に位置づけることができよう。

SB15（第73図）

SB14の東側で検出された直径65cm・深さ25cm前後のピット3点から復元した、1間×1間の掘立柱建物である。北東端のピットは流出したと考えて、規模は桁行きでおよそ1.6m、梁間で3mを測る。建物であるという根拠は貧弱であるが、SB10にピットの大きさや規模、長軸の向きが類似していることから建物跡として復元した。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SB16（第74図）

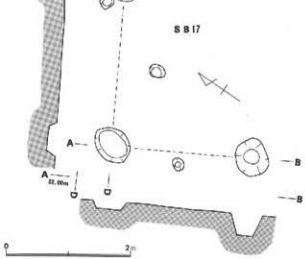
SB14・15の東側で検出された、2間×3間の掘立柱建物である。長軸は南北方向にほぼ平行に立地しており、柱穴の一部はSI07の溝と重なっている。柱間はほぼ均等で、梁間2.2m・桁行き2.8mを測る。従って全長は梁間方向で4.5m、桁行き方向で8mを測り、遺跡で検出された全形のわかる掘立柱建物の中では最大の規模を誇るものである。柱穴はおよそ直径45cm・深さ20cmを測るが、梁間部の中央のピットは他のピットに比べて大きい傾向がある。

また、SB16の床面南側のP226内から、弥生時代後期後葉の鼓形器台の破片が検出されている（第75図）。口縁部外面に櫛状工具による直線文が施されており、遺跡から検出された土器の中では最古の部類になる。しかしながら、出土したピットに対応するピットが不明瞭であり住居跡になるのかは定かでない。

SB16出土遺物（第76図）

P2より須恵器の壺が出土している。ほぼ完形であるが口縁部を欠き、底部から胴部にかけては若干の張りをもちながら直線的に立ち上がる。底部には糸切り痕が明瞭で、胴部外面には三筋文を意識した3条の沈線が巡っている。この壺はピット内から、口縁を下に底部を上にした状態で検出された。これが意図的なことなのかは不明瞭であるが、わざと口縁を欠いてピット内に逆さまに納めた可能性も考えられる。

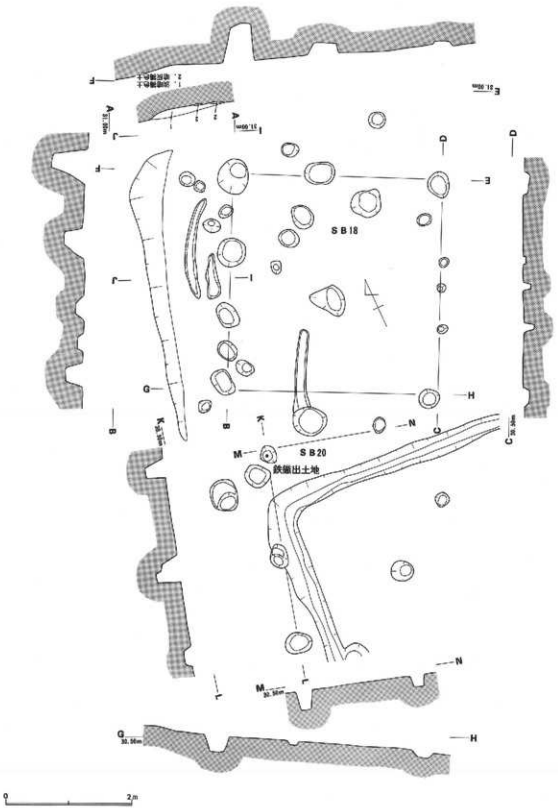
壺の時期はおよそ10世紀代から11世紀



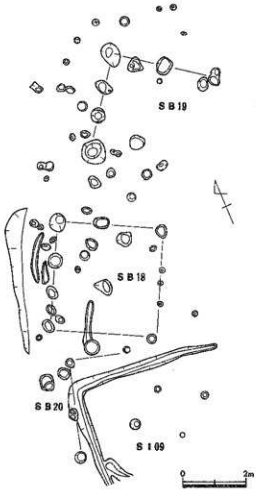
第77図　SB17平面図（S＝1／60）

代と思われ、ＳＢ16もその時期に比定される。

ＳＢ17（第77図）



第78図　ＳＢ18・20平面図（Ｓ＝１／60）



第79図　ＳＢ18～20及び周辺遺構配置図
（Ｓ＝１／120）

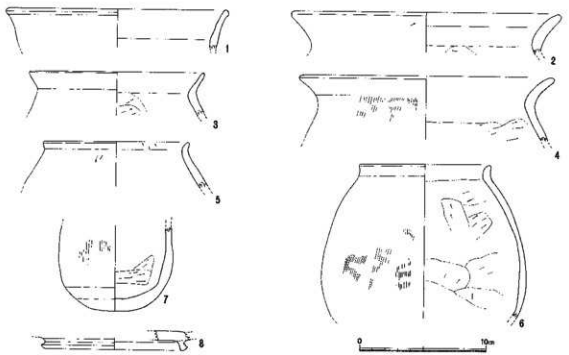
ＳＢ16とＳＢ08の間に分布している、直径40～50㎝のピット３点から復元した１間×１間の掘立柱建物である。東端のピットは流失したものとして、桁行き2.5m・梁間2.2mの規模となる。柱穴の深さは一定でなく掘立柱建物である根拠に乏しいが、ＳＢ10やＳＢ15に柱穴の大きさや配置が類似することを考慮して復元したものである。これにより、遺跡内で検出された１間×１間の建物跡は全部で５棟となった。ピットからの遺物がなく、他と同様に時期は不明である。

掘立柱建物群ＳＢ18～20（第79図）

ＳＩ09が位置している平坦部南東端付近で、南北方向に並列して掘立柱建物が３棟ほど検出された。これらは検出順に真ん中の建物をＳＢ18、北側のものをＳＢ19、南側をＳＢ20とした。以下個別に詳細を述べる。

ＳＢ18・20（第78図）

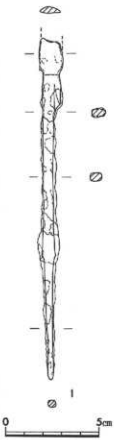
ＳＢ18はＳＩ09のすぐ北側に位置している、２間×３間の掘立柱建物である。長軸は南北方向と若干ずれており、規模は桁行き方向で3.5m、梁間方向で3.3mを測る。柱穴は大きいもので直径



第80図　ＳＢ18出土土器実測図（１：３）

50cm・深さ60cmを測るが、建物の西側桁行きの柱穴は流失しているとはいえかなり小さい。建物の西側には加工された段があり、斜面を平坦に成形して建物を造成したと思われる。その加工面と建物の間に幅15cm程度の溝が2条みられる。加工段の壁帯溝の残存とも考えられるが、柱列と角度が異なっている。また、建物の南側にも直線状に延びる小溝がみられる。これらは別の建物に伴う壁帯溝とも考えられるが、この溝に対応する柱穴の並びは不明瞭である。

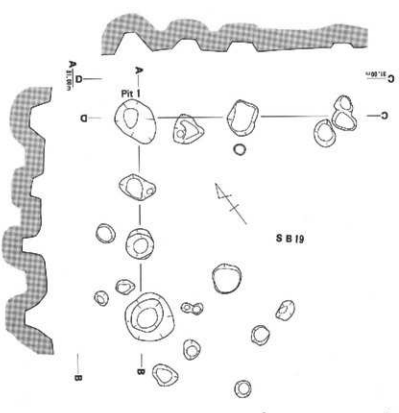
ＳＢ20はＳＢ18のすぐ南側に隣接しており、ＳＩ09と切り合っている。柱穴は4点しか確認できず、現状で1間×2間の建物が復元できた。ＳＢ18とは若干角度を違えた柱列配置で、規模は桁行き方向で3.1m、梁間は1.8mを測る。柱穴はおよそ直径・深さとも30cm前後を測り、ＳＢ18と比べて若干小さい。また、遺物は北東端のピットより鉄鏃が出土している。



第81図　ＳＢ20出土鉄鏃実測図（1：4）

ＳＢ18出土遺物（第80図）

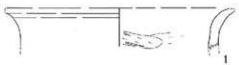
加工段の壁際付近から遺物が検出されている。1～4は土師器の甕である。1は複合口縁の口縁部と思われ、器壁は薄手で端部は屈曲している。古墳時代前期のものである。2～4は単純な口縁がくの字状に外反するタイプである。3は口縁が若干内傾気味に立ち上がる。いずれも色調は淡い黄褐色を呈している。5・6は壺である。頸部が窄まり、短い口縁が直立気味に立ち上がる。体部は肩部が張らず。最大径は胴部下半にくる。7は底部のみで器種は定かでないが、丸底を呈し体部は直線状に立ち上がる。無頸の小型壺であろうか。2～7は色調や胎土が類似しており同時期と考えられ、およそ古墳時代後期以降のものであろう。8は須恵器の坏底部の小片であり、高台がつく。8世紀代と思われる。1・8は流れ込みの可能性が高いと思われるので、ＳＢ18の時期はおよそ6世紀後半から7世紀代と考えられる。



第82図　ＳＢ19平面図（Ｓ＝1／60）

ＳＢ20出土遺物（第81図）

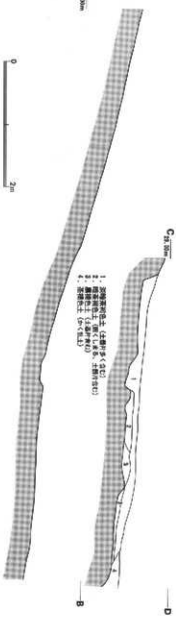
ピット内より鉄鏃が出土している。鏃身部が短く頸



第83図　ＳＢ19Ｐｉｔ１内出土土器実測図
（１：３）

部が長い長頸鏃である。鏃身部の先端を欠くが、現存長18㎝・篦被部長7.8㎝・茎部長6.5㎝を測る。幅は鏃身部が1.2㎝、篦被部が0.6㎝、茎部が0.4㎝を測る。断面は鏃身部が片丸造、頸部は方形、茎部が円形と思われる。頸部と茎部の境に台形の関部がつく。鏃身部の平面形については、先端部を欠くが長三角形と考えられる。また、鏃身部の関部は直角関を呈しているが、鏃身関部下方の右側部も直角関状の膨らみがみられる。この付近は錆の付着が著しく不明瞭であるが、レントゲン写真を観察すると、この膨らみは逆刺であることが確認できた。

この鉄鏃の時期について考えてみたい。本資料のように長頸鏃の頭部に片逆刺がつくタイプは、県内では例がみられないようである。[20] 杉山秀宏氏の論考[21]によると、本資料は氏の分類するＢ形式－第３形式－Ｂ類に相当する。このタイプは古墳時代中期のＴＫ73形式頃から出現し、後期のＭＴ15・ＴＫ10形式を下限とするようであり、従ってこの鉄鏃は古墳時代中期中葉から後期前葉に位置づけられるといえる。



さてＳＢ20の時期であるが、ＳＢ20はＳＩ09を掘り込んで造成していることが明らかである。ＳＩ09は古墳時代中期中葉であり、必然的にＳＢ20の時期はそれ以降となる。ＳＢ20に隣接するＳＢ18は後期以降と考えられるので、ＳＢ20の所属時期は古墳時代後期前半と比定しておきたい。

ＳＢ19（第83図）

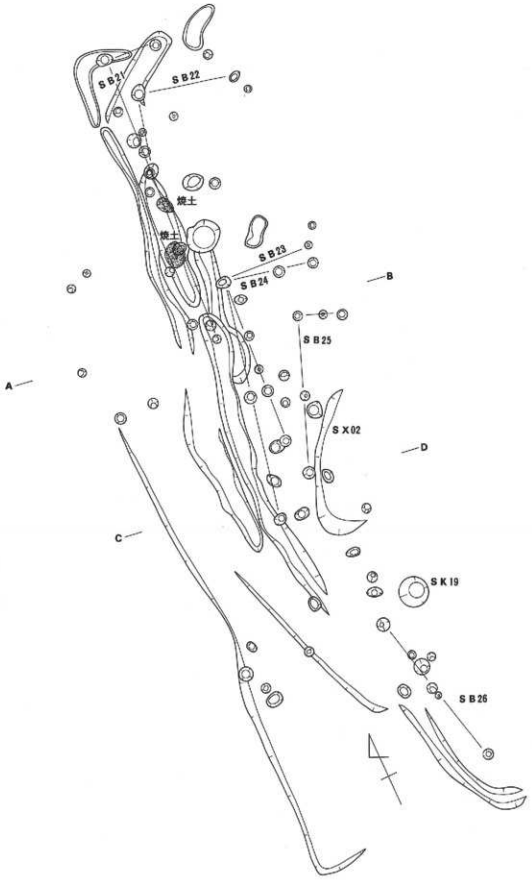
ＳＢ19はＳＢ18のすぐ北側に隣接している。建物の南側は流失しているが、２間×３間の掘立柱建物が復元できる。規模は桁行き方向・梁間方向とも約3.2mを測り、ＳＢ18とほぼ同規模である。柱穴はコーナーのピットが大きく掘り込まれる傾向があり、南端のピットは直径80㎝・深さ45㎝を測る。

ＳＢ19出土遺物（第84図）

北端のＰ１より土師器甕の小片が検出されている。口縁が大きく外反するタイプであり、色調は淡い黄褐色を呈する。およそ古墳時代後期以降と思われる。出土遺物はこれ１点のみであり、ＳＢ19の時期を示しているかは判別が非常に困難である。

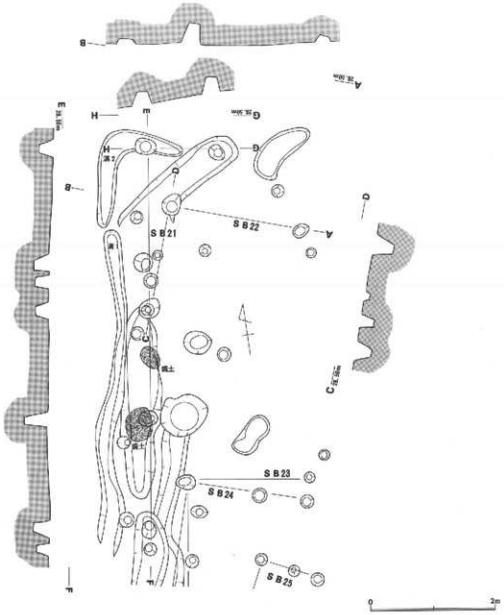
これら３棟の建物群の配置をみると、いずれも長軸の方向や建物の間隔が一定であり、何らかの規則性をみることができる。ＳＢ18とＳＢ20は時期が異なるが、ＳＢ18とＳＢ19は住居の形態が類似しており、２棟の建物は同時期に建てられていた可能性が高いといえよう。

掘立柱建物群ＳＢ21～26・ＳＸ02（第85図）

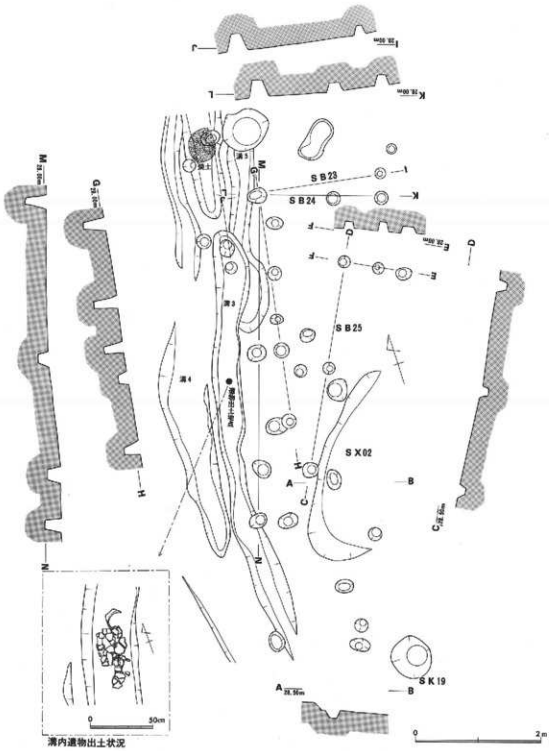


第85図　SB21～26・SX02及び周辺遺構配置図（S＝1／80）

これらの掘立柱建物群は、調査区の最東端に立地しており、標高はおよそ29mを測る。この周辺は全体図（第７図参照）をみれば一目瞭然だが、かなり大規模な開墾により平坦部が段状に１m以上削られているのである。そのため、付近は調査区の中でも１段下がるような形状を呈している。調査前の地形観察では、この段の壁面には礫が石垣状に組まれていた。また、調査後の観察では、大規模な地滑りにより地形が一段下がっている可能性も指摘されている[22]。つまるところ、この掘立柱建物群は、遺跡内で検出された遺構の中で最も後世の改変・変動を受けているといえる。そのため遺構の検出は困難で、調査時は明確な建物の単位を押さえることができなかった。従って、調査後の図面観察により掘立柱建物を復元したものも少なくない。周辺からは南北方向に平行した溝状遺構が９条検出されており、それに沿う形で掘立柱建物を６棟を復元してみた。また加工段状の遺構も１基検出されている。以下、個別に詳細を述べていく。



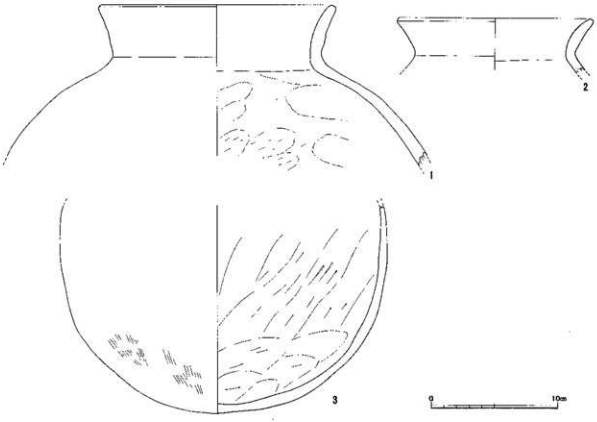
第86図　ＳＢ21・22平面図（Ｓ＝１／60）



第87図　ＳＢ23～25ＳＸ02平面図（Ｓ＝1／60　囲み内はＳ＝１／30）

ＳＢ21・22（第86図）

北側に位置するものをＳＢ21・22とした。ピット群の西側には南北方向に平行する形の溝が多数検出されている。必然的に建物群の壁帯溝と考えられるので、これに沿う形で建物跡が復元できるはずである。しかしながらすべての溝に対し建物が復元できた訳ではない。また、建物の前後関係はこの溝やピットの切り合いで判断していくことにした。



第88図　ＳＢ23溝３内出土土器実測図（１：３）

ＳＢ21は、幅およそ30cmの溝１に沿って復元した現状で１間×３間の掘立柱建物である。東側は流失しているので、梁間方向はまだ１、２間は延びると考えられる。規模は梁間方向で1.1m以上、桁行き方向で4.3mを測る。柱穴はいずれも直径30cm・深さ25cm前後を測る。

ＳＢ22は溝２に沿って復元した、１間×１間の建物跡である。規模は梁間方向で2.1m、桁行き方向で1.7mを測る。この溝２は直角に屈曲しており、また柱列もこれ以上延びる気配がみられないことから、このＳＢ22は掘立柱建物ではなく竪穴住居である可能性も考えられる。もしそうであれば、溝と柱穴の距離から復元して床面の規模は一辺3.4mとなる。しかしながら、竪穴住居である根拠に乏しいことから、ここでは掘立柱建物としておく。

いずれも柱穴にともなう遺物がみられず、時期は不明瞭である。ただ、ＳＢ21の北端ピットがＳＢ22の溝を切っているので、ＳＢ22の方が古いと考えられる。また、溝１と溝２の東側にも溝がみられるが、対応するピットが明らかにできなかった。その他、焼土も２点検出されたが、どれに伴うかは判別に難しい。

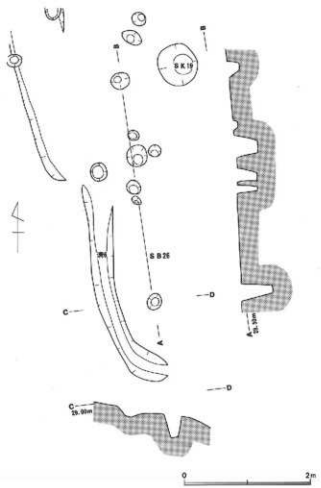
ＳＢ23～25・ＳＸ02（第87図）

ＳＢ21・22の南側、掘立柱建物群の中央付近に位置するものをＳＢ23～25・ＳＸ02とした。直線状に延びる長さ約７m・幅45cmの溝３があり、ＳＢ23はその溝３に沿って復元した。現状で１間×３間の掘立柱建物であり、規模は桁行き方向が4.5m、梁間方向が1.9mを測る。柱穴はいずれも直径21cm・深さ36cm前後を測る。溝３内より土器が検出されており、これらの掘立柱建物の時期を考える上で興味深い資料となった。

ＳＢ24は溝３の西側の溝４に沿って復元した。現状で１間×２間の掘立柱建物であり、北端の柱穴はＳＢ23と共有する形となった。規模は桁行き方向で5.1m、梁間方向で1.9m以上を測り、桁行き方向がＳＢ23と比べて若干長い。また、柱穴の大きさはＳＢ23とほぼ同様である。柱穴より遺物は出土しておらず時期は不明瞭である。

ＳＢ25はＳＢ23・24の東側に復元した１間×２間の掘立柱建物である。東側は流失しており、梁間は１、２間延びるだろう。しかしながら、対応するような溝がみられず、あえてあげれば溝５となるが位置的に不自然にみえる。規模は桁行き方向で3.3m、梁間方向で0.8mを測る。ピット内より遺物は出土していない。

ＳＸ02は東端で検出された加工段状の遺構である。遺構の大半は流失しており、平面形は全体的に湾曲気味の不正な形態をを呈する。現状で掘り方の規模は深さ13㎝、長さ3.1m、幅１mを測る。竪穴住居のようにも見受けられるが、壁帯溝はなく床面検出のピットも明確な並びを示さないことから性格不明遺構とした。床面より遺物は出土しておらず、時期は不明瞭である。



第89図　ＳＢ26平面図（Ｓ＝１／60）

ＳＢ23溝３内出土遺物（第88図）

ＳＢ23に伴う溝３内より、土器が押し潰された状態で検出されている。いずれも土師器で、形になるものは３点復元できた。１・２は甕の口縁である。１は口縁が逆ハ字状に外反し、頸部には膨らみがみられる。肩部には若干張りがみられ、胴部は球状になると思われる。器壁は厚手で、色調は淡い茶褐色を呈する。２は口縁がくの字状に外反する。器壁は厚手である。３は底部である。底部から胴部にかけて球形を呈している。１と３は同じ形態を示すが、器径が異なり同一個体ではないようである。これらの時期であるが、口縁は複合口縁を示さずとも大きく外反するタイプではない。さらに胴部も球形を呈するので、おおよそ古墳時代中期後葉から後期前葉に位置すると思われる。

さて、ＳＢ23～25およびＳＸ02の時期であるが、ＳＢ23はおおよそ上記の時期に比定される。これを中心に組み立てると、ＳＢ24の南端ピットは溝３の上から掘られているので、ＳＢ24はＳＢ23より新しい可能性が高いといえる。また、建て替えの度に建物は高い位置に移動するとすれば、ＳＢ25とＳＸ02はＳＢ23より古くなると考えられる。